傳へたり。前に顯せし永祿三年の感狀にも、五十嵐市左衞門といへる名を注したり。何れも其氏族の徒なるべし。此故に今も此地に五十嵐氏の人尤も多し。（按ずるに、五十嵐小文治は和田合戰に、朝比奈義秀に討れたる人なり。是を混じて土人あやまり傳へたる歟。）

八幡宮　同所二町ばかり北の方にあり。神主宮崎氏奉祀す。祭神本多別命一座。相傳ふ、建長四年癸子八月十五日勸請せりと云ふ。本地佛は阿彌陀如來にして、黃金佛御丈四寸八分ありて、弘法大師の作なりといへり。（背面は假面の如く、凹にして甚古色なり、按ずるに、世俗後光佛と稱するもの是なり。）然るに天正年間野火の爲に神殿烏有となれり。此時に至り本尊失せ給ひて、其所在を知る人なし。仍て此地の領主立川宮內某の室此事を深く歎き思ひ、新に彌陀像一軀を鑄て當社に收らるゝとぃへり。（其佛體の背面に銷る所の文次に記せり。按ずるに、新像の膝に梅鉢の紋あり、疑ふらくは、立川氏の家の紋なちん歟、或は其室の家の紋なちん歟。）其後寶永年間宮社を造立せんとせし時、境內松の枯株の根を穿て、鋤下に失ふ所の本地佛金像の彌陀如來を得たり。（其時の鋤の刃の跡尊像の御胸に印せり。）又安永五年の夏賊の爲に奪はるゝといへども、靈威あるを以て、同年八月四日再び當社に還座なし給ふとなり。

天正年間新造立所之本地佛之銘曰

武州多東郡立河鄕芝崎村八幡本地并興願主立河宮內おねか

于時天正拾四甲戌年三月十五日　　本願大夫式部

大工椎名土佐守

後光鏡之銘曰

武州多磨郡立河鄕芝崎村八幡宮　　鏡一面

爲家內安全　　五十嵐與八郎

元文四年己未八月

醫王山萬願寺　同所南の方四十步斗を隔つ。黃檗派の禪庵にして、鉄牛禪師居住の草庵の舊跡なりしを、後に一字の蘭若となせしといふ。本尊藥師如來は坐像三尺斗、惠心僧都の作にして、脇士に日光月光十二神將等の像を安ぜり。

額　本堂向拜に掲ぐ。南岳悦山の筆。

醫王山

額　堂内家形に掲る當寺中興別筆且筆

東光院

聯　左右の柱に掛る黄壁高泉の筆なり

諏訪社　八幡宮より六十歩斗東にあり。祭神建御名方命一座。相傳ふ、弘仁二年辛卯七月廿一日に勸請せしといふ。當社も宮崎氏兼帶奉祀す。

多摩川　當國第一の勝槩とす。

稱せしより、かく文字をあらためたりしなるべし。此川は武甲の堺丹波山に發し多摩郡の丹波村に繞て流るゝ故に多波川とはいひたるなり。日蓮上人注畫賢大士願終の時池上に移り給ふ條に、武藏國田波河の邊にして滅を示すべしともみえ、又北條家の分限帳にも多波川とあり。

和名類聚抄多摩に作り太婆と訓ず。萬葉集多麻に從ひ、武藏國風土記殘簡多摩とす。後世玉に作るものは山城、攝津及び紀伊、近江、陸奥等の國々にある所の玉川と共にあはせて六玉川といふ。

水源は甲州丹波山に發し、田澤義章の武藏野地名考に、此丹波山を武藏とせしは誤なり。當國多摩郡に入ては日原川も會流す。多摩郡日原山小菅山等の山谷より發すと云ふ御嶽山の麓を經て、青梅の南に傍ひ、羽村四谷上水の樋口あり。及び福生拜島等の地に至る。又此地にて秋川の流も落會ひ、甲州境の地より發して、多摩郡伊奈村五日市村等の邊に傍て流るゝもの秋川なり又石田と云に至り淺井川も合し、八王子の山間より出たり。和泉村中島村等の地より末は、多摩、荏原、橘樹、三郡の間を東流し海に會せり。橘樹郡の方は

豐戸、二子、小杉、平間、河崎、等の地に傍ひ、荏原郡は、瀬田、等々力、下丸子、矢口、八幡塚、羽田、等の地に傍ひて流れたり。甲州國境より當國多摩郡羽村迄十餘里、羽村より六郷迄十六里と云ふ。武藏野地名考に、周流する事、凡そ四十里とあるは水源よりの行程なるべし。

萬葉十四

多麻河泊爾左良須氐豆久利佐良左良爾奈仁曾許能兒乃己許太可奈之伎

此歌を拾遺集戀の四には、よみ人しらずとありて、玉川にさらす手つくりさらさらにむかしの人の戀しきやなぞ、とあり。又六帖には、昔の今に戀しきやなぞともあり。

拾遺愚草

調布やさらす垣根の朝露をつらぬきとめぬ玉川の里　定家

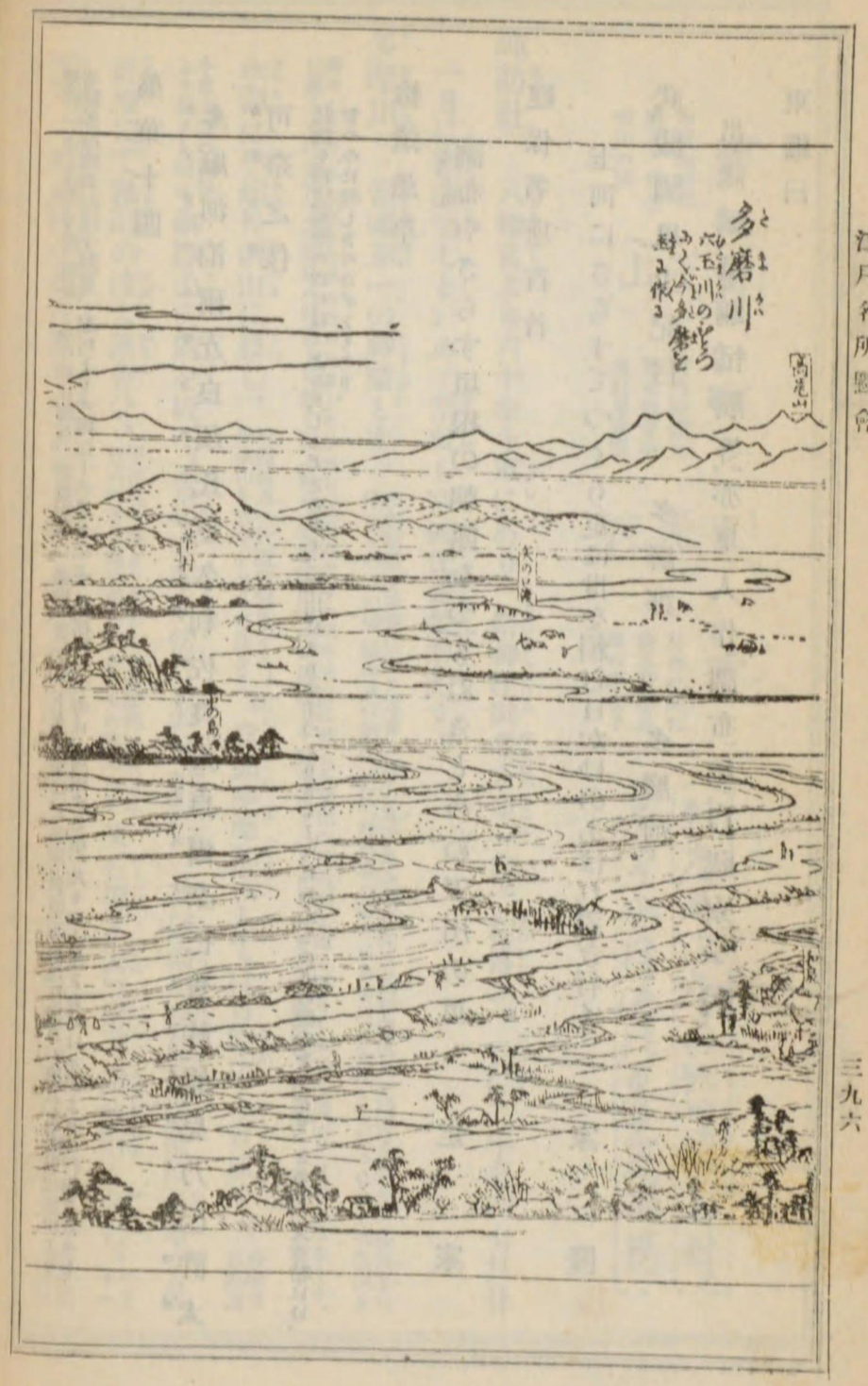
建保名所百首

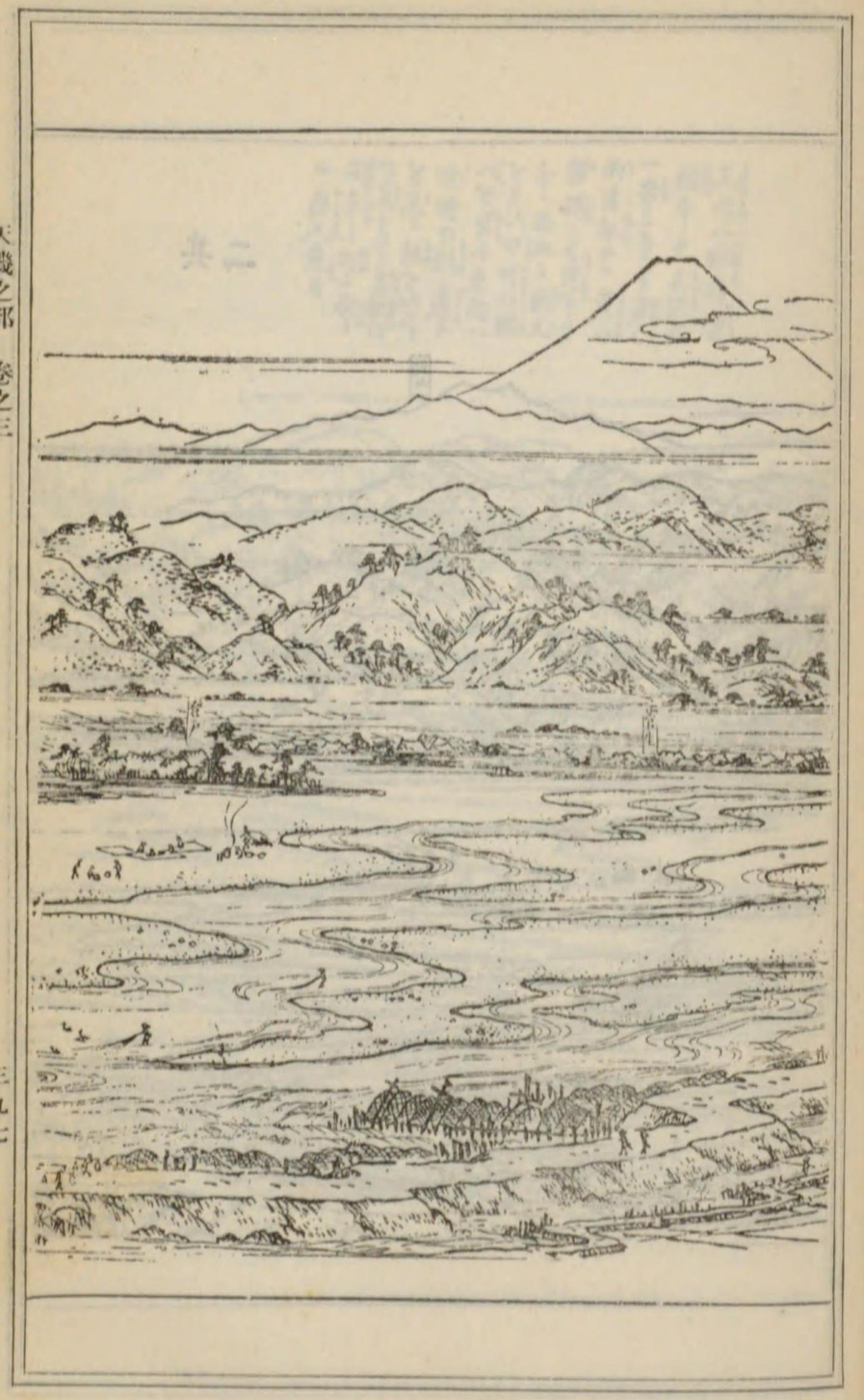
玉河にさらすてつくり更に世を賴む日かげのあはれ過ぎ行く　家隆

武藏國風土記曰　多磨郡　多磨河

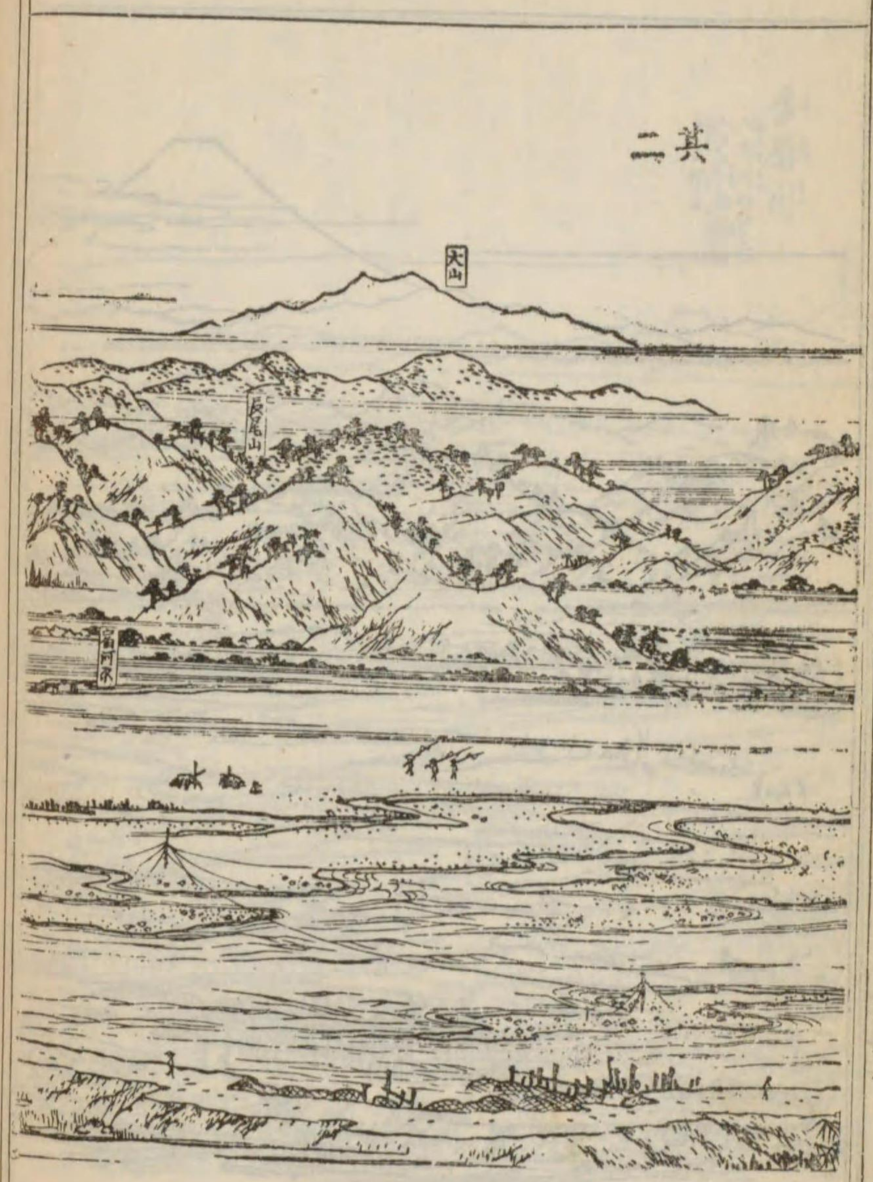
出諸鱗及鵰鶚鵠等。亦里人作調布。納内藏寮。云云。

東鑑曰

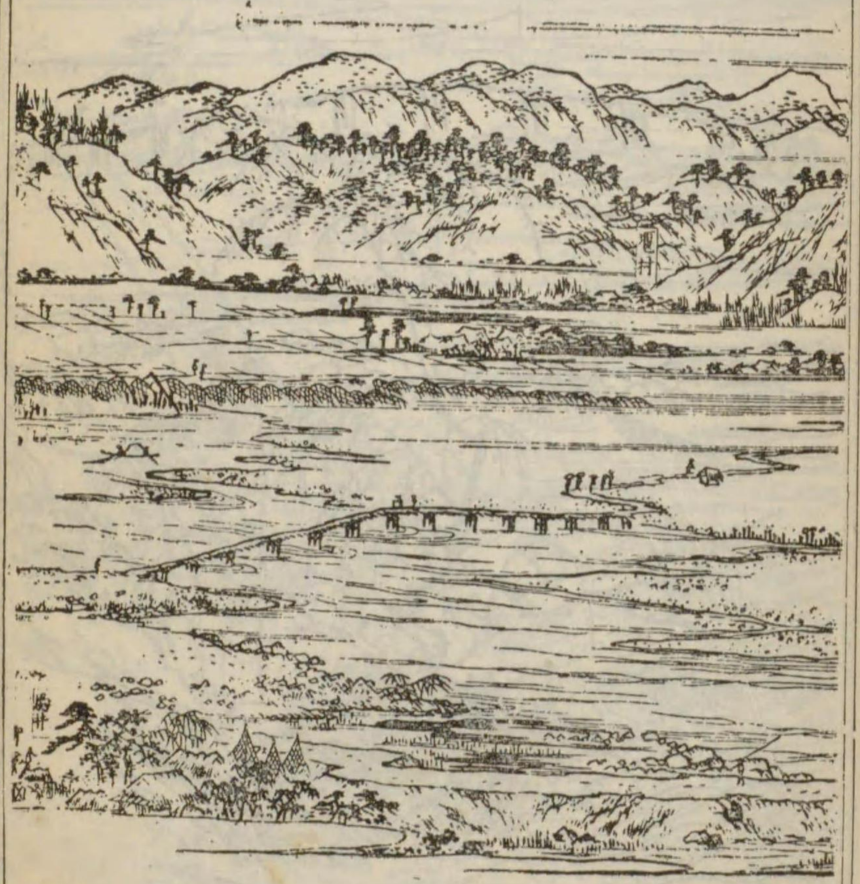

多摩川
六玉川の一なり
ふくゆう多摩を
縣と作る
高尾山

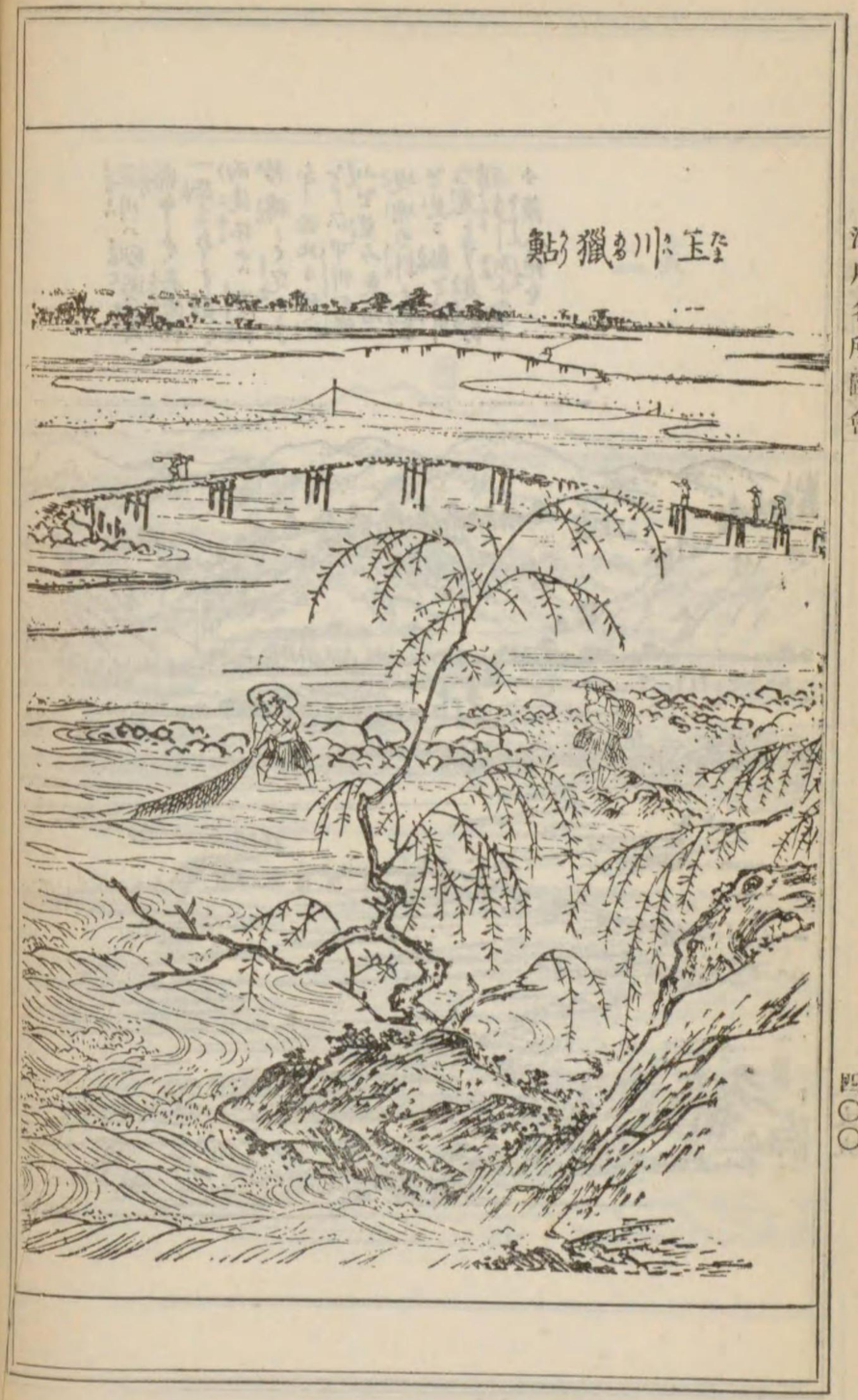


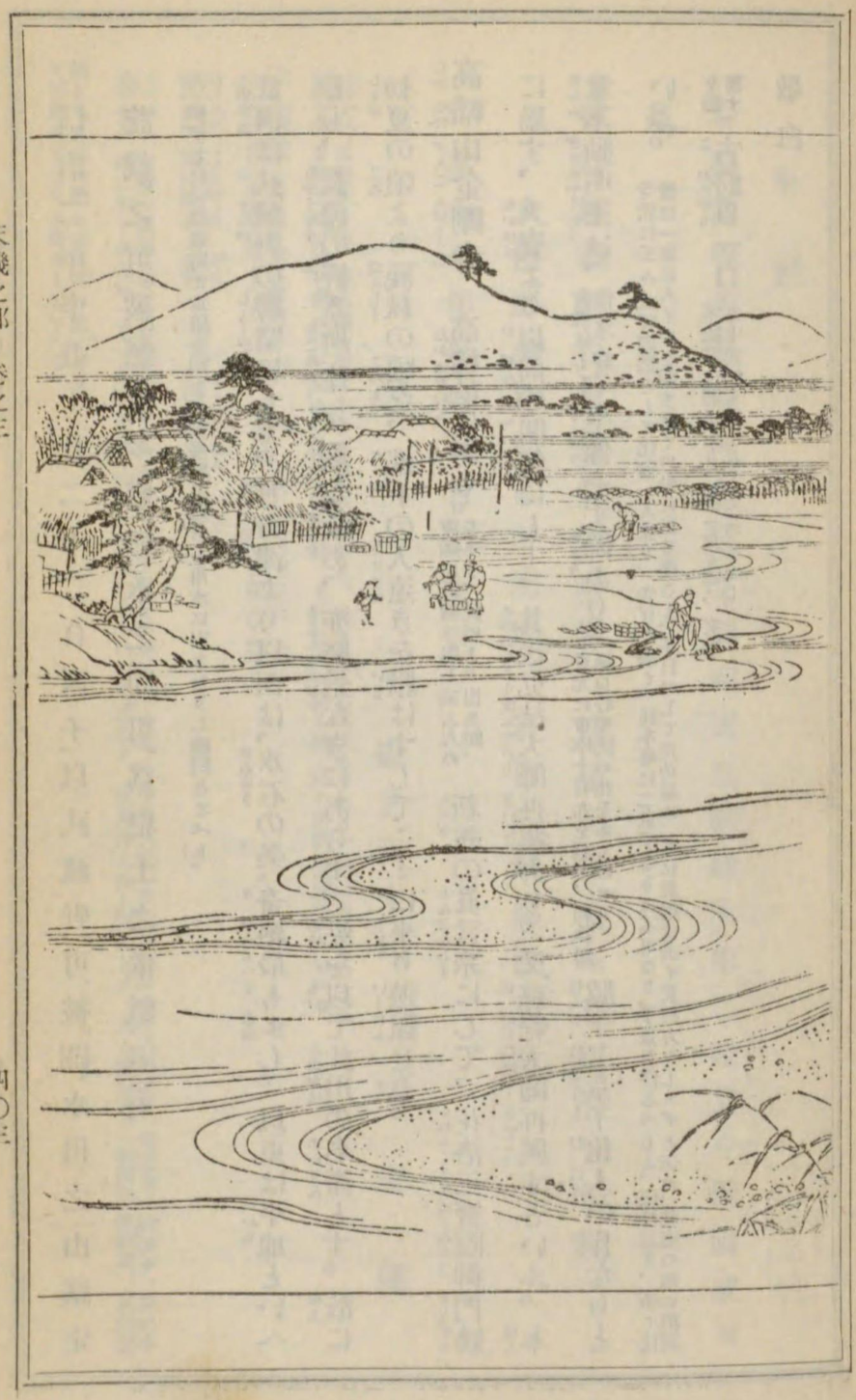
其二



玉川ハ砂場廣
闊ゆゑ其流れ
一帯まあらす多く
雨後杯ハ渡口
移轉して定
なし西北ハ秩父
をよひ甲州の諸
山を望み東南ハ
堤塘の斜に連る
を見る鮎と山川
の産とす夏秋の
間多しかふ常
ハ漢人絶せ




玉川の獵鮎



仁治二年辛丑十月二十二日丙子。以武藏野可被闢水田之由議定訖就之可被懸上多磨河水之間。可爲犯土之儀歟。云云。

按ずるに、武藏野に水田を闢き、又多摩川の水を用水に引きたりし權與なるべし。

此河は武藏野の勝槩にして、日野津より以西は、水石の美、奇絶最も多し。以東は平地といへども、長流の經る所往々觀を改め、亦勝景なきにあらず。鮎を以て此川の名產とす。故に初夏の頃より晩秋の頃迄、都下の人遠きを厭はずしてこゝに來り遊獵せり。

高幡山金剛寺

高幢邑にあり。東鑑に高幡三郎と云ふ人の名あり、此所より出る歟。

新義の眞言宗にして、花洛三寶院御門跡に屬す、大寶より以前の開創にして、其後弘法大師再興あり。又慈覺大師再興すといふ。本尊不動明王は、古佛にして作不詳。坐像一丈餘あり。炎光に布字十有九を刻し、利益無邊自心堅固の相をあらはせり。脇士二童子化人の作なりといふ。寺記に云ふ、或時忽然として化僧一人來り、告げて云く、此本尊に二童子なきは不可なり、予是を作るべしと。住持諾す、依て化僧は一室に入て戸を閉ぢ敢て戸外に出る事なし、不日にして造功畢ぬ、竟に異僧は去て其行方をしらずと云々。其室の地に稻荷を勸請す。古鰐口一口 不動堂に懸けたり、徑一尺九寸、文字九十四字を刻す。其一左のごとし。

敬白

奉懸

右尋當寺者。慈覺大師建立。淸和天皇御願所。第二建立斗圓陽成天皇。

彼時賴義朝臣。自於登山奉崇八幡。第三建立永意得行聖兩檀。

大檀那美作助眞幷記氏一宮田人鍋師源恒有

文永十年癸酉五月二十日

銀念西守氏　鐵　青　蓮

服石 不動堂の後、愛宕祠の傍にあり。巾六尺ばかり、高さも五六尺ばかりあり。□あるもの此石を拜すれば穢に觸れずといふ。故に忌明の時、土人此石に詣て後、諸の佛神に參詣すといへり。

二王門 左右に金剛密迹の像を置きたり。額 高幡山 僧正泊如の筆

惣門 二王門の左に竝ぶ。額 高幡山 僧浩然の筆

鼻井 堆裡の前左の方の山の裾にあり。廣サ七尺斗の井泉を云ふ。相傳ふ、建武二年乙亥八月四日の夜大風發り、鄙堂忽に顚倒す、故に平地に引下すといへり。其頃本尊の御首の墮ちたる所に淸泉涌出す、後鼻井と稱し阿伽とす。諸人寒熱の二病腫物眼疾等、其餘諸病ともに或は飲み或は痛む處に塗りて平愈せずといふ事なしといへり。

高幡不動堂

鎌倉大草紙に曰く、享德四年正月二十一日武州府中分倍川原へ寄來る、成氏五百餘騎にて馳出で、短兵急にとりひしぎ、火出る程に攻戰ひける間、上杉方の先手の大將右馬助入道憲顯深手負て引かねけるが、高旗寺にて自害す。鎌倉勢も勝軍はしけれども、石堂一色以下百五十人討死して戰ひつかれ、分倍河原に陣を取る云々（高旗寺といふは當寺の事をいふなるべし。）緣起に曰く、平山武者所季重幼より當寺の不動尊を崇敬し、世に强勇の名を顯せり、治承の頃平家追討の時も、鎌倉の右大將家に屬し、義經に隨ひて西國に赴き、一の谷に勇を輝し、武名世に明けし。故に其後當山の頂に、此本尊の御堂を建立す。然るに建武二年乙亥八月四日暴風の災に罹て、殿堂破壞す。依て後平地にうつせり。其頃の財主は平助綱、及び大中臣女等なりといふ。爾來天下風水或は疫癘等の諸災あらんとする時は、佛體汗を生じ給ふとなり。其威靈は枚擧すべからず。

木切澤（金剛寺より半町ばかり西の方の谷を云ふ。平季重御堂建立の時、此所より、堂材を伐出したる舊跡なりとテひ傳ふ。）

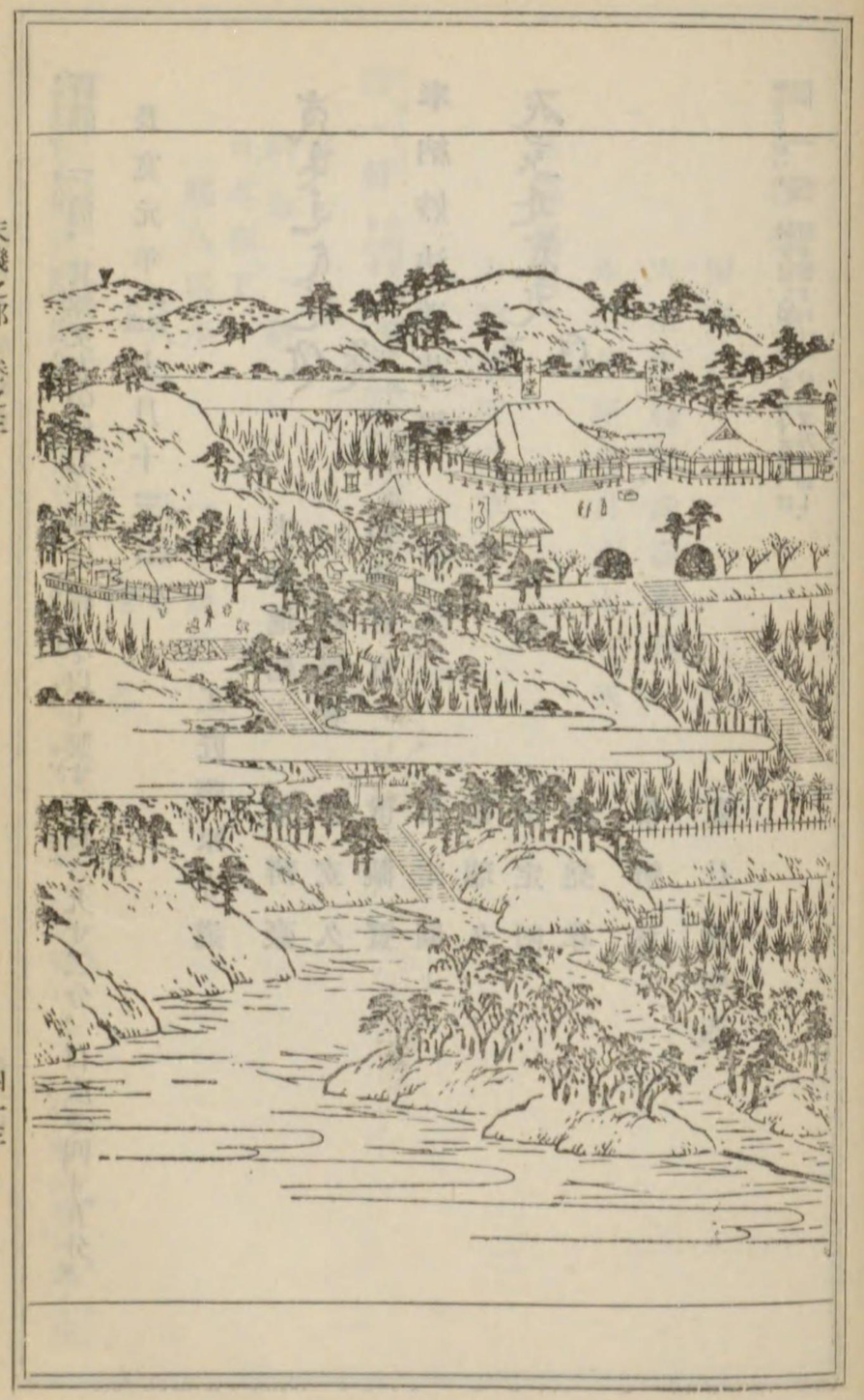
番匠ケ谷（同じく一町ばかり西へ入る谷を云ふ。是も季重御堂建立の時、番匠の創彫の地なりといひ傳へり。）

別旅明神　金剛寺より三町ばかり東の方、別旅邑にありて、此地の產土神とす。則ち金剛寺奉

祀の宮社たり。傳へ云ふ、金剛寺の本尊不動明王の脇士二童子を彫刻せし異僧、その像を造り終るの後、立去らんとす。近里の道俗喜悅のあまり、其跡に隨ひて此地まで來りけるに、件の異僧は忽にみえずなりぬ。貴賤奇異とし、此地に一社を建立し、別旅明神と稱す。地名も又別旅邑といふとぞ。

平惟盛之墓　金剛寺より一町ばかり西南、平村（平山村に隣れり。）農民又右衞門といへる人の構の中にあり。青き一片の板石にして、高さ七尺五寸あまり、巾二尺程、厚さ二寸斗あり。上の方にきりて字を彫り、下に文永八年辛未中冬日とあり。土人相傳へて平惟盛の碑なりと云ふ。往古此地に平助綱と云ふ武士住めり、平氏の遠裔なれば、惟盛の菩提を弔はんが爲に是を造るか。（年歷尤もあらし。）或は又助綱が墓なりとも云ふ。同じ南の方二町斗山を登りて中腹に、又古碑あり。剝落して讀べからず。只今の一字のみ鮮明なり。高さ六尺餘り巾二尺ばかり、下は土中に埋む。其餘古石塔二基、何れも高さ四尺斗あり。土人平山季重或は又平氏の人の墳墓とも云ひ傳へて分明ならず。（此所は農民平氏某が家舊世の壁城なり。康正年號の碑等もあり。）此地邑名を平と稱し、殊に平氏の人多し。里正平氏の家に、小田原北條氏直の下文ありといへり。

慈岳山松蓮壽昌禪寺　高幡より十二町斗東南の方、百草邑にあり。（昔は茂草に作る。八幡宮社地に源頼義義家兄弟、奥州征伐凱陣の時山號升井を改て增盛とすと云々。）黃檗派の禪林にして、江戸白銀の瑞聖寺に屬せり。昔は天台宗にして、增井山と號す。天平年間道璿の高弟釋道廣大勸進し、始て七堂全備の精舍を創建す。其後康平五年伊豫守頼義奥州下向の時、此地をよぎり給ひ、松蓮寺に投宿し、八幡宮を再興ありて、朝敵追伐の御祈願あり。又建久年間頼朝卿以來源家累代の祈願所に定られ、建長七年當寺の住持祐慶、相州より琳長師を請じて禪院に改むるといふ。慶長十五年松蓮寺方丈建營の棟札あり。本尊釋迦佛、坐像三尺斗あり。脇士は阿難迦葉の立像三尺なり。佛師藤村中圓彫造する所なりと云ふ。（中圓は華人にして肥前長崎にありしとなり。）中興開山は慧極和尙と號せり。（享保六年辛丑八月廿四日示寂。）享保二年丁酉大久保加賀守忠英侯の夫人壽昌院殿慈岳元長尼中興開基たり。（元長尼は享保六年癸巳染して壽昌院慈岳と稱す。當に三寶を恭敬し貴に當寺を再興せらる當寺に。四十五才の木像あり。）本堂內陣の額松蓮壽昌禪寺の六大字、及び總門の額慈岳山等は、何れも中興開山明慧極の筆なり。本尊の前に揚げたる紫金光の額は、隱元禪師の書なり。

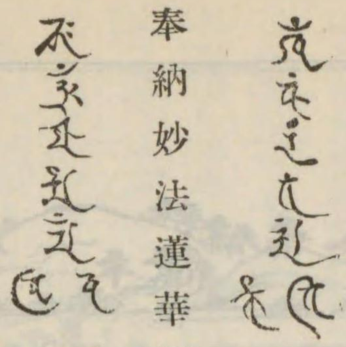


茂草
松蓮寺

經筒三箇、其銘文左の如し。一は銅を以て製す。長さ九寸二分、口廣さ四寸五分。

長寛元年大歳癸未十月十三日庚午

工匠藤原守道



大勸進聖人　僧辨豪
結緣者　僧玄久
如法書寫　僧觀賢
奉納妙法蓮華經　僧定圓
僧瑞久
僧定阿
僧堯尊
僧辨意
願仕僧樂西

同一箇　銅を以て製す、長さ七寸五分、口廣さ渡り四寸一分其文左の如し。

大勸進
僧堯尊
大檀主藤原氏滿貞刋
永萬元年九月十七日天
其蓋裏曰
大勸進所百草村
松連寺

同一箇　金銅を以て製す、長さ五寸口渡り三寸一分、其文左の如し。

承
鈞命　祈
日本幕下　一宮別當
建久四年　松連寺
八月　修之

八幡宮本地佛阿彌陀如來の像金銅一尺四寸あり。土中出現の物にして、佛躰の背に鐫る所

の銘文あり。左の如し。

敬白治磨金銅影像法體彌陀坐光三尺六寸

奉爲皇帝　日本主君　當國府君　地頭名主
御願圓滿　安穩泰平　信心法主　子孫平安
悉地成就　師長父母　二親亘魂　助成合力
同共往生　乃至法界　平等利益　建長二年
大歲庚戌　孟夏之天　七日壬子　南閻浮提
日本武州　多西吉富　眞慈悲寺　施主源氏
願主佛子　慶祐敬白

按ずるに、當寺の彌陀佛官面の銘文に、眞慈悲寺の號を注せり。東鑑文治二年二月三日の條下に、武藏國眞慈悲寺は、御祈願の靈場なり、然りといへども、いまだ莊園寄附なきにより、佛は供具の備なく、僧は衣鉢の貯を失ふ、爰に僧あり、今日參上して當寺に一切經を安置し、破壞を修理すべきの旨申請の間、院主職に補せらるゝとあり。又同書建久三年五月八日の條下にも、法皇四十九日の御佛事を南御堂に於て修せられ、百僧供あり、僧衆は眞慈悲寺より三口とあり。又同書治承五年四月二十日の條下に小山田三郎友成多摩郡内吉富竝に一宮莊光寺等の地を自の所領に注し加ふるなどあるによれば、吉富は此邊なりとおぼし。されども眞慈悲寺いつの頃廢せしや、今は其舊跡さへさだかならず。

八幡社記にいはく、建久四年鎌倉右大將家法華經を書寫し、金壺に入れて當社に納め給ふ。其書寫する所の竹紙法華經の文字、多くは朽敗して、僅に殘るのみ。

升井　本堂の後山麓にあり、寺中常に是を掬す、尤も清泉也。

八國見　本堂の後の山の上にあり。此所に登れば八箇國の山々みえわたる故に此號ありといへり。

二王塚　松蓮寺より東南五町ばかりを隔てたる、山間の、少しく小高き所に、松樹十株あまり繁茂せし地をさしてしか稱す。此下を新堂と字するは、古堂宇のありし地なる故に名とす。又寶藏と唱ふる地もありて、今猶礎石こゝかしこに存せり。古へ大伽藍ありしなるべし。今松蓮寺に收むる所の經筒、および自然銅一寸八分の觀音の像ならびに、石瓶、朽壞の刀劍數十柄、華皿等のたぐひは此所に穿ちて得たりといふ。

百草八幡宮　松蓮寺より西の方、山の中腹にあり。則ち松蓮寺奉祀の宮たり。八月十五日を以て祭辰とす、本社向拜の額八幡宮の三字は、梅小路大納言定福卿の筆なり。寺僧曰く、正殿に安置する所の神躰は、八幡宮、神宮、王仁、津戸明、神武内大臣、義家公等の木像なりと云ふ。相傳ふ、康平五年源頼義、義家兩公奥州の夷賊征伐の時、山城國男山正八幡宮の社壇の土を穿ちて、石瓶に盛來つて、一宇の社を造營して、此地に勸請なし奉り、願書等を收めらる。其後凶徒悉く平げ凱歌の時、再此地に至り給ひ、金銅の觀世音の像をも安置し、永く祭祀を不

朽に傳へんとす。此觀音の事は、松連寺の下に詳なり。又此か時五百石の祭田を寄附の事ありしと云ふ。且つ兩將軍の隨兵等も、各軍功を祈り、帶する處の刀杖を收め、神德を謝す。爾來鎌倉頼朝卿當社の神を崇敬なし給ひ、建久四年法華經を書寫し給ひ、金壺に入て奉納ありしかども、星霜を經て件の寶器散失せしを、正德年間二王塚の地を穿て、再び是を得たりといふ。寺僧云ふ、當社境内の檀木、枯るゝ後は悉く奥州の方へ向て倒るゝ事、昔より今に至てしかり。是當社の一奇事たりと云ふ。

一宮大明神社　百草八幡宮より十五六町北の方、多摩川の南岸一宮村にあり。大所宮よりは、西南一里あまりを隔つ。祠官新田氏太田氏兩家より奉祀す。祭神は天下春命なり。後瀨織津比咩及び稻倉魂大神を合祭して、三神一社三扉とす。祭神今は小野神社に同じ。舊事本記に、饒速日命地神二代天忍穗耳尊の子なり。此葦原の中津國に降臨し給ふ時、輔佐として隨駕し給る三十二神の其一神にして、卽ち三十二國に分降給ふ。其時信濃國へは天表春命、武藏國へは天下春命降臨なし給ひ、國を開き給ふと見えたり。社司相傳ふ、神代の昔當社下春命、此地に止り給ひし歟、或は又國の祖の神なれば後に國つ神たち之を祀り給ひし歟、今しるべきにあらず。社傳に一宮下春命小野宮村小野神社へ遷座ありて、倉稻魂命を配祀なし、小野神社三神となせしは、其時世詳ならず、然るに成務天皇の御宇、國造兄多毛比命武藏國多麻の地に府を開き給ひし後、一宮は開國の祖神小野宮は同鄕の舊社なれば、國造崇敬ありて倉稻魂命と共に合せて、再び六所の宮の相殿に遷しまゐらせ　これを祀るに國社の禮を設けられしとなり。又毎歲五月五日六所宮大祭の辰、當社の

祠官、府中に至り一宮小野三所の神輿を供奉しまゐらせ、御旅所において捧ぐる所の神幣を持し、神輿歸社の折も又供奉して、六所宮に至り、神事終るの後件の神幣を守護して直に一宮に歸り、當社の内殿に收め、饗饗を供し祭奠をなすを舊體とするはもとつ社なればなりといへり。按ずるに、當社一宮の事、舊史に所見なしといへども、既に地名を一宮と號し、祠をも一宮と稱したるは、開國の祖神第一に鎭座なし給ふが故に、かく一宮とは稱したりしとぉぼしく、舊祠なる事、疑べくもあらざるべし。依て考ふるに、東鑑治承五年四月二十日小山田三郎重成平太弘貞が所領を自らの所領に注し加ふると云ふ條下には、多摩郡の内吉富、ならびに一宮運光寺等の地名を載せ、百草村松運寺所藏の建久四年の經筒には、一宮別當松運寺と銘せり。しかる時は建久のむかし松運寺當社の別當たりし歟。又高幡村金剛寺にいする所の、文永十八年の鰐口の銘にも、一宮田人鍋師源經有と有りて、一宮の地名往々見あたれり。

一本榎　一宮より南の方半町ばかりを隔てゝ耕田の中にあり、樹の本に注連を繞らせり。土人百草八幡宮の一鳥居の舊跡なりと云ふ。（其所より百草の八幡宮へは其間凡そ十町ばかりあり。）

横溝八郎墳墓　小山田舊關の地より一町あまり西南、道より右の方の畑の中にあり。塚上松槻等の老樹繁茂せり。太平記に、正慶二年五月十六日新田左中將義貞公武州分倍河原へ押寄るといふ條下に、四郎左近大夫入道（相模入道の舍弟にして惡性と號す。）大勢なりといへども、三浦が一時の謀に破られて、落行勢は散々に、鎌倉をさして引退く。討るゝ者は數を不知、大將左近入道も關戸邊にて已に討れぬべく見えけるを、横溝八郎踏止りて、近付く敵二十三騎時の間に射落し、主從三騎討死す。安保入道道堪父子三人、相隨ふ兵百餘人、同枕に討死す。（其外譜代奉公の郎從、一言芳恩の軍勢共三百餘人、引返し討死しける間に、大將四郎左近入道は其身恙なくして、山内迄引れけるとあり。安保入道父子の墓も此邊近きにあるべけれども、今しりがたし。關戸入口相澤氏の構の中に古墳あり、上に榧の古樹茂りてあり、されども何人の墓のしるしなる事しるべかちず。相澤氏の說に、安保入道の墳墓ならん歟といへども、今是非をしるべきにあらず。）

小山田關舊址　今關戸と稱するところ則ちこれなり。（或人云ふ、此地熊野社邊左右、高札場の地、其關の舊址なりと云ふ。按ずるに、此地に天守臺とゝふ所あり、此頂より眺望すれば、眼下に玉川の流を平臨し、又遙に上下野州迄一望に入りぬ。）多摩川の南岸にそひて、古へ府中より帝都、及び鎌倉への街道なり。東奥北越の二道、共に此地を往還せざるはなし。（小山田は、莊の名にして、此地も昔は同じ庄内にてありしなり。今は邑名にのみ殘りて、此所より二里ばかり南の方に小山田村と稱するこれあり。）

夫木抄

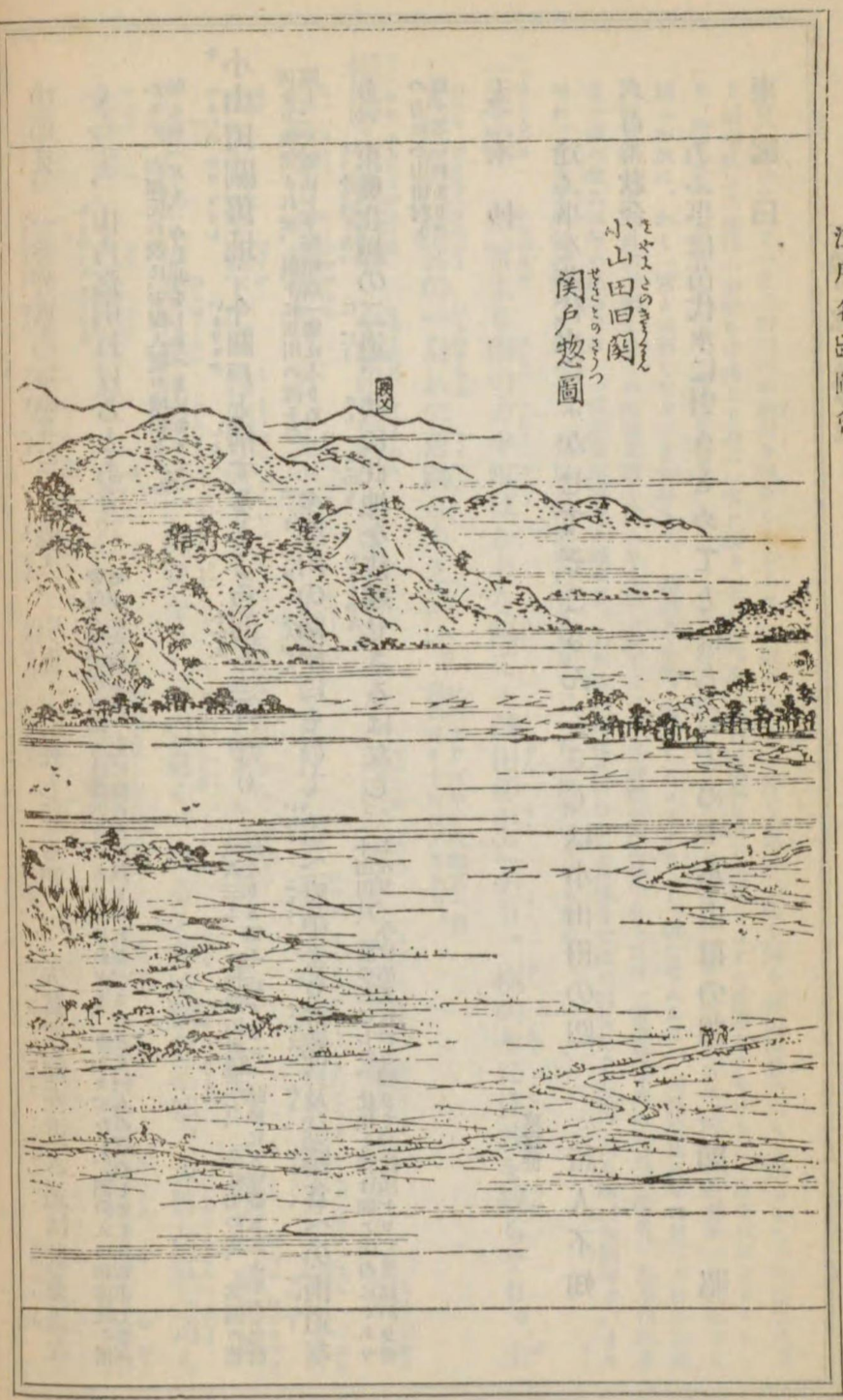
逢ふ事を苗代水にまかせてぞこさんこさじは小山田の關　　或爲世

六百番歌合

あふ事は苗代水に引きとめてとほしいでぬや小山田の關　　讀人不知

東鑑曰

小山田旧関
関戸惣圖



八百屋河合
苗代水
小山田の
夏
顕昭

治承五年四月廿日小山田三郎重成。聊背御意之間。成怖畏籠居是以武藏國多摩郡内吉富。竝一宮蓮光寺等。注加所領之内。去年東國御家人。安緒本領之時。同賜御下文。訖。而爲平太弘貞領所之旨。捧申狀之間。糺明之處。無相違。仍被付弘貞也。云云。

同書曰

建暦三年十月十八日以宗監孝尙。爲武藏國新關實檢被遣。圖書允濟定奉行。云云。

按ずるに、東鑑に載する所の武藏國の新關、其地名を注さず、恐らくは此小山田の關も其一ならん歟。小田原北條家の所領役帳に、小山田彌三郎小山田庄にて、成瀬、高ヶ坂、森、町田、眞光寺、鶴間、大谷、廣袴、小川、木曾、山崎、直ヶ谷、黑川、金森、金井、大倉等の地を領する由、注せり。又同書に、松田左兵助及び布施善三など、小山田庄内小野地ならびに粟飯原四ヶ村落合などありて、小山田庄の屬籍なる事をしるべし。武藏國の圖を以て考ふるに、此關戸は、小山田庄の咽喉の地なり、故に小山田の關の稱ある歟、關戸の里正相澤氏某の家に、古文書を藏す。一は天文二十四年關戸宿商人の問屋免許盛秀判形の證狀なり。二は關戸鄕中河原の内正戒に、有山源右衞門新宿立込邊の芝原田地となすべきの由申出るによりて、七年芝野に定め置かるゝ由、岡谷某の證文。又三は關戸鄕市の定日ならびに濁酒醸あい物役赦免等、岩本某の證文、又其四は關錢五貫文、有山源右衞門へ申付る旨の證文なり。

其地關之儀如前之可置候少も私曲之筋目自横合聞屆候に付ては可爲曲事者也仍如件。

子九月廿三日　　有山源右衞門どの　　憲秀　花押

此地は昔鎌倉時世、關を居られける舊跡にして、建久の頃より鎌倉の右大將家、淺間三原及び入間野等へ御狩、其餘陸奥、上毛、信濃、越後等へ軍を發し給ふ時は、必しも關戸口の大將を定られし事諸書に載せたり。太平記に、正慶二年合戰の條下に、義貞數箇度の戰に打勝給ひぬと聞えしかば、東八箇國の武士ども順ひ付く事雲霞の如く、關戸に一日逗留ありて、軍勢の著到を著られけるに、六十萬七千餘騎とぞ注ける、とあるも此所の事なり。

延命寺　壽德寺より三四町南の方、道より右側にあり。地藏院と號す。時宗にして相州藤澤の淸淨光寺に屬す。本尊地藏尊は立像一尺五寸ばかりあり。作者詳ならず。開山を普國上人と號す。門の入口右の方畑の傍に、榛木の老樹を以て印とする古塚あり。正慶二年武藏野合戰に討死せし四百餘人の墓なりといへり。

関戸
天守堂

城山　延命寺の後の山續をいふ。土中稀に古瓦を得る事あり。されども其城主及び時世等詳ならず。土人云ふ、昔小田原北條家の幕下關戸駿河守といへる人こゝにありとも、又は永祿の頃、佐伯市助道永といへる武士、小田原の北條家に仕へ　此地に住するともいへり。（按ずるに此所を佐伯谷とも號けたり。）明德元年庚午念阿護法入道此地に一寺を創建ありて、吉祥山壽德寺と云ふ禪院を再興す。（此寺は關戸入口道より右側にあり。）道永自ら中興開基となり、日舜宗惠大和尚を請じて、中興開山とす。（市助法名を道永庵と稱す。永祿十二年己巳二月三日陸奥に戰死す。道永の子孫三河守道也。和泉守道安、同隼人筑後などいへる人等、皆此地に住し終に民間に下りしとなり。）

天守臺　同じ山續西の方にあり。城山の半腹より曲折して山頂に至るまで老松繁茂す。此所より四望するに尤も絶景なり。（近頃山頂に金毘羅權現の宮を營建せり。）

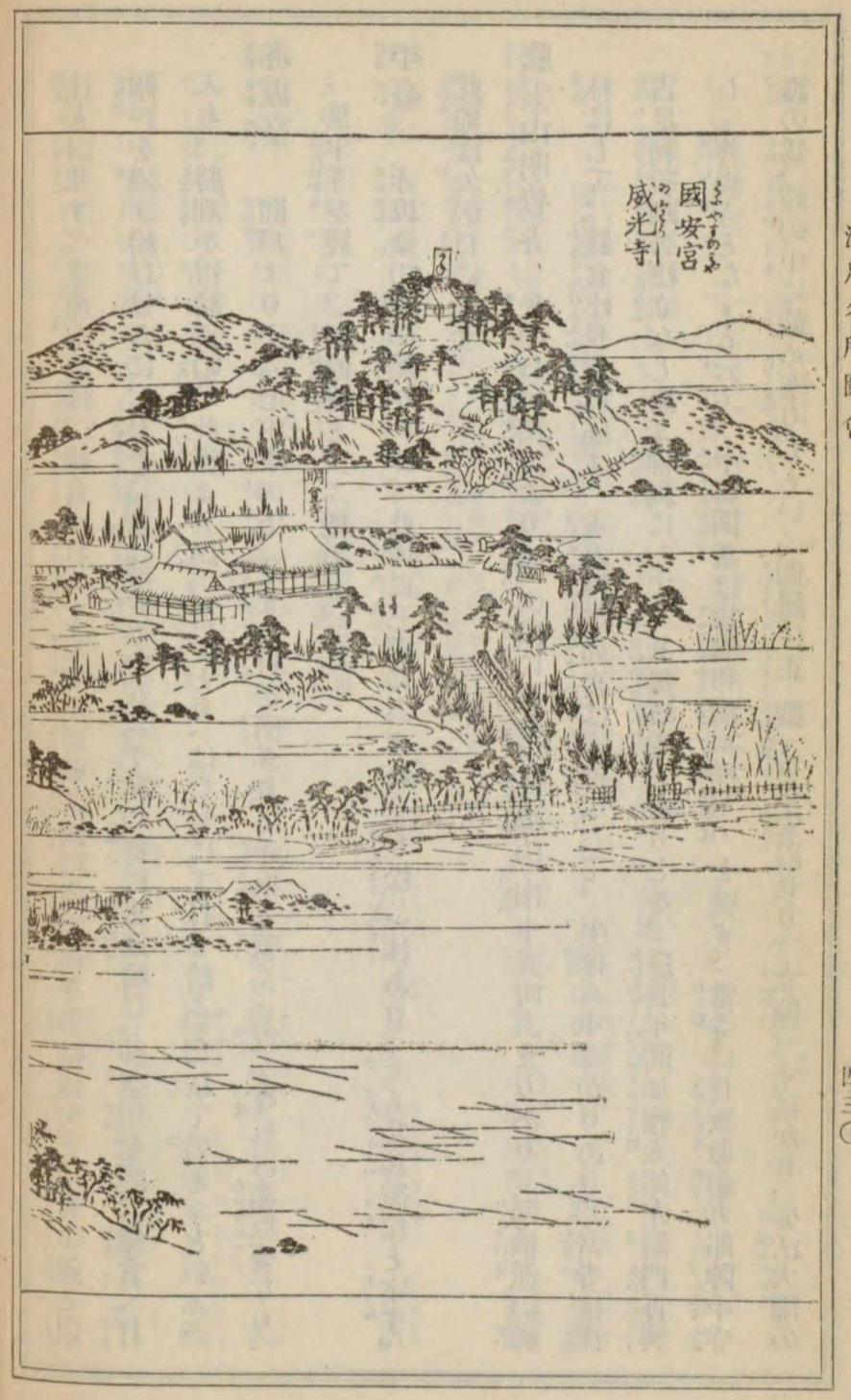
沓切坂　下關戸の宿の南の坂を云ふ。坂の上を古市場と唱ふ。昔商戸驛舍等ありし地なり。天正已來此地の古道廢して、今は名のみとなれり。されども府中より横切て、相州矢倉澤大磯等への官用の次場なり。（今も相州大山石尊富士詣など常州野州邊より此道にかゝれり。）相傳ふ、正平七年壬二月八日武藏野合戰の時、新田義貞公、脇屋義治公纔に二百餘騎に討なされ、御方の勢も散々に行方しらずなりしかば、

迚も討死すべき命なれば、鎌倉へ打入て足利左馬頭基氏に逢て命を失はばやと、夜半過る頃關戸を過ぎ給ひけるに、石堂入道三浦介等の五六千騎の勢に出逢給ひ、神奈川を經、鎌倉へ打入り、勝利を得給ふ頃、此坂より馬の沓をとり、はたせにて打ち給ふと、依て名とすといふ。

赤坂臺　關戸より十六七町東の方、蓮光寺村を横ぎりて赤坂と號く。坂を登れば赤坂臺なり。一里半斗を經て、河原谷と云ふ地あり。

平臺　赤坂臺の東の續をいふ。此所に三園にあまれる老松一株あり。土人甚兵衛松と字す。此地は矢の口に屬す。

騰雲山明覺寺　矢の口村街道より南の横にあり。渡場の南十五町あまりあり。臨濟派の禪林にして、鎌倉建長寺に屬す。本尊釋迦如來は唐佛にして、坐像八寸ばかりあり。當寺は往古足利義晴公建立なし給ふ佛刹にして、其後廢寺となりしを、慶長年間加藤太郎左衛門再興して菩提寺となすと云ふ。中興開基は揚雲和尚（永祿四年に中興す。）と號す。當寺に長坂血鎗九郎陣中守護の爲、鎧の中に籠め奉りしといふ伽羅の正觀音を安置せり。立像三寸ばかり、弘法大師の


國安宮
威光寺
明寶寺

國社
安國
社人
威光寺

作といふ。今は一尺斗の正觀音を彫造して、其體中に祕安せり。

小澤小太郎居宅舊地　當寺境内の邊を云ふ。今猶馬場の舊跡なりと稱する地あり。又當寺の前に小高き岡ありて藏地下と號く。其頃兵粮を收めたる倉の跡なりと云ふ。次の小澤の城址の條下にも、小澤某の名有りて是を云ひ傳ふ。こゝに小太郎といへるも其氏族の人なるべし。

草原山威光寺　同所明覺寺より道を隔てゝ一町斗向側、二町斗左へ入りてあり。新義眞言宗にして、坂濱高勝寺に屬す。本尊は大日如來、坐像三尺ばかりあり。當寺は穴澤天神の別當なり。天明年間火災に罹りて、殿堂僧坊悉く燒亡して舊記を亡ぼせり。

東鑑曰

治承四年庚子十一月十五日。武藏國威光寺者。依爲源家數代御祈禱所。院主僧僧圓相承之僧坊寺領。如元被奉免之。云云。

同書曰

元暦二年　四月十三日　武藏國威光寺院主長榮。懇祈日夜不怠。然平家滅亡畢。有御感沙汰之處。爲小山太郎有高、被押領寺領之由。捧去年九月所給御下文所訴申也。下略。

同書曰

文治元年　九月五日　小山太郎有高。押妨威光寺領之由。寺僧捧。解狀。仍令停止其妨。任例可經寺用。若有由緒者。令參上政所。可言上子細之旨。被仰下。惟宗孝尚。橘判官代以廣。藤判官代邦道等奉行之。下略。

同書曰

承元二年戊辰　七月十五日　武藏國威光寺院主僧圓海參訴曰。柏江入道增西。去月廿六日。率五十餘人惡黨。亂入寺領。及刈田狼藉。下略。

按ずるに、江戸雜司ヶ谷鬼子母神の別當威光山法明寺を以て、東鑑に載する所の威光寺なるよし、其寺に云ひ傳ふるといへども、恐らくは誤なるべし。東鑑にも柏江入道增西五十餘人の惡氣を率ゐて、當寺の寺飯の田を刈り、狼藉に及ぶなどあり、柏江入道は、多

郡狛江郷の主なり、今同郡佐須村に其舊館の地と稱するものありて、此地より程遠からず。東鑑刊本に、柏江に作るは誤なり。江戸の雜司ヶ谷は其間七里隔つべし。されども當寺は天明年間の火災に舊記亡びたりとて、さらに古へを考へ合すべきたよりなし。猶他日訂正すべきのみ。

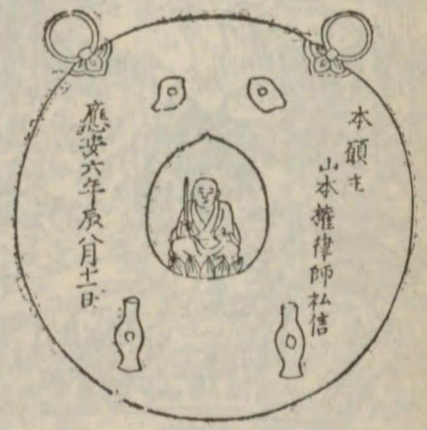
國安明神祠

威光寺の南五十歩斗を隔てゝ、同じ側、左の小道を三十歩斗入てあり。神主山本氏奉祀す。神體は左の如きものにして、世に云ふ所の鑄形の神像なり。相傳ふ、往古小澤左衛門尉國高といへる人、此地を領す。國高此地に逍遙ありしころ、松樹の下に白髮の老翁現じ、示て曰く、我は大國主神なり。此地に崇め祀らば萬民國安かるべしと云ふ。國高奇異の思ひをなし、宮居を營んで、たゞちに國安明神と崇め祭り。社領の地八百五十坪を寄附ありて、武運長久ならん事を祈念すといふ。

按ずるに、小澤左衛門尉國高は、東鑑に擧ぐる所の、小澤次郎重政、同左近將監信重などの氏族の人ならん、その時世いましるべからず。

國安神像

鋼物、わたり六寸四分ばかり、上に天蓋など付けたりしと覺しき跡あり、下の方にも花瓶の如きものありて、上の方に口あり、神體は僧形にして、寶珠と劒とを持し給ふ形なり。



穴澤天神社

谷口邑威光寺より東北の方三町斗を隔てゝ、同じ往還右の方小道を入りてあり。社は山の中腹にあり。此邊を小澤ヶ原と唱ふ。今祭神詳ならず。後世菅神を合祭せり。祭禮は七月廿五日なり。又同日神樂を修行し、九月廿五日に獅子舞を興行す。別當は眞言宗にして威光寺と號す。

延喜式神名帳曰　武藏國　多磨郡

谷之口
穴澤天神社

此辺俗を小澤原と号く
菊社つ浸の山頂八小澤氏事
重政
文明の比し金子拝部助
城を築りたるを
吉里宮内方馬屋
八十槻山より
新て生ひ出
を勢ふ

穴澤天神社云

武藏國風土記殘編曰　武藏國　多磨郡

穴澤天神　圭田三十六束三毛田　孝安天皇四年壬辰三月所祭少名彦神也。云云。

當社の麓を澗水流て多摩川に合す。其流を隔てゝ山岨に一の巖窟あり。故に穴澤の名あり。昔の巖洞は崩れたりとて、今新に堀穿てる洞穴あり。洞口は一にして内は二つに分てあり。

内に種々の神佛の石像を造立す。

小澤城址　谷口天神の山續、淺間山の西に竝べり。東鑑に、元久二年乙丑六月廿三日稻毛入道大河戸三郎が爲に誅せらる。子息小澤次郎重政は宇佐美與一是を誅すと。又同書に、同年十一月三日小澤左近將監信重、綾小路三位帥季の息女を相伴て、京都より參著す。行光を以て事の由を尼御臺に啓す下略。又同月四日夜に入り、綾小路の姫君尼御臺所の御亭に參らる。御猶子たるべきの義なり。武藏國小澤鄕稻毛入道遺領なり。知行せらるべきの由仰らるゝとあり。鎌

倉大草紙に、文明九年長尾四郎左衞門尉景春、山内上杉の家務職を承らざるを憤り、逆心を企て顯定を亡さんとて、武州相州の内一味同心の兵を催し、上杉家を襲ふといへる條下に、金子掃部助は小澤と云ふ城に楯籠る間、太田左衞門入道下知として扇ヶ谷より勢を遣し、同三月十八日溝呂木の城を攻落す。同日に磯の要害を攻らる。一日防ぎ戰ひ夜に入ければ、越後五郎四郎かなはずして城を渡し降參す。夫より小澤城へ押寄攻けれども、城難所にて落がたし。中略　景春一味の寶相寺竝に吉里宮内左衞門尉以下小澤の城の後詰として、横山より打出當國府中に陣を取る。中略同年四月十八日金子掃部助が籠りたる小澤の城も攻落すとあり。

向の岡　今向の岡と稱する地は、多摩川を北に帶て、西は關戸より發て、東は末長に終るもの是なり。連岡の長さ凡そ六里あまりあり。

或は云ふ、今向の岡と稱する連岡、向の岡にはあらざる歟。武藏國風土記殘篇によりて考ふれば、多摩郡北は向の岡に限るとあるを以ても、此地にあらざる事しるべしと、然るに、同郡狹山は、南北東西五里尾引山〔チヒキヤマ〕より八國山〔ハチコクヤマ〕にいたり、東西二十里の連岡なり、四方共に武藏野にして、何れの方よりも岡に相對する故に、向の岡の名ありといへり。依て今向の岡と稱する地は、都筑が岳として佳なちんと、しかるや否はしらざれども、暫く是をこゝに擧ぐるのみ。

武藏國風土記殘編曰

多磨郡東限草窪岡。西限金川。南限華田浦。北限向岡。云云。

新勅撰

武藏野の向の岡の草なればねを尋ねてもあはれとぞ思ふ　小町

續古今

朝な朝なよそにやはみる十寸鏡向の岡につもるしらゆき　知家

玉葉

秋霧の絶間をみれば朝づく日むかひの岡は色づきにけり　後一條入道

同

ゆふづく日向の岡の薄もみぢまだき淋しき秋の色かな　定家

夫木

もと茂き向の岡の菊のえに交りて青き花の下草　爲家

御家集

いつのまに向の岡の小松原月もるまでになりにけるかな　後鳥羽院

歌林名所考

夕日さす向の岡の時鳥雲のはたてにをりはへてなく　隆源

都筑の岳（綴喜或は綴幾に作る。）小佛の嶺より小山田里迄は多摩郡に属せり。平山或は横山などいひ、既に古歌にも玉の横山と詠ぜる、皆此間にあり。又官林の案内山と云ふより、神奈川迄の間は都筑郡に属せり。南北に高底なく、坂東路凡そ百里あまりあり續く故に、つゞきの岳の名ありといへり。

青沼明神　同所長沼村八王子通道の傍にあり。祭神太田命、猿田彦大神二神なり、勸請の初をしらずといふ。社司福島氏奉祀す。祭禮は八月十五日なり。（太平記に正平七年閏二月、小手差原（コテサシガハラ）合戰の條下に、將軍の御陣へ馳せ參る人々の中に、青沼判官といふ名みえたり。此地より出たる人歟。）

按ずるに、當社は延喜式内青渭神社なちん歟。土人相傳ふ、往古此地は大なる沼のありし地なる故に、長沼の號ありと云ふ。されば此邊地を掘穿つときは、土中悉く沼土なりと。和名類聚抄に、武藏國比企郡に渭後（ヌマノシリ）といへる地名を載せて、沼乃之利と訓ず、然る時は、當社を以て延喜式内の青渭神社とするもよりどころあるに似たり、猶後人の考を俟つのみ。

仙谷山壽福禪寺　谷口の東の山續、矢口渡場より十三町東南の方、菅村にあり。此地は多摩郡、後橘樹郡に屬せり。此を郷とも云ふ〜小　推古天皇六年戊午、聖德太子草創なし給ふ佛刹なりといふ。昔は天台宗たり。建長寺の大安禪師の時より禪林とす。今は曹洞派となりて、越前の永平寺に屬す。

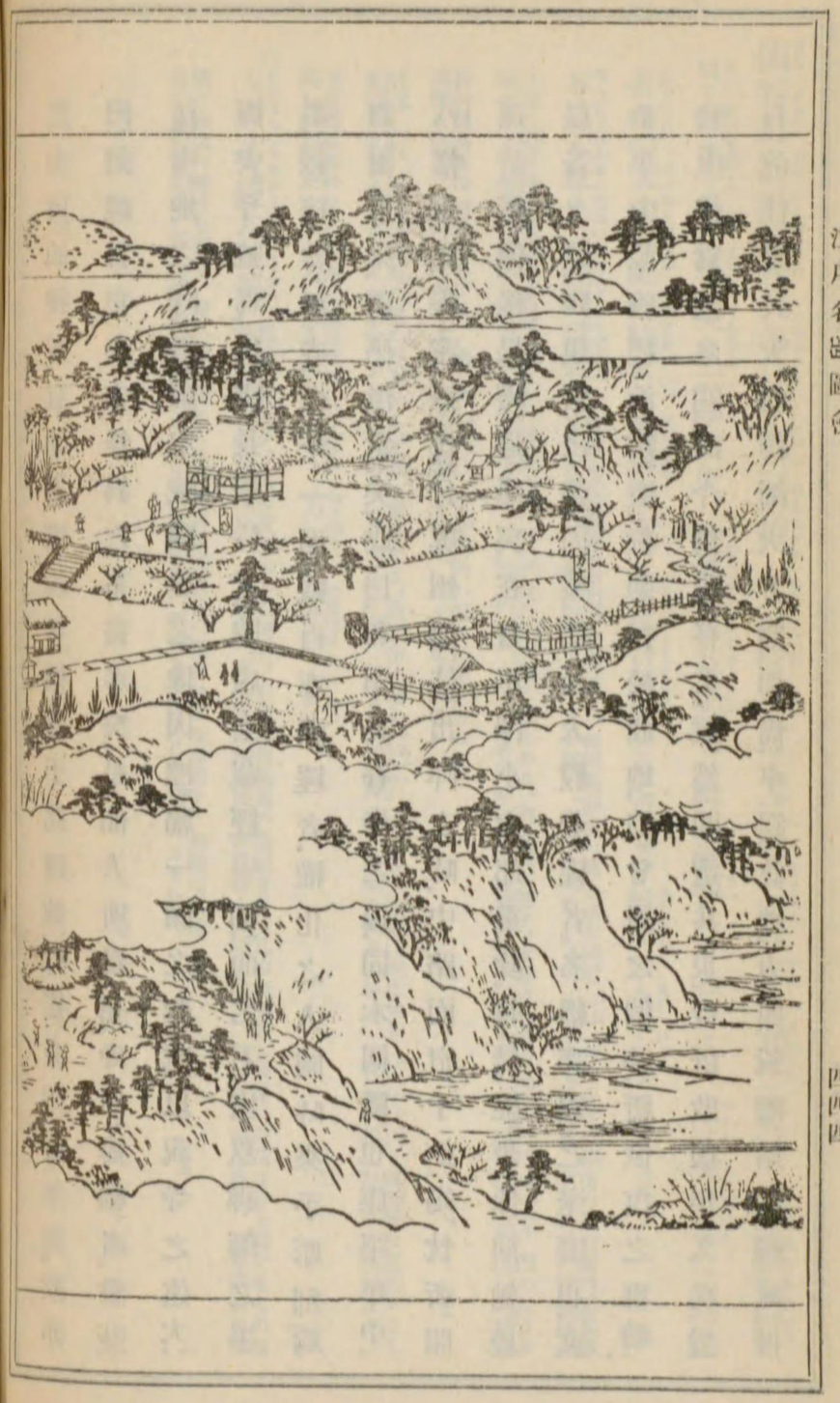
本堂本尊十一面觀世音　相傳ふ、鳥佛師の彫刻、或は云ふ、和州長谷寺の像と同木同彫なりといふ、大會堂〔タイエダウ〕と號く、當寺十境の一なり。鐘　右にあり、井田六郎右衛門尉某願永七年庚辰、當寺住持の沙門比丘宗圓の頃半鐘を寄進す、破裂によりて、寛文二年鑄改るよし當寺住持比丘禪峯の文にみえたり。阿彌陀堂　同じ左にあり、善應殿と號す。本尊は坐像四尺五六寸、作者不知、左右に地藏多門等の像を安ず。鎮守宮　門の左にあり、八幡稲荷大黒辨天の四座をまつる、擁護廟と號す、當寺十境の一なり。指月橋　當寺門外の流れに架する板橋を號く、是も十境の一なり。

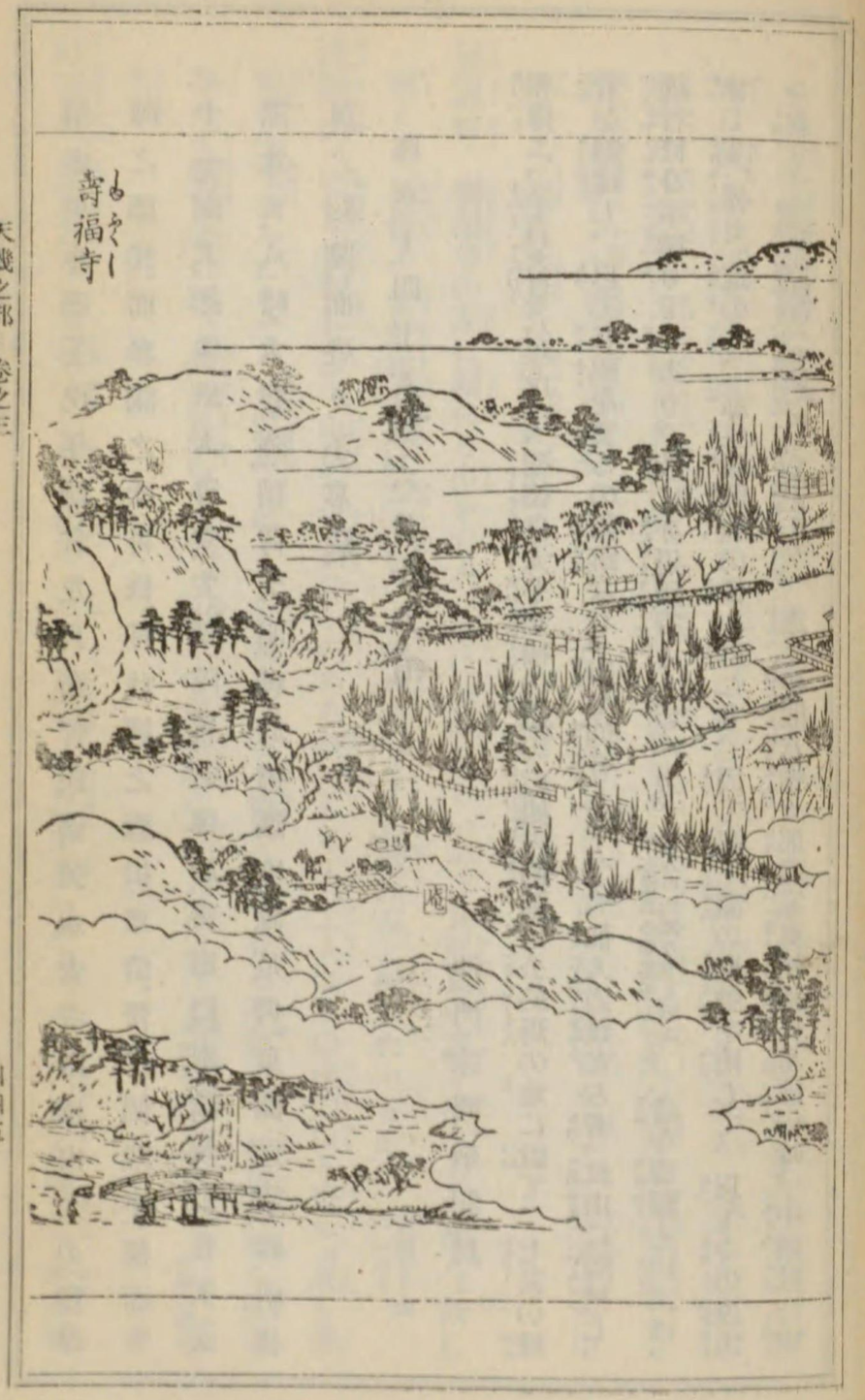
粲霞谷　同所の庫裡の後の谷を云ふ、道敎の舊跡なり、故に今此地をあざなして、仙谷〔センコク〕と號く、是も當寺十境の一なり。採藥阜　秦の徐福日本に來り仙藥を採ると云ふ。攫雾松　同所關の左にありしが、今は枯れたり、土俗道祖神の松と云ふ。一根五枝にして霧を攫むが如き故に名とす、當寺十境の一なり。方丈　曉成室といふ、十境の一なり。

大般若經六百卷　梵函に收藏す、紙は黄色にして薄し、上古名繼高素の筆痕なり、其中源義經と辨慶が筆蹟なりと稱するもの四卷ありて、其名を注せり。相傳ふ、文治年間源義經と辨慶暫く此地に隱ひ、曾祖の例跡を追ひ、當寺觀音の塑前に恢復の願願を祈り、特に大會堂に入りて文治年間經卷の闕けたるを繕寫す。永德壬戌鎌倉左兵衛督氏滿、師の德を慕ひ參謁のついで、再び此經の霉損を修補する由緣起にみえたり。

夫仙谷山壽福寺者。推古天皇六代戊午年。聖德皇太子就于高橋妃之亡妣。入阿彌尼公終焉之地。剏建七區練若。以資薦冥福之舊趾也。

蓋山曰仙谷者。有仙人道鏡者。栖遲于此山。鍊行修身積有年矣。故亦曰道鏡谷也。今古怪異之事甚多矣。是仙人所爲也。寺曰壽福者。曾芟榛夷地之時。得虛空藏薩埵之像。因標福一滿之聖號。以祝寺之遠大。而安今號焉。後建長曜侍者。謄虛空藏經一軸。而乞石室玖禪師之手墨。鋟梓寄焉寺。像十一面觀自在薩埵者。權化之人哺時來手彫刻焉自爾以來。靈感滋衆矣。或曰。和州長谷寺之像。同木同雕也。康平年中。八幡太郎義家。欲排付奥州逆徒。出陣之時。中路而宿于茲。竭忱祈開運於斯像。後果獲遇感矣。在昔小澤小太郎重政。每晨旋步像前。勉於晨香夕燈。修現當之善因矣。梵函大般若經者。名繼高素之毫痕也。文治年中。源義經泊辨慶。暫憩行於此地。追曾祖之例跡。祈恢復之應驗。特復繕寫經之闕。而今尚現存矣。雖然間遭兵災。寺既敗壞年久矣。爰有前住建長大安禪師大方慶和尚。卓錫此地。力興荒癈。始振禪風。僧




もくし
寺福寺

俗雲集。永德壬戌年。鎌倉左兵衛督氏滿。號永安寺殿壁山全公。雅慕師之德操。而參謁之次。再修補此經之蠹損。覃造營三個殿宇。既而安十一面大悲像於大會堂。安彌陀善逝像於善應殿。奉請辨財尊天。大黑尊天。八幡大菩薩。稲荷大明神於擁護廇。繇是仰皇圖之鞏固。祈佛運之紹隆。而亹々不怠焉。

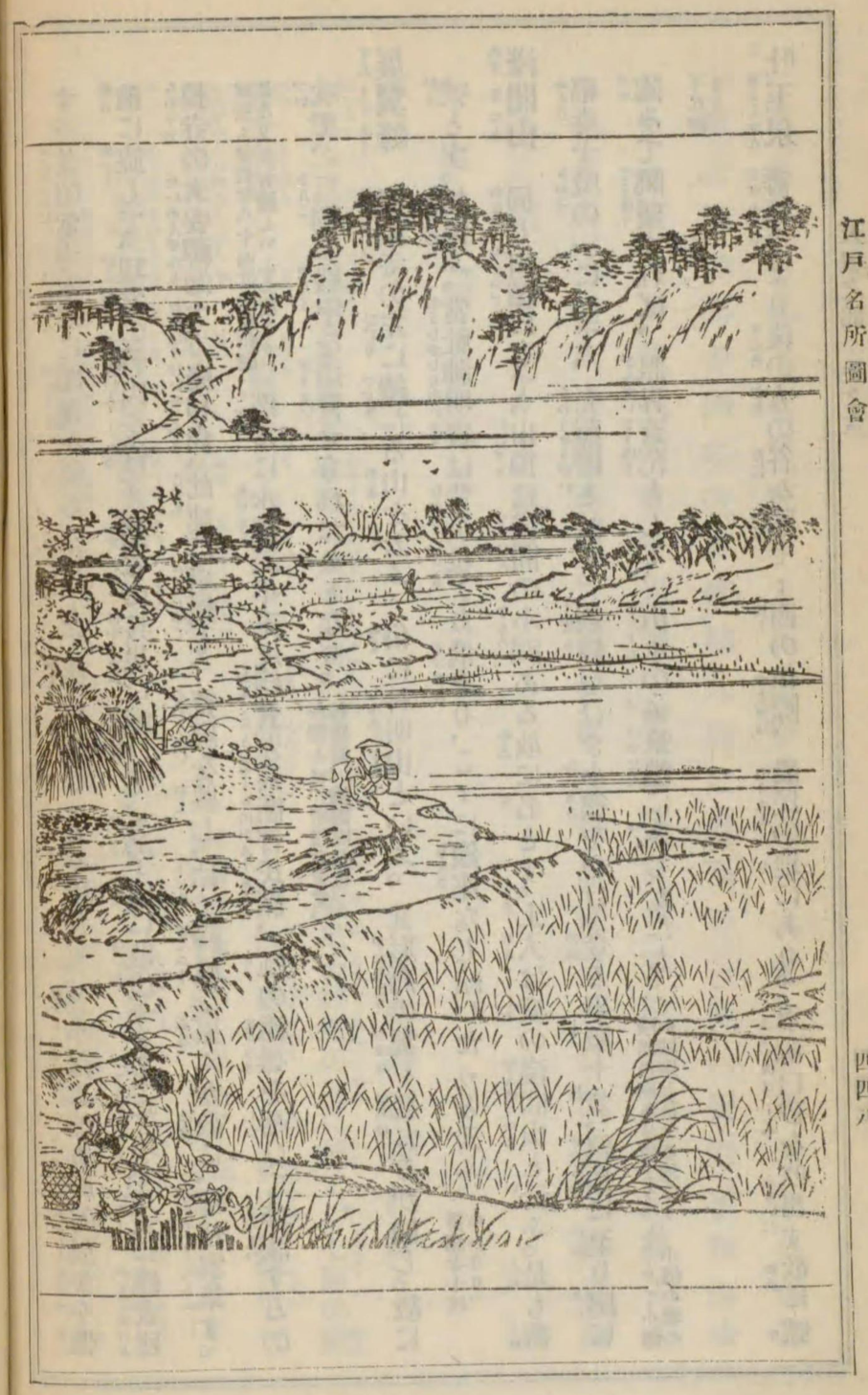
應永十四丁亥稔六月十八日　　沙門宗圓敬記焉

相傳ふ、推古天皇六年戊午、聖德皇太子高橋の妃の亡妣入阿彌尼公終焉の地に就て、七區の練若を剏建し、以て冥福を資るの舊跡なり。山を仙谷といふは、仙人道鏡なる者、此山に隱栖し、練行修身事積りて年あり。故に亦道鏡谷ともいへり。今古怪異の事甚多し、是仙人の所爲なりと云ふ。寺を壽福といふは、曾て芟榛夷地の時、虛空藏薩埵の像を得たり、因て福一滿の聖號を標して、以て寺の遠大を祝す。後建長嗣侍者、虛空藏經一軸を贈るのみ石室善形禪師の手澤猶粹して寺に寄す。康平年間八幡太郎義家奥州征伐出陣の時、中路玆に宿す。其頃當寺本尊に開運を祈る。後果して感に遇ふことを獲たり。昔小澤太郎重政毎晨歩を像前に旋して、現當の善因を修す、然るに兵災に遭ひて、寺宇既に敗壞する事年久し。爰に鎌倉建長寺の大安禪師大方慶和尚、此地に卓錫し、荒廢を興し、始て禪風を振ふが故に、僧俗雲集す。或云ふ建長寺八十四世法慶和尚是なり、大方慶といふも誤なり。然るに永德二年壬戌鎌倉左兵衛督氏滿、師の德操を慕ひて參謁するの次で、三個の殿宇を造營せられたりとなり。三個とは、所謂大會堂、善應殿、擁護廇是也。

展翼峰　壽福寺の左に續たる山を云ふ。俗に神明山といふ。其形鳥の翼を展たるが如し。故に號とす。相傳ふ、當社神明宮は昔小机より飛來り、こゝに鎭座なし給ひたりと云ふ。壽福寺十境の一なり。

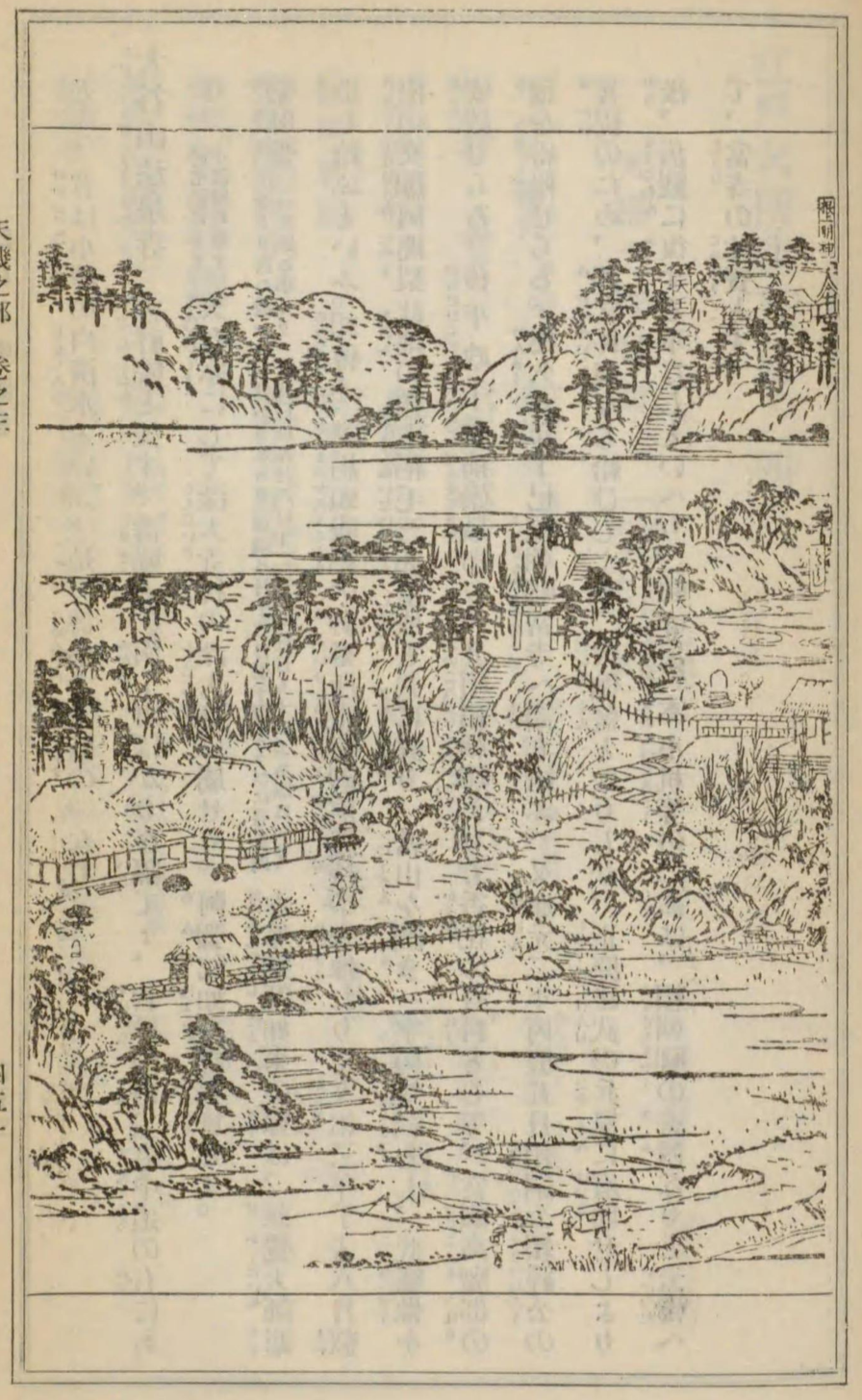
淺間山　同じ山續にして、山頂に淺間の小祠ある故に名とす。土人は城の淺間山と云ふ。是も壽福寺十境の一にして、光照崖と號す。荆棘をひき小篠をわけ、登る事數十歩、絶頂に至り崖に臨みて眺望すれば、眼界蒼茫として、山水の美筆端に盡しがたし。淺間の祠ある所より少し下りて小澤の城跡と稱する地あり、小澤の城の下に詳なり

吐玉泉　壽福寺より後の方の谷を隔てゝ西の山際、農民の地にあり。水源白砂を吹出す故に號



吐玉水

法泉寺
本堂


樫明神
天王

とす。昔は小澤の白清水といふ。是も壽福寺十境の一なり。

大谷山法泉寺　吉祥院と號す。壽福寺の南十町ばかりを隔てゝ、菅村の内、府中道の右にあり。稲毛領にして小澤郷に屬す。天台宗にして深大寺村の深大寺に屬せり。阿彌陀如來を本尊とす。

藥師堂　寺より西の後一町半ばかりにあり。毎歳八月十二日獅子舞ならびに弓を携へて踊る事あり。又緣日は九月八日十二日にて此日もすこぶる賑はへり。本尊藥師如來の像は、慈覺大師彫造し給ふといふ。相傳ふ、左馬頭義朝の御臺所常盤御前護持の靈像たり。文治三年丁未八月叡山の文顯阿闍梨此地の領主稲毛三郎重成と共に謀り、當山を闢き一宇の梵刹とし、此靈像を安置せらる。後平政子御前崇敬あり。其頃賴朝卿よりも香花の資料として、當國高麗郡の地を寄附せらる。建久八年丁巳賴朝卿當寺へ詣し給ふ。又康元二年丙辰五月賴嗣公賴經公の菩提のため、御堂再興なし給ひしより、大伽藍となりしが、正慶建武の兵亂に廢壞せしより後、舊觀に復する事なしといへり。鎧兜唐木小机等の二品は、賴朝卿の寄附なりと云傳へて、當寺の什寶とす。

江戸名所圖會　卷之四

天權之部目錄

〔原本十一より十三まで三册〕

市ヶ谷八幡宮　茶木稲荷
藥王寺　一木藥師
大窪映山紅
鎧明神祠
中野成願禪寺
寶仙寺　大師堂　鐘樓　二王門　三層塔　馴象枯骨
阿佐ヶ谷神明宮
慈宏寺
藥王寺　稲荷祠
大窪天滿宮
自證院
淀橋　水車
中野長者昌蓮墓
月桂寺　安產寶珠
七面大明神社
西迎寺
角筈十二所權現社　熊野瀧
安養寺　稲荷祠　八幡宮
諏訪明神社
圓照寺　右衛門櫻
中野七塔
桃園觀音堂
幡ヶ谷不動堂
桃園
大宮八幡宮　鞍掛松
井頭池　細楊枝柳　臥龍藤　三ッ柳　御殿山
金井橋　仝春花圖
井頭辨財天宮

津久戸明神社
若宮八幡宮
松源寺
濟松寺
宗柏寺
願滿祖師堂
三國傳來千手觀世音　西方寺 自樂居士墓
高田八幡宮　若宮八幡宮 光松 鍾櫻
寶泉寺
百八塚
荒閼山
佛の橋

築土八幡宮
行元寺　稚掛觀音
正藏院
豐後小侍從大友義延舊館之地
宗參寺　大胡氏墓 桑の梅
早稲田神明宮
高田富士山　淺間祠
高田天滿宮
山吹の里
姿見の橋

逢坂
牛込城址
赤城明神社
千手院
赤城明神舊地
誓閑寺　稲荷 垂枝櫻
高田稲荷社　神泉
宗良親王陣營舊址
高田馬場
三島山　三嶋祠 山吹井
南藏院　藥師堂 鶯宿梅

神樂坂
閻魔堂
御殿山
大友松　大友稲荷祠
幸國寺　布引祖師
感通寺　毘沙門天 摩利支天
金川
毘沙門堂　朝日庵 千年松　旗立櫻 守宮祉
戸塚
和田戸山
高田七面堂　世尊堂 朝日櫻　朝日堂 諏訪祠
氷川明神社

右橋
奥州橋
藤杜稲荷社
牛天神社　降魔狗 牛石
氷川明神社
水神社
道山幸神祠
本傳寺　經讀祖師
護持院　本堂 歡喜天 方丈 廊裡　蟹ガ池 中門　雖現山 惣門　護摩 寺中
星谷の井舊地
稲荷社　子授銀杏 中行事　百二王尊 麥藁細工獅子　百度參　年
星の清水

氷川明神社
宿坂關舊跡
泰雲寺　了然尼傳 關臺先生墓
諏訪明神社
大日堂
八幡宮
目自不動堂
波切不動尊

七曲坂
金乘院　觀世音
一枚岩
金剛寺　寶朝公碑 地藏堂
大洗堰
駒留橋
關口八幡宮
大慈寺　日吉豐國兩社 造滿地藏彎
護國寺　本堂 稲荷　藥師堂 地藏　西國三十三番順禮札所の寫 今宮 大師堂 寺中　富士 歡喜天　經堂 仁王門
清立院　日親上人影堂 鯖雨ル
本納寺
法明寺　釋迦堂 二王門　銀杏 年中行事　祖師堂 會式諸の圖　釋迦石像 鐘　鯨

落合土橋
木花開耶姫社
落合螢
道祖神祠
龍隱庵　五月雨塚
北村季吟翁別莊地
大塚
室鳩巣先生墓

雜司ヶ谷鬼子母神出現所
雜司ヶ谷鬼子母神堂　鬼子母神 神祠

弦巻川　大行院　蓮成寺〔以下の目録は本文庫三卷に收む〕

江戸名所圖會

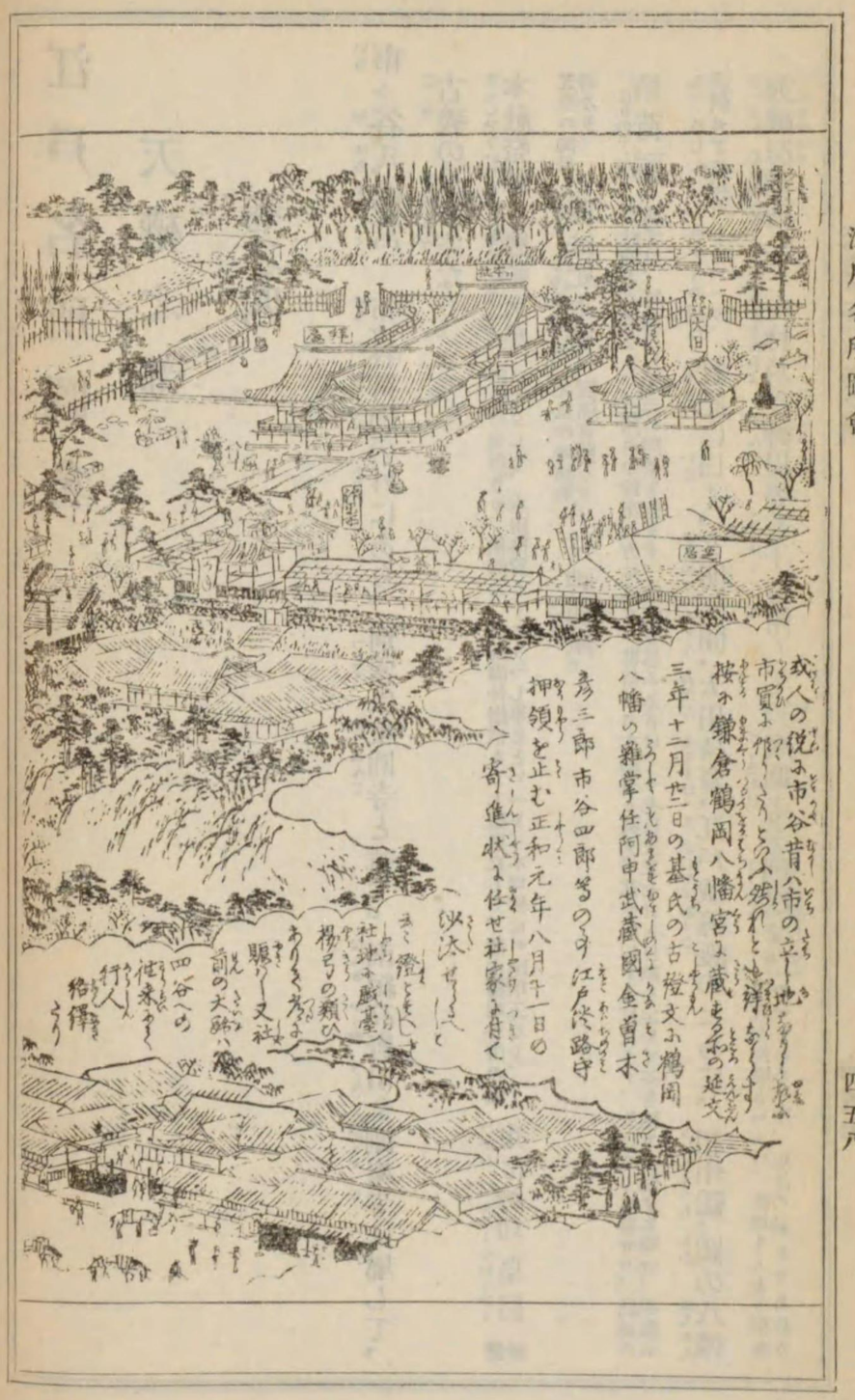
天權之部

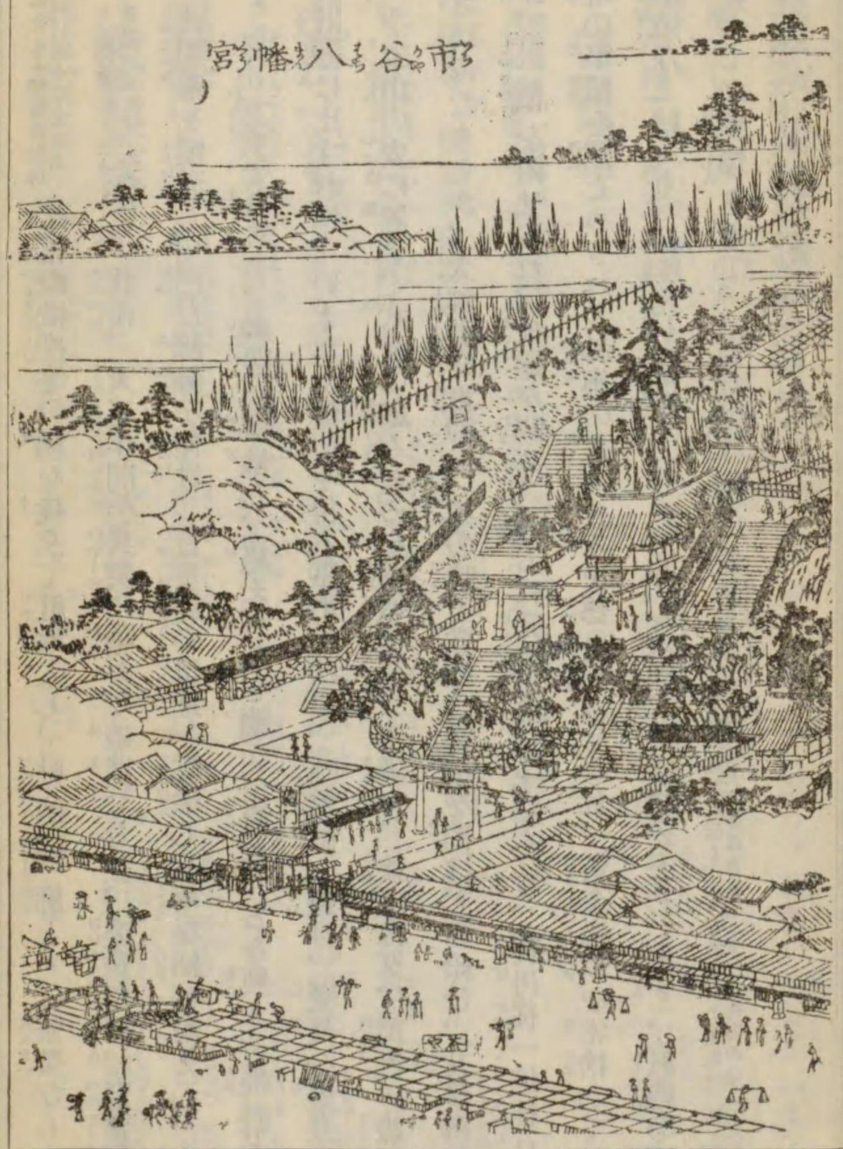
卷之四

市ヶ谷八幡宮　市ヶ谷御門の外にあり。別當は東圓寺と號す。南紀高野山金剛峯寺に屬して、古義の眞言宗なり。

本社祭神　應神天皇　甲冑の神躰なり。相傳ふ、多田滿仲崇信ありし靈鏑にして、往古攝州多田の廟にありしを、太田持資こゝにうつし奉るといへり。本地佛は明王なり。　東は神功皇后　應神天皇の御母君なり。　西は妃大神　天皇の御姉君　寶滿菩薩なり。　三神鎭座。

稲荷祠　當社地主の神なり。石階の中段左の方にあり、世俗茶の木稲荷と稱す。其來由信ずるにたらず、故にこゝに略せり。此神の產子は、毎歲正月元三の間茶を飲まず、眼疾を思ふる者は、一七日又三七日と日數を定めて茶を斷ち祈願する時は、驗いちじるしく、もろ〳〵の願ひ成就せざる事なしといへり。社記に曰く、文明年間、太田持資、江戸城擁護のために、相州鶴ヶ岡の八幡大神を勸請し、山林及び神田等若干を附して、東圓寺を創建す。　山號を稲荷といふは、此地もとより稲荷のやしろありて、地主の神とする故な


或人の説に市谷背八市の立地
市買に作
按に鎌倉鶴岡八幡宮に蔵する
の延文
三年十二月廿二日の基氏の古證文に鶴岡
八幡の雜掌任阿中武藏國金曽木
彦三郎市谷四郎等のすゑ江戸後路守
押領を止む正和元年八月十一日の
寄進狀に任せ社家に
沙汰せしめ
社地に藏臺
物見の類ひ
ありしかよ
聽し又社
前の大路に
四谷への
往來する
行人
絶傳

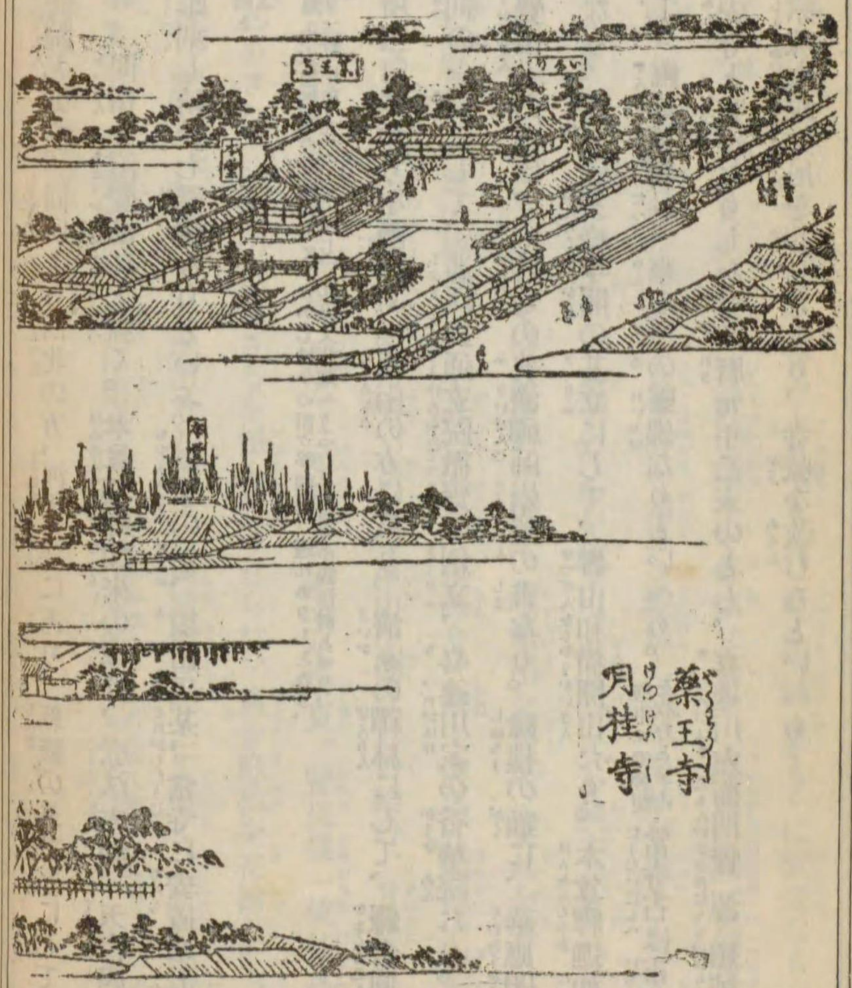

市谷八幡宮

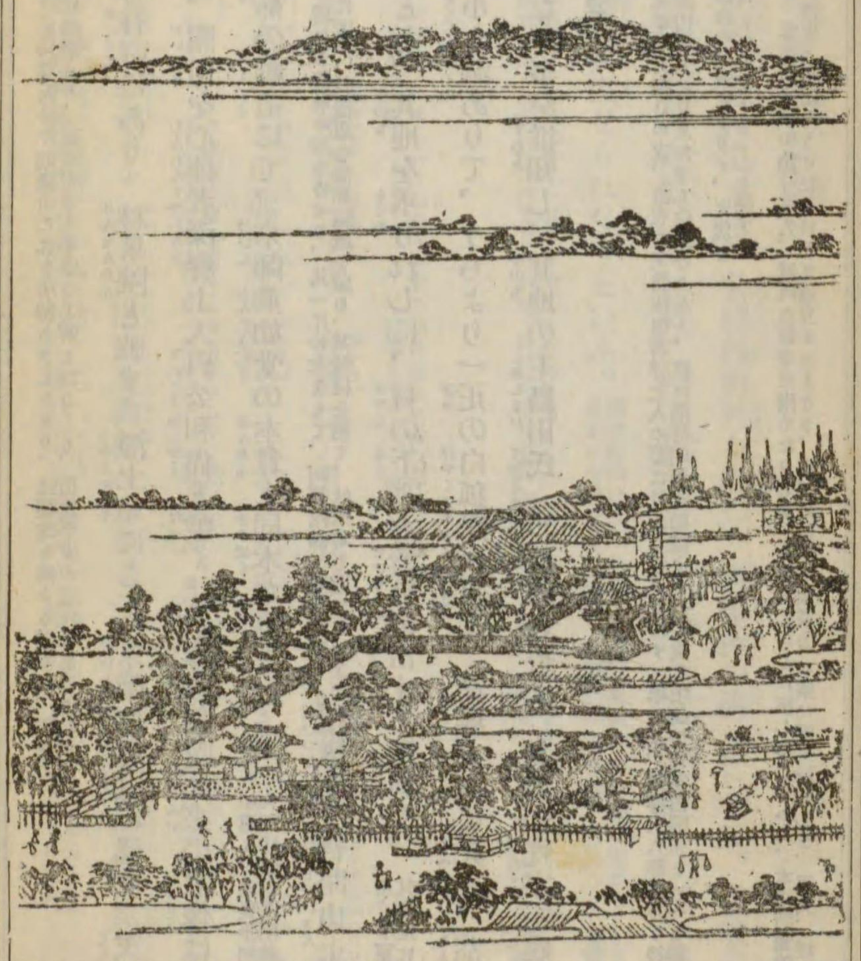
り。鶴ケ岡もいにしへ稲荷の社地なり。蓋し此例に本づくと云ふ。又自親松椎等の樹を栽ゑて社木とし、社壇城廓とゝに繁榮ならん事を祝す。土俗道灌松となづく。枝葉々として、今尚存す。其後、天正年間の兵燹に罹りて破壞せしを、慶長年間、別當源空少僧都、此頽基を憤激し、己が餘鉢を傾け、百歩許の遺址を點檢し、草を結び擔とし、木を伐て扉とし、一宇を再營し、神殿に擬儀し、絶えたるを繼ぎ、廢れたるを興す。然れども、諸を古の壯觀に比すれば、いまだ十の一を得る事あたはず。唯幣帛を捧げ、粢具を盛り、寶祚の萬々を泰山の安に置き、武運の綿々たるを芥石の長に護り、兼ては又、萬姓の豐樂を祈り奉るのみなりしか、大神君關東御入城の時、當社の來由を問はしめ給ひ、其後御三代大將軍家、社領を附せられ、朱璽を賜ふ。然るに元祿十五年壬午の夏、賢母從一位杜昌院殿、當社の事蹟を聞しめされ、神輿の足らざるを憾み思はせられ、黄金數枚を寄捨して、新に是を奉造なし給へり。神輿全くそなはる。しかありしより、神威昭々として著く、社殿の經營も、亦いつしか輪煥として、宿昔の壯觀に倍せり。南向亭茶話に云く、市ケ谷八幡宮の舊地は、市ケ谷御門の内、今大番所のある所より、北の方の向ふかど、田本氏の邸の隅に、榎の大樹ある地これなり。寛永年間今の地に遷し奉る。故に此榎を神木と稱するとなり。

稲荷山藥王寺　東光院と號す。同所より西北の方、河田ヶ窪にあり。新義の眞言宗にして、大塚の護國寺に屬せり。開山を澄覺法印と號く。本尊藥師如來の像は、弘法大師、天台四明の洞の靈石を得て、彫刻し給ひし靈像なりといふ。貞享の初、須田氏某、當寺に安置なし奉るとなり。當寺昔は愛染院と稱したりといふ。

稲荷祠　境内にあり、相傳ふ、太田道灌の勸請にして、むかしは今の市ケ谷御門の邊にありしとなり。元和の頃當寺より二町ばかり北の方へ遷し、其後又此地へうつして當寺の護法神とせり。

正覺山月桂寺　同所三町ばかりを隔てゝ、西南の方にあり。濟家の禪林にして、鎌倉圓覺寺に屬せり。關東十刹の一員にして、澁江氏通玄院徹齋の創立、喜連川家の香華院たり。總門に掲くる額に、正覺山とあるは、南禪寺の曾濟禪師崇寛の書なり。鐘樓の額に、華應閣と署せしは、香山侯書なり。當寺は文祿年間の基立にして、雪山和尚開山たり。本尊釋迦如來の像は、天竺佛にして、鑑眞和尚携來る所の靈佛なりといへり。腹中に佛舍梨を收むと云ふ。當寺古は市ケ谷にありて、圓桂山平安寺と號けたりしを、明暦元年乙未のとし、喜連川左衛門督源頼純君の嫡女、月桂院龍室宗珠大禪定尼を葬せしより、寺號を改むるといへり。


藥王寺
月桂寺



安産寶珠　當寺に安ず。將軍足利尊氏公の御臺所これを所持ありしとなり。此靈珠を拜する婦女は、難産の憂なしとて、大に崇敬せり。始め當寺を平安寺と號したりしも、田産平安の意によるならんか。

清光山安養寺　市ケ谷谷町にあり。林泉院と號す。淨土宗にして、京師知恩院に屬す。天正二年甲戌の草創にして、開山を心蓮者深譽上人貞公和尚と號く。本尊阿彌陀如來の立像は、三尺三寸あり。惠心僧都の彫造にて、京師眞如堂の本尊と同木なりといふ。相傳ふ、天長年間、熒覺大師江州苗鹿明神より靈木を得て、是を打割しに、其木理自ら佛躰の形をなせり、其一片の木をもて、阿彌陀佛二軀を彫刻し、日吉念佛堂、及び洛の眞如堂等に安ず、其後惠心僧都靈威を蒙り、其餘材を得て、此本尊を造るといふ。相傳ふ、昔開山上人一宇の精舍を開創せんとし、其地を求られしに、林の下より清泉涌出する所あり。市ケ谷富士見坂其舊地にして、今は尾陽公御館の内に入るといふ。又傍に小き洞ありて、うちより一疋の白狐顯れ出て、深譽上人に見え、悲禮するが如し。依て靈地なる事を推知し、其地の主島田氏某に乞ひ得て、其地に梵宇を建つるとなり。明暦二年丙申、此年今の地へうつれり。

稲荷祠　境内にあり。萬治元年正月朔日の夜、白衣の老翁住侶秀譽上人の夢に見えて告げしらする事あり、秀譽上人夢覺めて後思ひめぐらし、そのかみ開山上人に見えたりし白狐ならんと、直に稲荷明神に勸請すと也。又其頃此地に宇田國宗といへる鍛冶居住したりけるが、深く尊信し、此神の加護によりて、火災を免かれたりとて、俗間火防稲荷（ヒフセギイナリ）と稱す。

八幡宮　同じく境内にあり。雲州の尼子伊豫守經久、城内の鎮守に崇めたりしを、故ありて こゝに移し奉るといふ。本地阿彌陀佛は、定朝の作にして、治安元年詔をうけたまはりて造立せりとなり。後、月輪殿下兼家公の家に傳へ給ひしを、經久、城の鎮守

としたりとなり。當寺に、俊寛僧都の持ち傳へし、性法寺の後光佛、及び洛の壬生寺同木の地藏尊等を安置す。

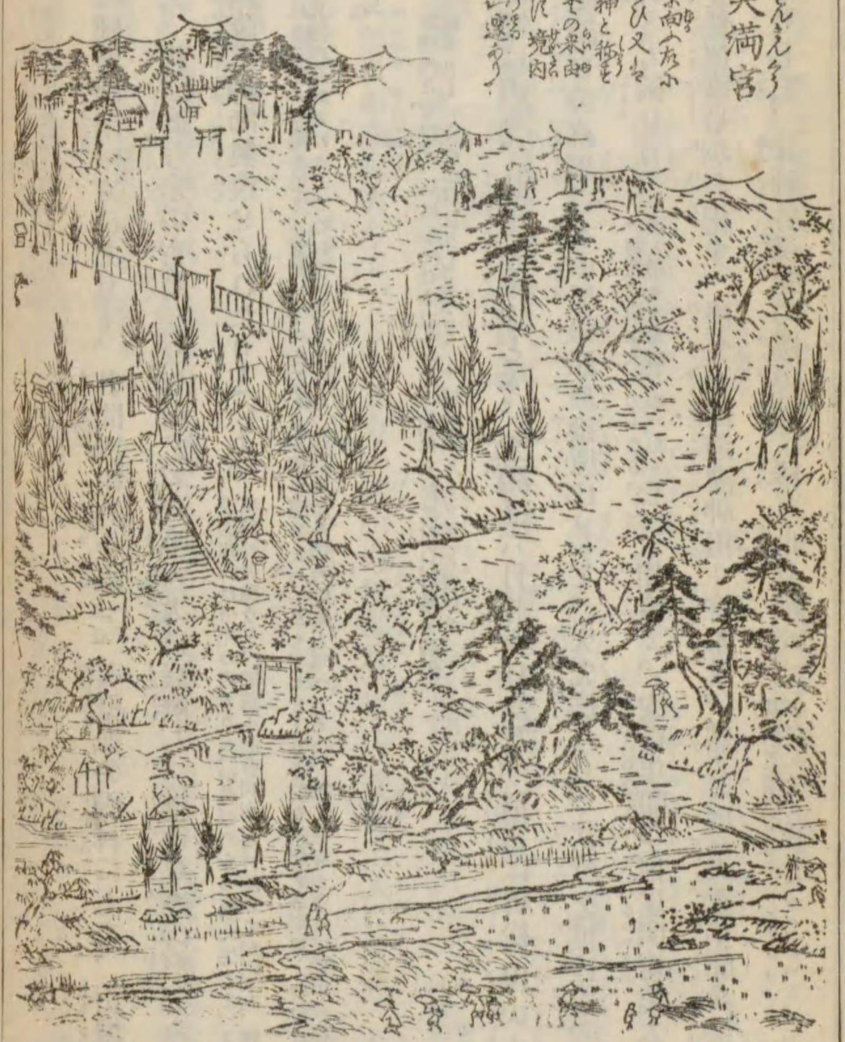
七寶山藥王寺　同所西南の方にありて、其間四町許を隔つ。黄檗派の禪林にして、山城宇治の萬福寺に屬す。昔は眞言宗の古藍なりしかども、中古大に衰廢し、纔に草庵の形のみなりしを、元祿の頃凌雲禪師興復せられたりといふ。凌雲和尚は信州の產なり、武田典厩の女の腹に生じて、まさしく典厩の外孫なり。同國小諸曹洞宗海音院にて剃髮し、後黄檗となる。江戸に出て所々にある所の草庵をして、新に一宇の寺院とせん事を謀るといへども、もとより寺院を新建する事は、官禁にしてなりがたかりけれども、其德の至れるにや、つひに免許ありしかば、江戸の中八箇の庵室と唱へしもの、悉く一寺となる。青山の海藏寺、深川の萬祥寺等、いづれも其中なりといへり。

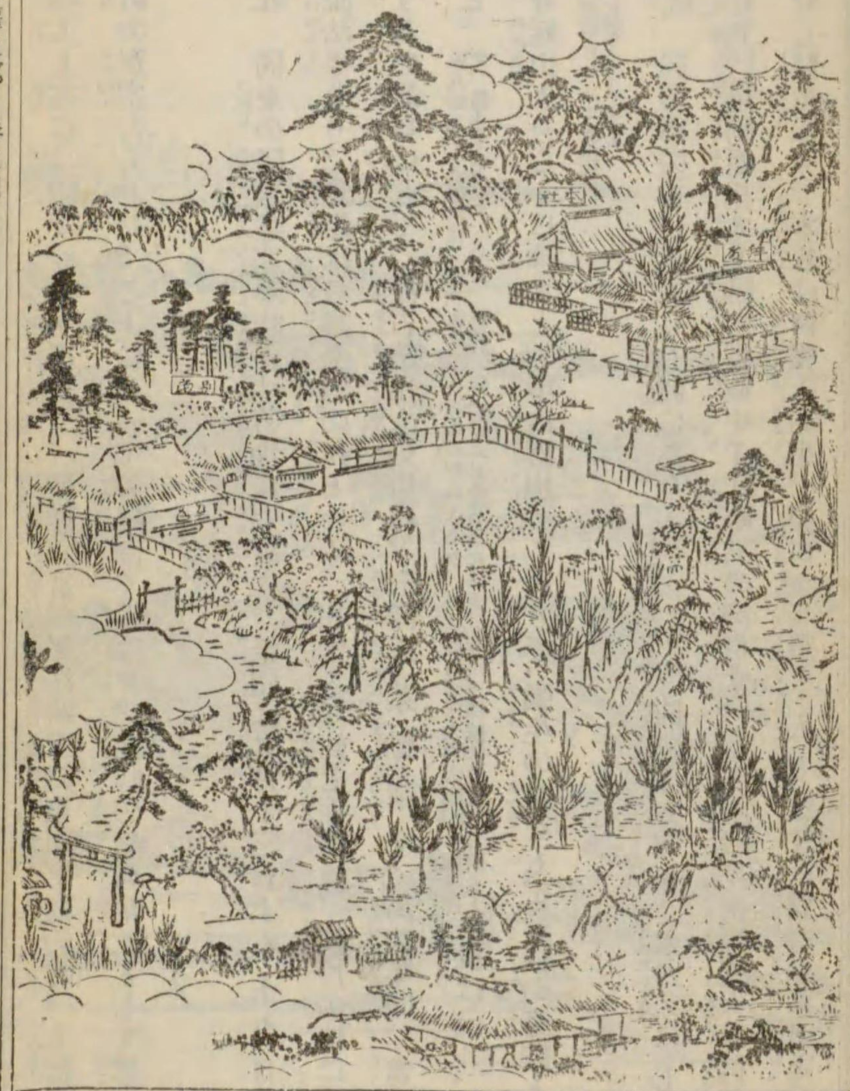
一ツ木藥師如來　同境内に安置す。いにしへは赤坂一ツ木の地に立たせ給ひ、行基菩薩創建ありし一寺の本尊たりしとなり。今は人繼（ヒトツギ）と書けり。

大窪天滿宮　大窪にあり、此地の鎮守とす。祭祀は六月廿五日なり。別當は梅松山大聖院と號して、聖護院宮の直末、本山派の江戸役所にして、大先達たり。當社を世に聚の天神或は西向の天神とも稱せり。社壇西に向ふ故に云ふなるべし。聚と稱する來由しるべかちず。相傳ふ、安貞年間、拇尾明惠上人の勸請にして、明慶覺運等是を奉祀す。後又太田道灌神田を寄附す。然るに、天正年間兵燹にかかり、烏有となりし頃、其神躰溪間の櫻の枝に移り止り給ふ。其木を瑞現櫻（ズヰゲンザクラ）と名づく。今は枯れたりしといふ。此時、

大窪天満宮

社壇西に向へたり西向とのひ又は家の天神と称せり
ときは東の東面ちくしの境内ときわ山麓にあり

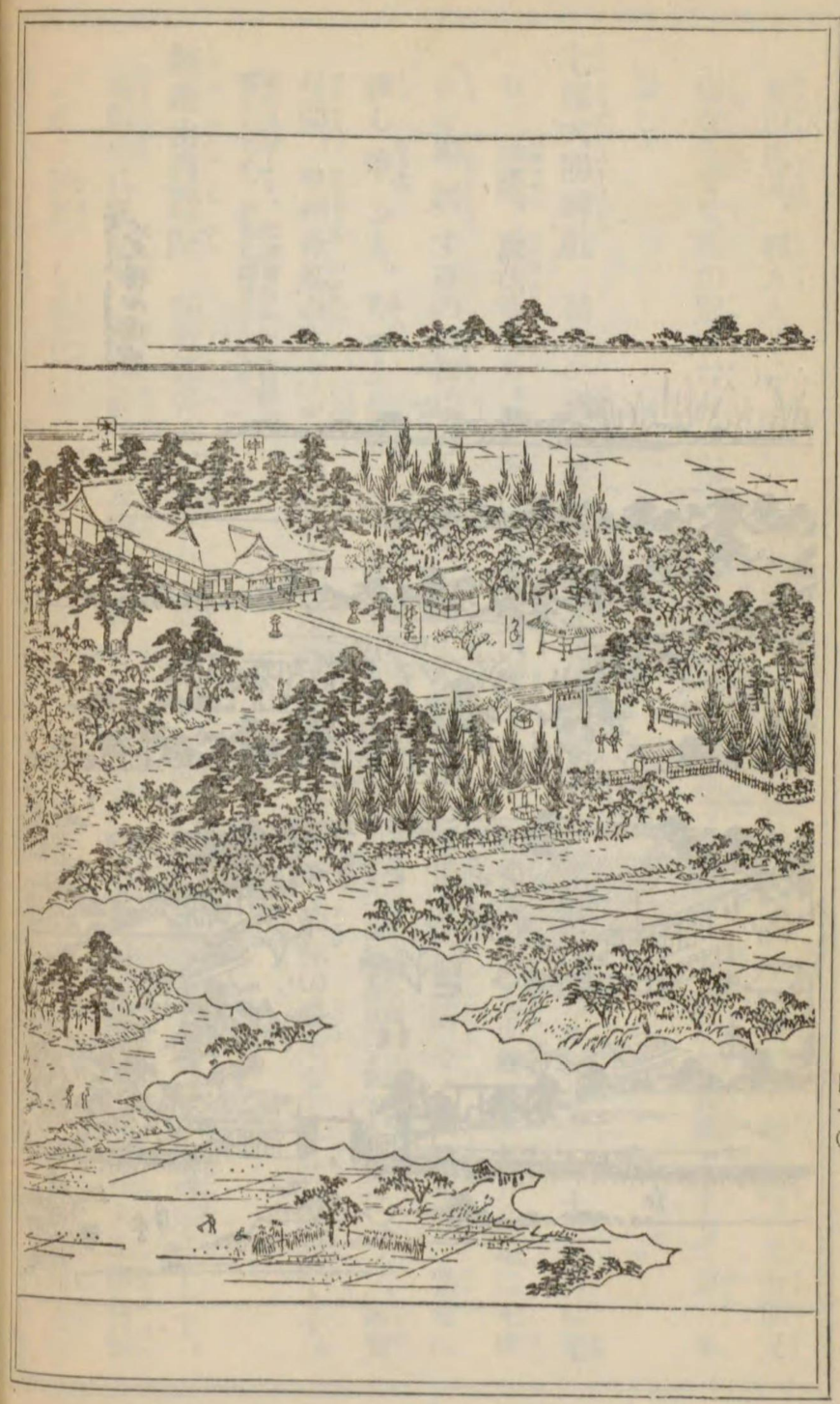




青山氏某、鄕人と共に謀て、祠を經營す。聖護院宮道晃法親王、東國下向の時、大僧都元信をして當社の別當たらしむ。こゝにおいて神廟漸く備はり、四時の祭典綿々として怠る事なし。

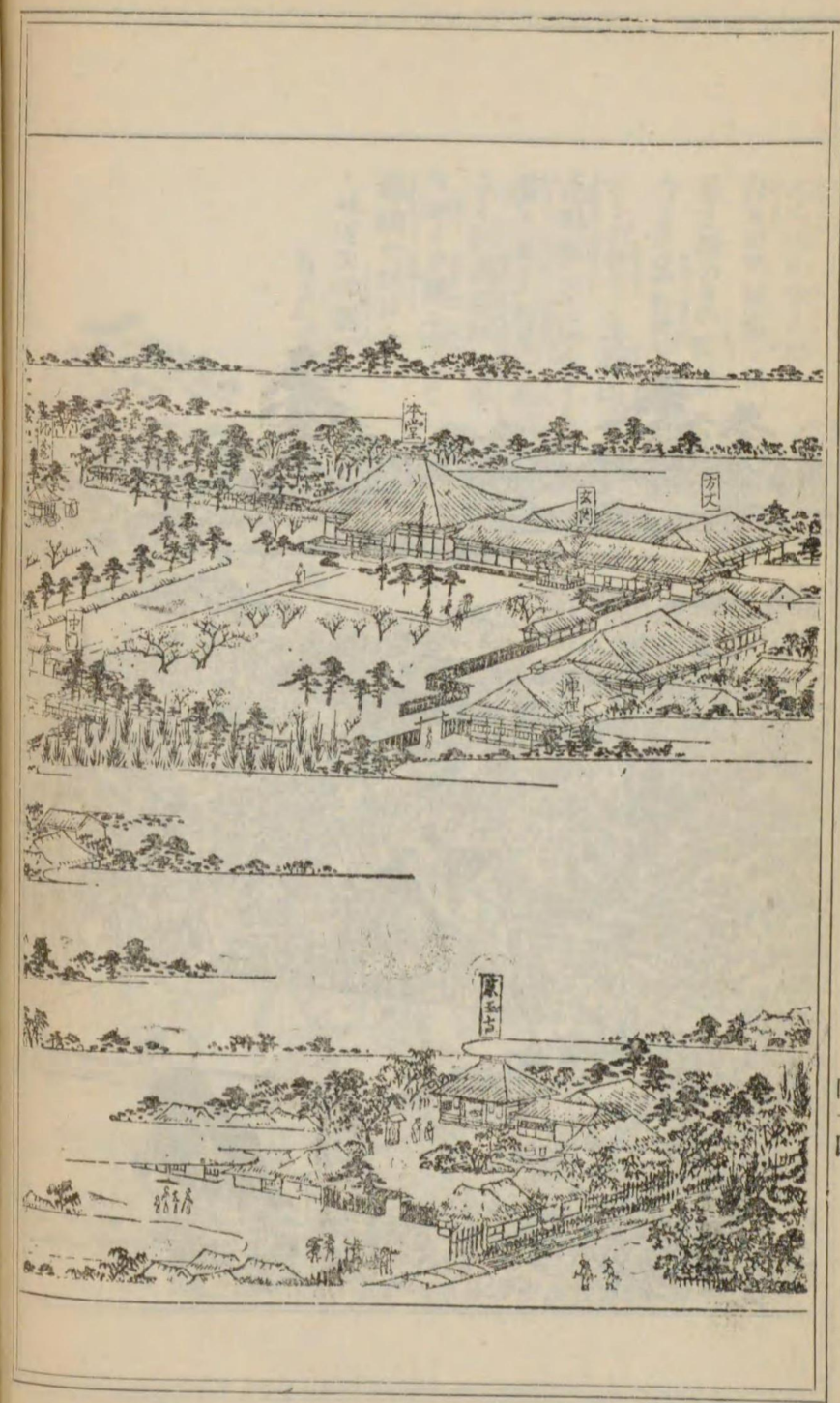
七面大明神社　同東の隣日蓮宗春時山法善寺に安置す。祭禮は九月十三日より十九日に至り、誦經、說法等あり。尊影は日護上人の作といふ。相傳ふ、此七面尊は、江戸の地に七面宮を勸請するの最初にして、往古駿州大久保に、三澤氏某勸請す。萬治年間、當寺へ移し奉ると。或人云ふ三澤氏は、小次郎政廣と云ふ淡州の人なり、後に駿河國富士郡大鹿村に移り住す、富士十七騎の一なり、延慶二年己酉五月十八日に沒す、法號三澤院法性日弘と號すと。或は云ふ、延寶年間、甲州身延山よりこゝに移すと。境内櫻樹多くありて、彌生の盛をもて一時の奇觀とす。寛文三年より、此神前にもいて常經讀誦をはじめ、永世に絶えざらしむ。

鎭護山自證院　同所西の方、道より右側にあり。土俗此所を饅頭ヶ谷と云ふ。圓融寺と號す。天台宗にして、東叡山に屬せり。尾州亞相光友卿の御願中千代姫君の御母堂、自證院殿光山曉桂大姉御菩提の爲に開創せし精舍なり。本尊は阿彌陀如來、開山を日須上人と號す。當寺始は日蓮宗に



諏訪谷村
諏訪明神社

大久保の映山紅は
弥生の末、咲盛りて
最よ除のりの数株
あり。其紅艶と愛
するの称ありて、賞遊を
花形微少といへども
叢り開く杜鵑を散じ
さながら満庭紅を灌
ぐ如く夕陽に映して
錦繡の林試うべし
此辺の壮観
なるべし



自證院

て、本理山自證寺と唱へしが、元文年間、故ありて天台宗に改めらる。當寺を世にふし寺と字す。諸堂宇悉く種々の節ある木を集めて造立したる故に、衆人見て奇異なりとす。因て此稱あり。蹴蛛の井といふは、當寺の境内にあり。來由は誌すに堪へず、こゝに略す。昔は山林に櫻多かりし由、諸書に見えたれども、多くは枯れ失せて、今纔に古木二三株存せるのみ。

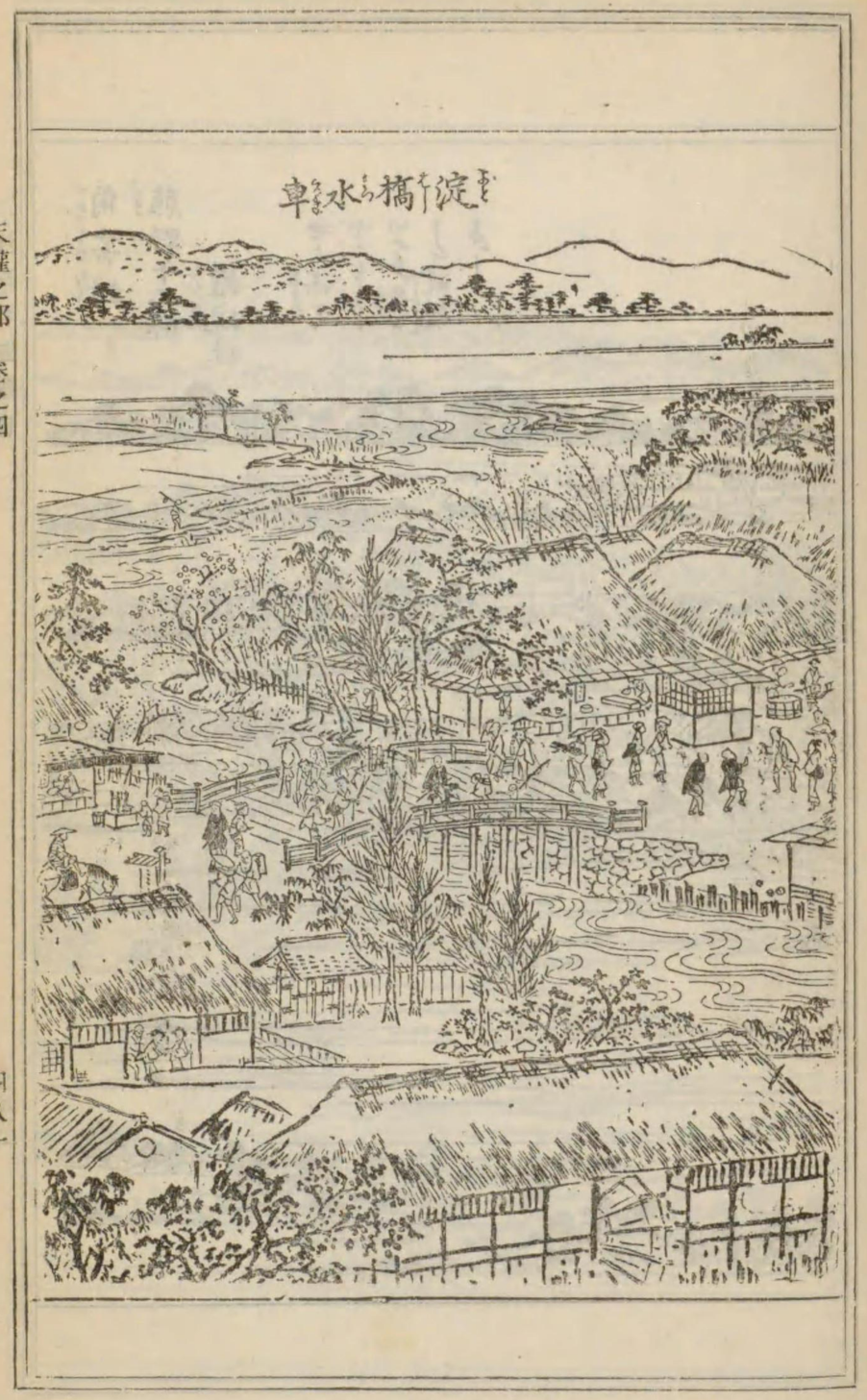
紅葉山西迎寺　同巽の方二町ばかりを隔てゝ、四谷北寺町にあり。淨土宗にして、增上寺に屬す。往古太田持資の臣、伏見勘七といへる人の草創なりといへり。舊は御城中紅葉山の地にありしを、天正の後此地に移すといふ。本尊阿彌陀如來、開山は儀蓮社仁譽上人存公和尚と號す。

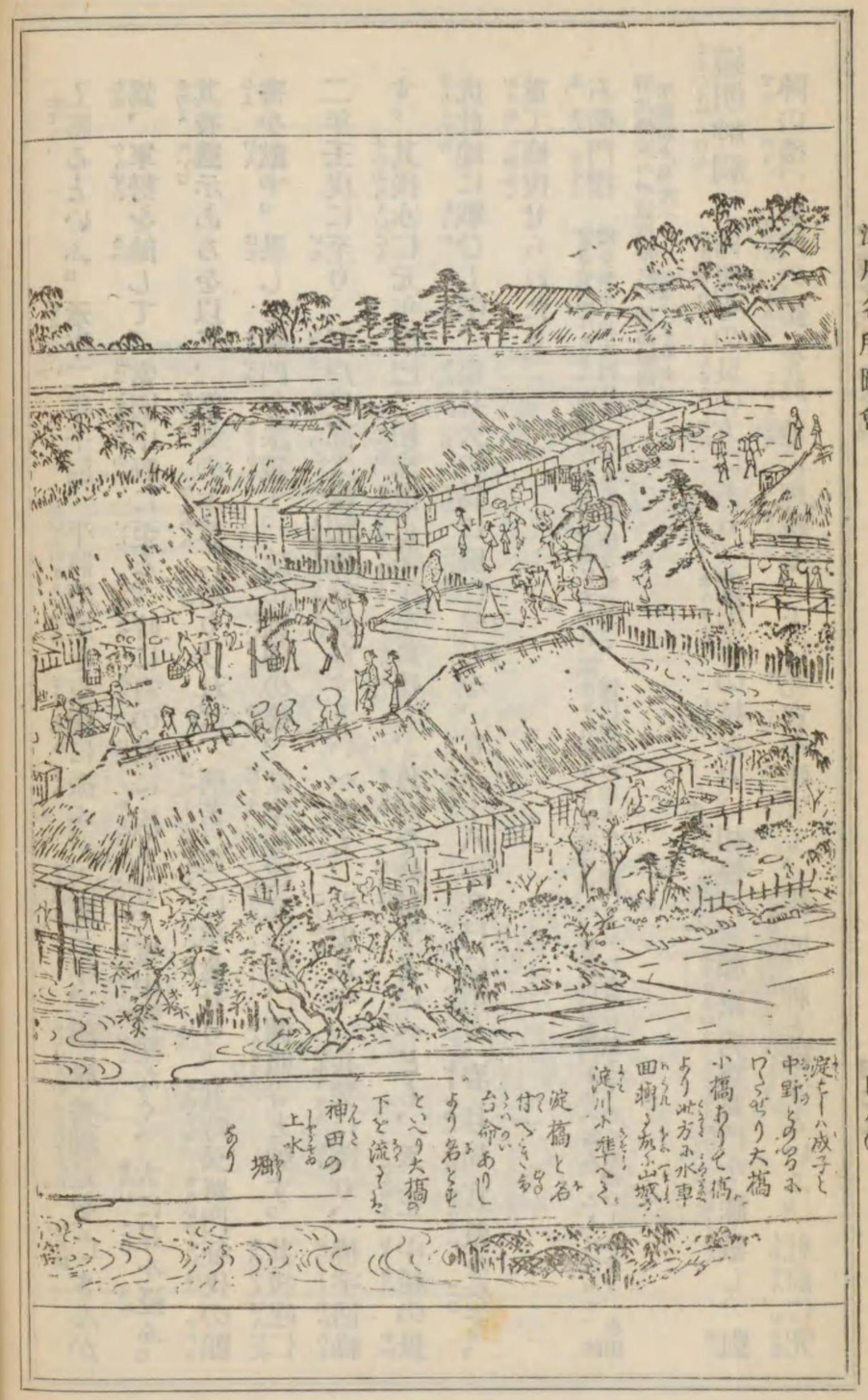
醫光山圓照寺　瑠璃光院と號す。柏木村にあり。眞言宗にして、田圃の興樂寺に屬す。本尊藥師如來の像は、行基大士の作、脇士は日光月光の二菩薩なり。又左右の壇ーに十二神將の像を安ず。相傳ふ、醍醐帝の御宇、理源大師の法弟、筑波の貞崇僧都、此像を此地に安置

し奉るといふ。承平二年壬辰、平將門威を東關に振ふ。天慶三年、藤原秀郷是を亡さんが爲、軍勢を帥して、當國中野に至る。時に右の臂に疾あり。軍中醫藥なく、大に是を憂ふ。其夜靈示あるを以て、當寺の本尊に祈りければ、病苦忽に平愈せり。其時又將門征伐の願書を獻ず。果して將門を誅戮す。故に凱陣の後、堂宇を建立して、圓照寺と號す。其後建仁二年壬戌に至り、江戸民部大輔賴助修營なすといへども、弘安八年、兵燹に罹り、佛宇回祿す。其後永仁元年癸巳、賴瑜僧正茅宇を葺覆し、舊記を修補すといへども、天正中越の景虎此地に戰ひし頃、復兵火の爲に廢亡せしを、寛永十八年辛巳に至り、春日局官裁を乞て、重て修復せられたり。

右衛門櫻　當寺堂前にあり、單瓣にして芳香殊にすぐれ、類なき名樹なり。里諺にいふ、昔武田右衛門といへる人、こゝに住んで、此櫻を愛す、柏木村にありて名高き櫻なればとて、源氏物語の柏木の右衛門といへる名に就きて、かくは呼びしとなり。小田原北條家の所領役帳に、綾部惣四郎所領柏木角筈（ツノハズ）とあり。

鎧明神祠　圓照寺の艮の方にあり。圓照寺の持なり。相傳ふ、藤原秀郷將門を誅戮し、凱陣の後、將門の鎧を此地に埋藏し、上に禿倉を建てて、鎧明神と稱すといふ。社前に兜

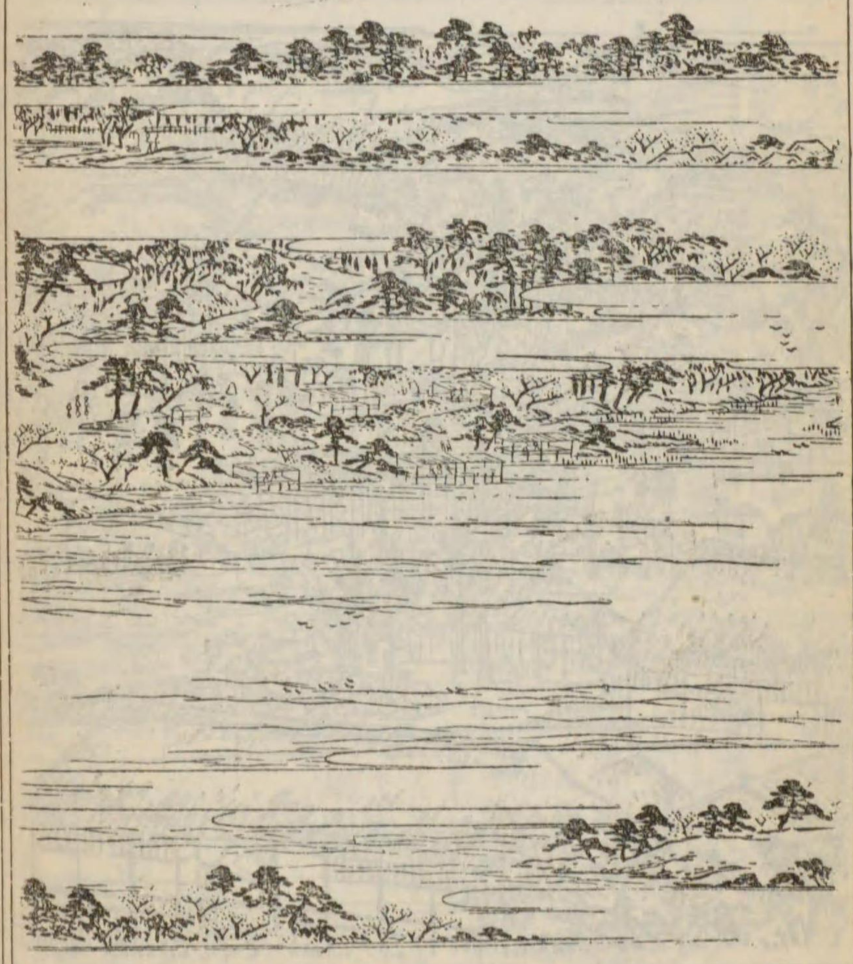


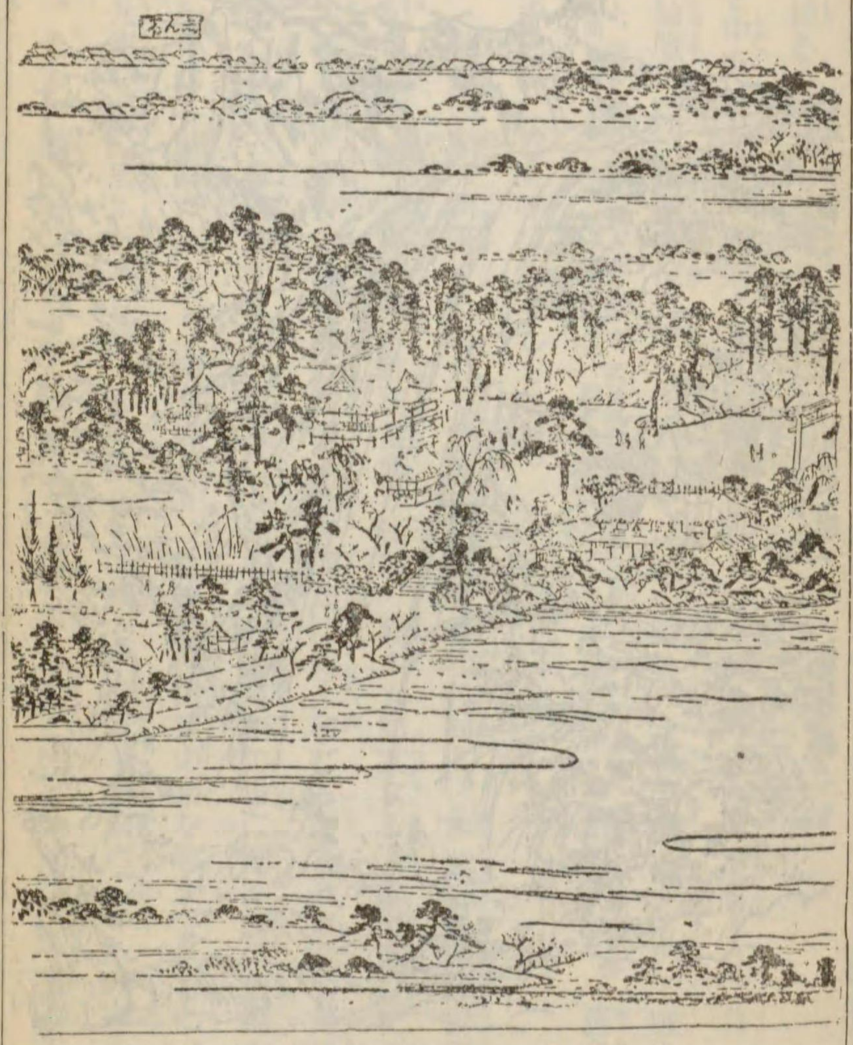


淀ハ成子と中野とのあひだ
にあり大橋
小橋あり橋
より此方に水車
田圃あり山堰
淀川に準ずべし
淀橋と名
付べき
台命あり
より名とも
とへり大橋の
下を流れ
神田の
上水
堰
あり

角筈村
熊野十二所
權現社

世人誤て十二社と唱へ多景を以て遊觀とす



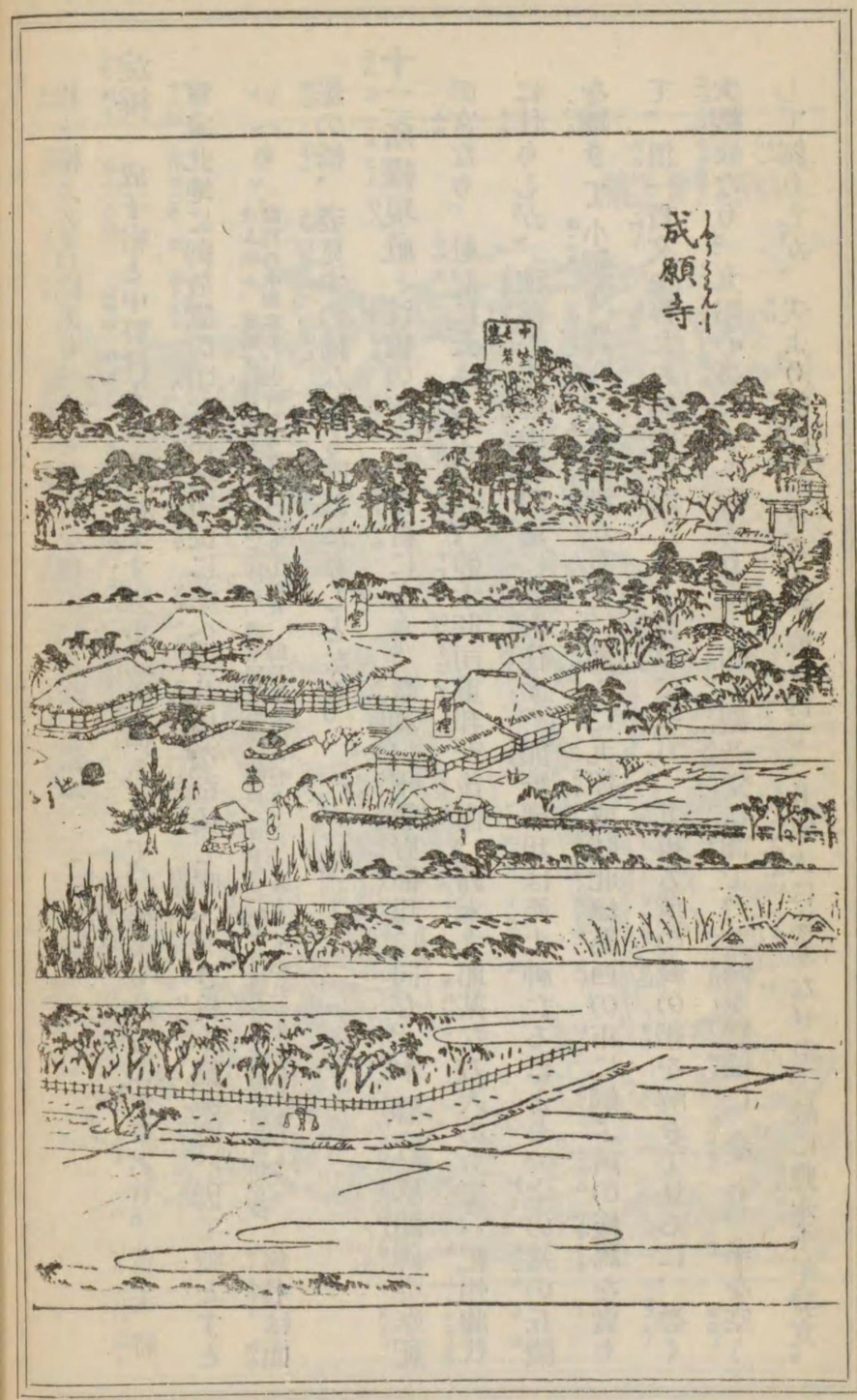


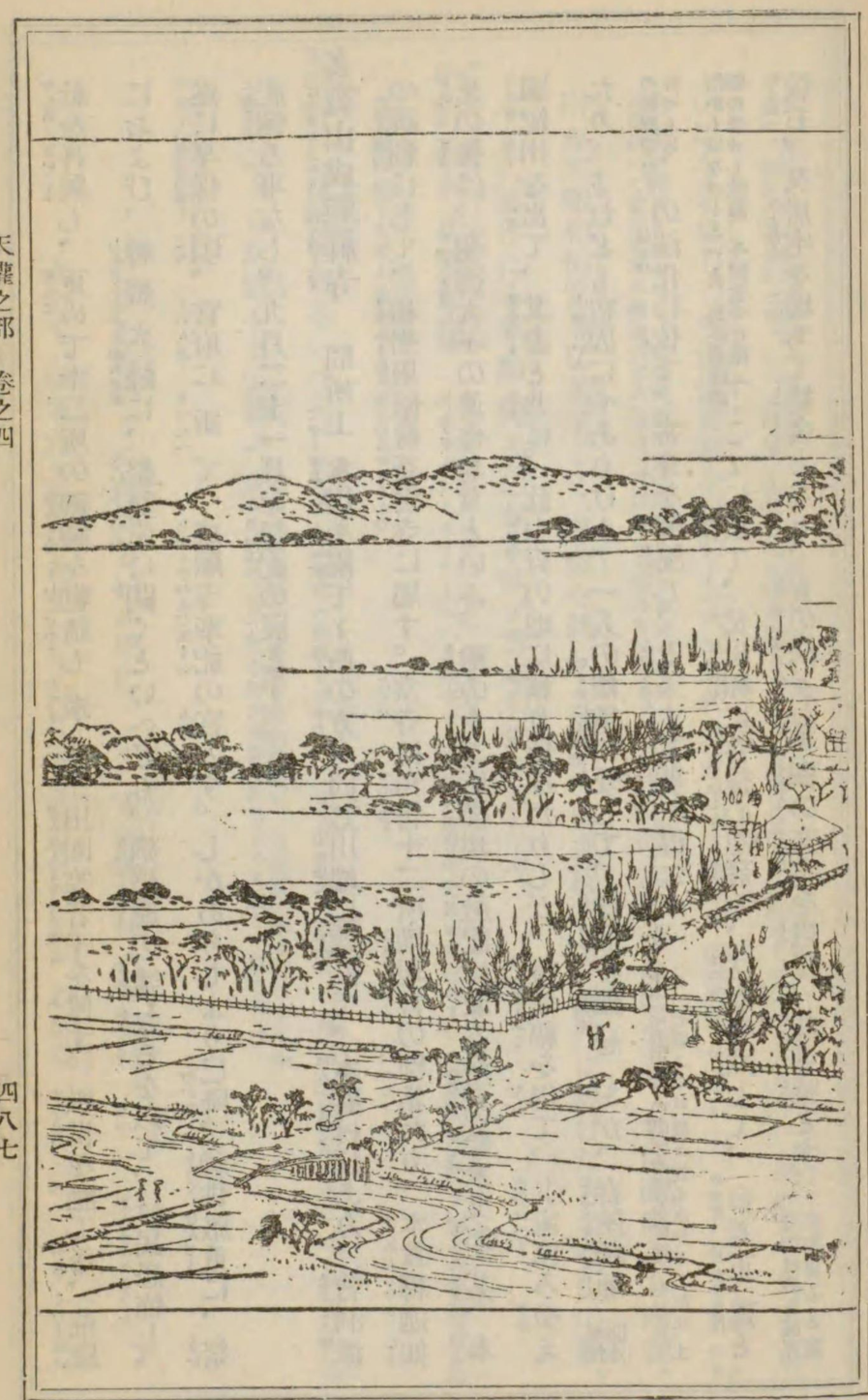
熊野の瀧

松と稱ふる古松あり。是も其兜を埋めたる印と云ふ。

淀橋　成子宿と中野村との間に架す大小二の橋ありて、橋より此方に水車あり。昔大將軍家此地に御放鷹の頃、山城の淀に準へ、此橋を淀橋と唱ふべき旨上意あり。因て號とすといへり。或人云ふ、淀橋は餘戸橋ならん、和名抄に、武藏國豐島郡に餘戸〔ヨド〕といへる村あり、此地は豐島郡と多摩郡の中間にて、上古のあまりべなりし故に、餘戸橋と唱へたりしならんと。しかれども其是非をしらず。舊名は面影の橋、姿見ずの橋なども呼びたりしとなり。

十二所權現社　淀橋の南、角筈村にあり。祭神紀州熊野權現に同じ。本鄕村成願禪寺奉祀の宮なり。社記に云ふ、應永年間、鈴木莊司重邦が後裔、鈴木九郎某なる人ありて、紀州藤代に住りしが、流落して此中野の地に移り住す。熊野權現は産土神たるにより、宅の邊の丘陵を闢きて小祠を營み、尊信深かりし。然るに九郎或時北總葛西の市に飼ふ所の疲馬を賣りて、價一貫文を得たる歸路に臨んで、淺草に至り、其得る所の錢の緡を解きて見るに、悉く大觀錢なり。九郎心裏に思ふ所ありて、卽ち觀音堂に詣で、其錢を寶前に奉り、手を空うして歸りしが、夫より後、はからざる幸福を得て、其家大に富をなせり。故に應永十年癸亥、


成願寺



社を再興し、更めて十二所の御神を勸請し奉り、田園等若干を附す。數世を歴て後、荒廢におよび、神燈火疎に、祭奠常に闕くといへども、猶感應の速なるを以て、村民恐怖し、遂に享保の頃、官府に訴て、成願寺奉祀の宮とす。しかありしより已降、神供嚴重に、祭祀懈る事なし。九月二十一日を祭祀の辰とす。

多寶山成願禪寺

同所上水川を隔てゝ西の方、同じ川端に臨んで、本郷村にあり。曹洞派の禪刹にして、相州田原村香雲寺に屬す。當寺は角筈十二所權現宮の別當たり。本尊釋迦如來の像は、聖德太子の眞作なりといふ。前の十二所權現の社記に載る所の鈴木九郎某、本國紀州を出て、其妻と共に、此中野の地に移り住みたりしが、後幸福を得て、其家富み榮えたり。されども宿因にやありけん、一人の娘俄に死して、蛇形を顯せしが、春屋禪師（相州開本の最勝寺に住せちる。）の法化に依て、畜身を解脫し、上天する事を得たり。（十二所權現宮の御手洗池を蛇池（ヘビガイケ）と唱ふるは、彼の蛇のみかりし故に、土俗かくはなづくといふ。其時春屋禪師の著せし法服、今猶當寺に傳ふ。）こゝに於て、父母頻に菩提心を發し、法喜受戒して、自ら正蓮と改む。又居宅を壞ちて精舍となし、女の法名正觀の文字を以て、其寺號とす。（女の法名を眞窓正觀禪女と號す。永祿二年小田原北條家の所領役帳に、島津又次郎といふ人の所領の内に、中野内正觀寺といへる號を注したるは、當寺の事なるべし。しかる時は、永祿の頃迄は正觀寺と呼び、其後に至りて成願寺とは改めしならん。）諸堂および三層の塔を造立し、生涯優婆塞を勤行して、遂に永享十二年庚申の歳終をとれり。（三層塔は、今中野の通り道より右にあり、次の條下をみるべし。當寺境内に、塔屋殿と稱する地あるはけ、其舊跡にて當寺本尊の釋迦如來の像も、其塔中の本尊なりといふ。）其後文明八年丙申に至り、春屋禪師より四世、川庵宗鼎和尚當寺に董席して、傳燈を挑ぐ。法嗣今に連綿たり。總門に掲けたる多寶山の額、本堂に掲けたる成願禪寺の四字は、雪峯和尚の筆なり。

中野長者正蓮墳墓

（同じ境内叢林の中にあり、開基鈴木九郎の墓なり。其石塔今崩れて、なかば土中に埋れてあり。紫一本（ムラサキノヒトモト）といへる册子に、武州多摩郡中野の中正觀寺といふ藥師の棟札に、朝日長者昌運と記してありと云々。昌正同音なり。同卷高田百八塚の條下と照し合はせて見るべし。）

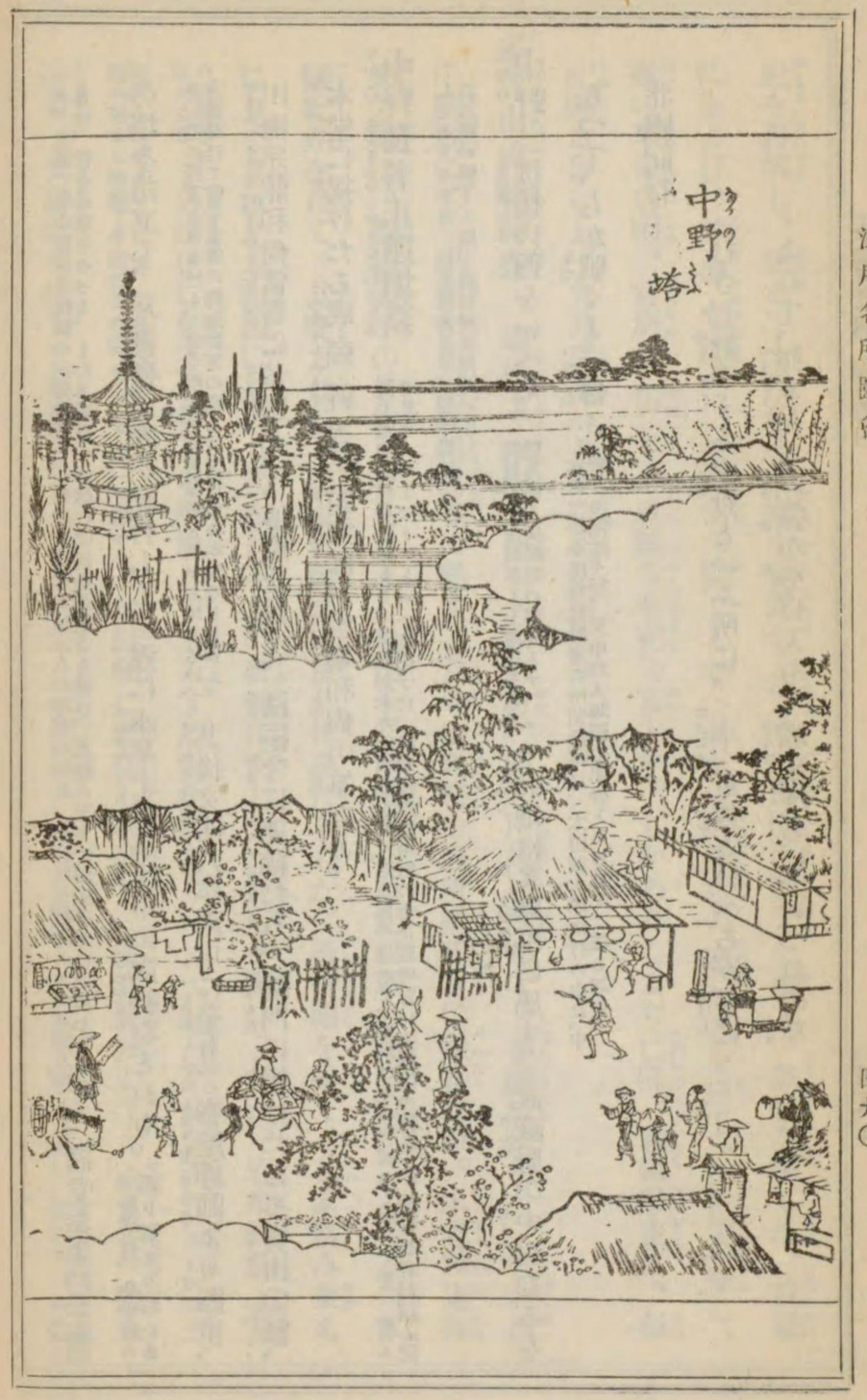
中野

淀橋の西をいへり。（淀橋の下を流るゝ上水川を以て、豐島郡と多摩郡の郡界とす。）

もつて、しか號くと云傳ふ。（永祿二年小田原北條家の所領役帳に、太田新六郎知行の中に、中野うち阿佐ケ谷、又中野大場源七郎分とある地を、注し加ふ。）

北國記行

むさし野のうち中野といふ所に、平重俊といへるが催によりて、渺々たる朝露を分け入りて瞻望するに、いづれの草



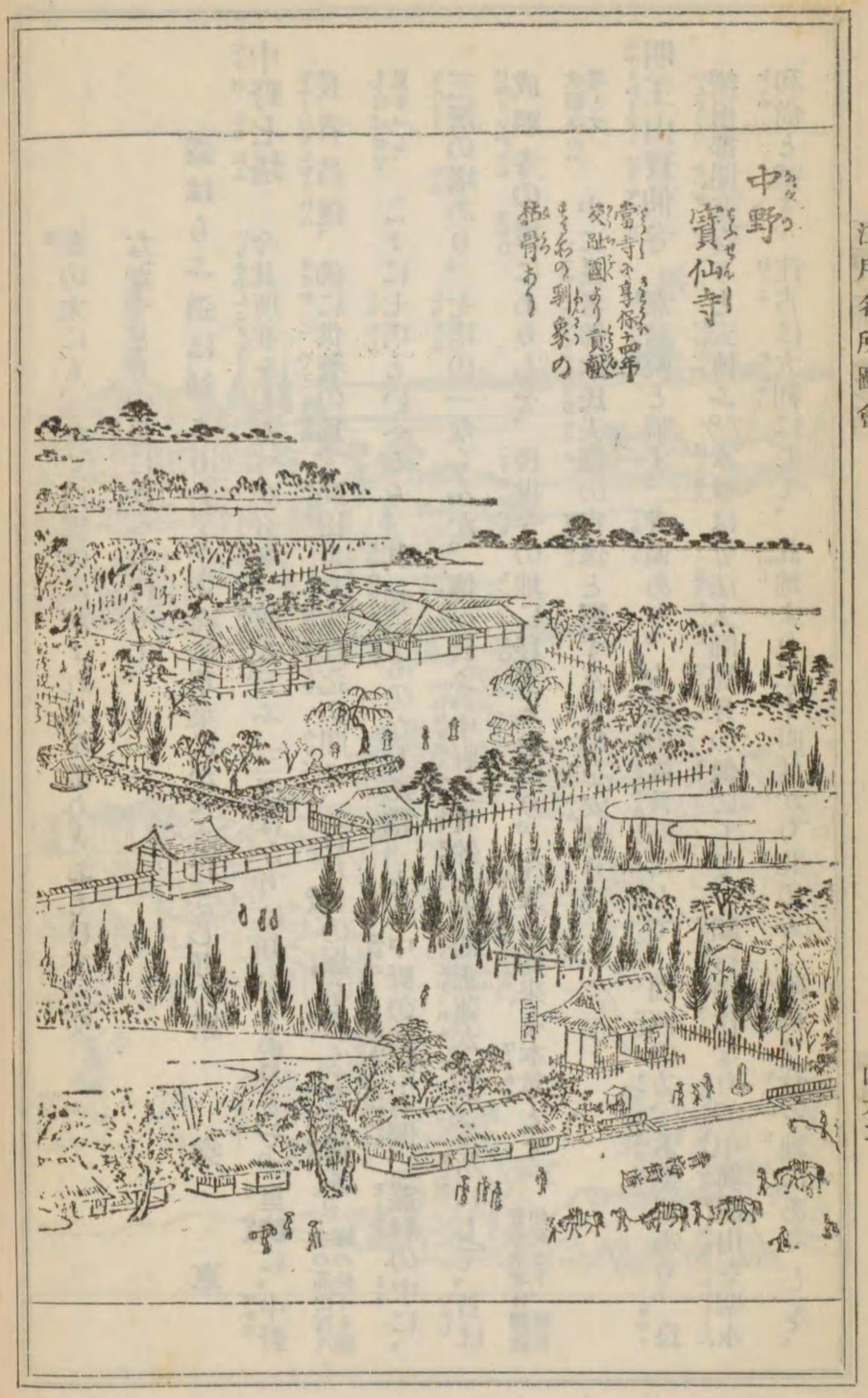
葉の末にも、たゞ白雲のみかゝれるを限りとおもひて、又

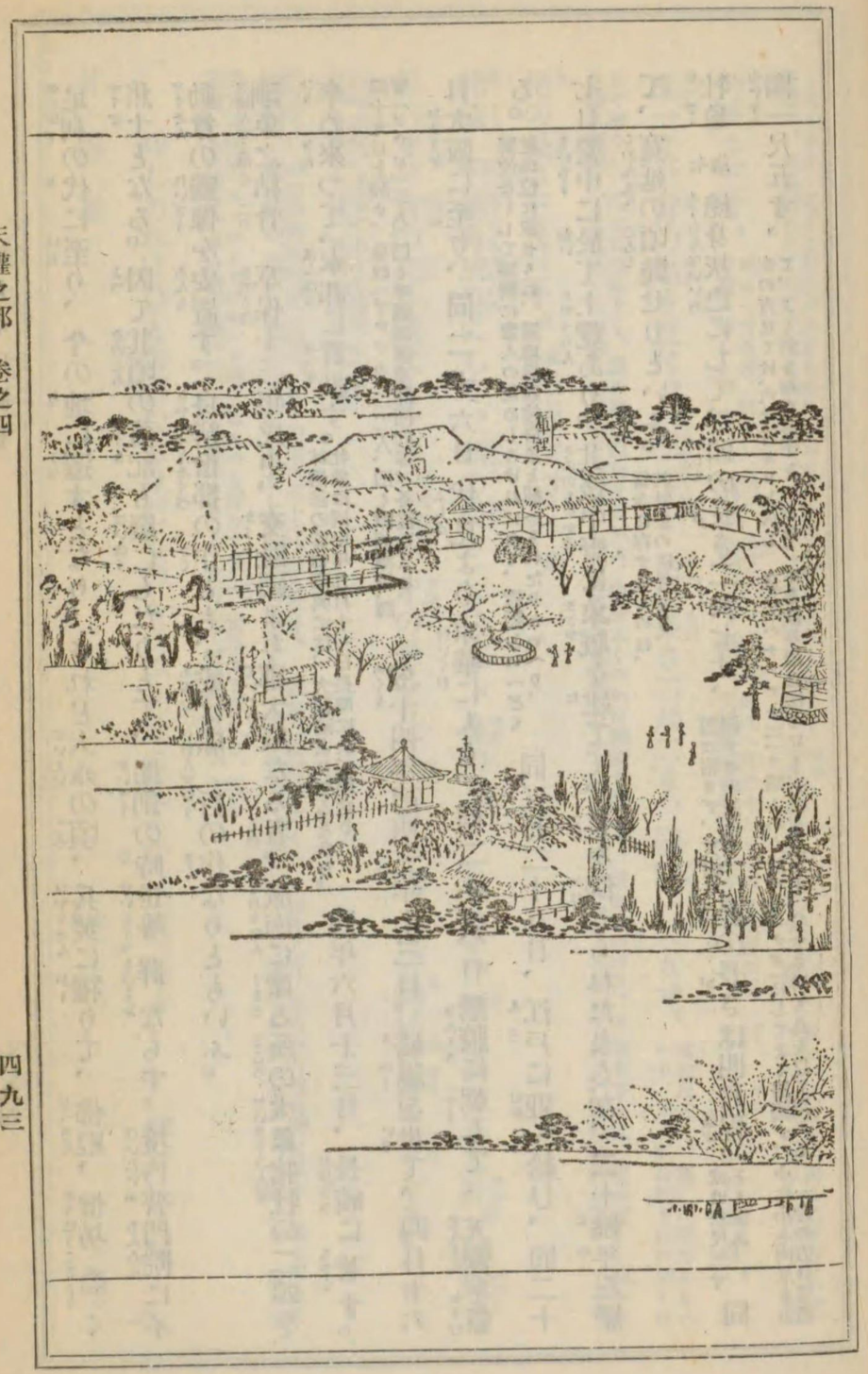
なかやどりの里にかへり侍りて、

露はらふ道は袖よりむらぎえの草葉にかへるむさし野の原　堯惠

中野七塔　今其所在をしるべからず。或人云ふ、三所ばかりは知れてありとぞ。里諺に、中野長者昌蓮、佛に供養の爲、高田より大窪迄の間に、百八員の塚を築くと云傳ふ。（次の高田百八塚の條下を照し合はせて見るべし。）こゝに七塔といへるも、其類のものならん歟。また中野の通の右側、叢林の中に、三層の塔あり。七塔の一ならんか。傳へ云ふ、中野長者鈴木九郎正蓮が建つる所にして、昔は成願寺の境にありしを、後世今の地に移すといへり。今大日如來を本尊とす。（昔の本尊は釋迦如來なり。後世成願寺の本尊とす。）中に長者鈴木氏夫婦の肖像と稱するものを安ぜり。

明王山寶仙寺　無動院と號す。寺領あり。古義の眞言宗にして、同西の方、右側にあり。良辨僧都開基なりと云傳ふ。本尊は弘法大師等身の像にして、願行の作なり。中興開山を聖永和尚と號す。往古は大刹にして、此地より二十町ばかり北の方、阿佐ヶ谷の地にありしを、


中野
寶仙寺
當寺ハ享保十四年
交趾國より貢獻
せしの馴象の
骸骨あり



足利の代に至り、今の地に遷すとなり。されど大永の頃、兵燹に罹りて、佛殿、僧坊悉く焦土となる。因て其頃の舊記も廢亡したりとて、開創の時世等詳ならず。境内普門院に不動尊の靈像を安置す。良辨僧都の作とも、或は願行の作なりともいふ。

馴象之枯骨　享保十三年戊申、交趾國より鄭大威なる者、廣南に產る所の大象牝牡の二頭を率ゐ來つて、本邦に貢獻す。林信言の事物權輿には、大泥國より來るとあり。牝象は同申年九月十一日長崎に於て斃せり。同年六月十三日、長崎に著す。同十九日上陸す。象奴（ザウツカヒ）二人、曰く潤鼓潤綿、譯官（ツウジ）二人、曰く李錫明廣南陳阿卯等、各從ひ來る。　翌十四年己酉三年十三日、崎陽を出て、四月十六日大阪に至り、同二十六日伏見より京華に入り、同二十八日禁腋に朝して、天覽を蒙る。爵位なくして禁闕に參入のためしなければとて、獸類といへども從四位に叙せられ、廣南從四位白象と稱へられたりといへり。同五月二十五日、江戸に迎へ給ひ、同二十七日營中に於て上覽あり。其後中野に象厩を建てて、是を飼せられたりしが、二十餘年を歷て、寛延の頃斃せりといふ。當寺に存するものは、其牡象の枯骨なり。

牡象　歲七　總身灰色にして、頭の長さ二尺七寸、頭は俯さず、又顧廻する事能はず。鼻の長さは四尺程、或は三尺三寸とも云ふ。同圍一尺五寸、末の方にては、六寸許ありといふ。鼻出（ハナノアナ）二ツ端ふかく凹（ナカクボ）にしてよく開闔す。中に小き肉爪ありて、よく針を拾ひ芥子をつまむ。水を飲み酒を啜るにも又鼻を以てし、食する時も鼻を以て捲入る。一身の力は皆悉く鼻にあり、起きて行かんとする時も、先づ鼻を以て地を拄へて後あしを運ず。口は頤にかくれて、地を去る事遠く、常には見ゆる事なし。牙の長一尺二寸程、或は一尺四寸、圖は元の方にて一尺六寸許ありといへり。眼の長さ三寸、或は一寸五分、形さゝの葉の如しと云ふ。耳の幅八寸餘、或は一尺三寸とも、形は蝙蝠の翅又銀杏葉の形に似たりともいふ。胴の長さ七尺四寸、同圍一丈、背の高さ五尺、或は五尺七寸ともいへり。足の長さ二尺二寸、同圍一尺五寸、或三尺五寸、圍二尺五寸ともいへり。足の形は圓き柱の如くにして指なく、爪は五枚ありて、梨の形に似たりといふ。總身ふくやかに擁腫すれども、峻嶺にのぼり、羊腸を下るに、電の如く深き水を涉る事捷く、其性能く人に馴れて、其意を解す。故に象奴たる者其くびすぢに跨り、鉄鈎（オシキ）を以て鈎り、進退曲折左右すといふ。

尾の長さ三尺三寸。或は二尺七八寸とも。形牛尾に似たりとなり。

牝象　歲五　總身灰色にして、頭の長さ二尺五寸、鼻の長さ二尺八寸、胴の長さ五尺許、同圍八尺六寸、背の高さ四尺七寸、或は四尺なりと。牙の長さ五寸程ありて、その餘は牡象に等しといへり。

此牝象は、長崎にありし頃死したり。江戸へ來りしは、牡象のみなり。

飼料　一日の間に新藁二百斤、さゝの葉百五十斤、青草百斤、芭蕉二株（根を省く）、大唐米八升、其内四升程は粥に焚きて冷し置きて是を飼ひ、濕水（二度に二斗許）あんなし饅頭五十、橙五十、九年母三十、又折節大豆を煮冷して飼ふ事あり、青草の中、殊に俗間角力取草（スマウトリグサ）と稱するものを好みて食ふ。青草なき折には、籾を粢穗ともに飼ひ、或は蔓大根のたぐひも食ふとなり。又好んで酒を飲むといへり。

時しあればひとの國なるけだものもけふ九重に見るがうれしき　御製

甘露集

めづらしく都にきさの唐やまとすぎし野山は幾千里なる　靈元法皇

情しるきさのこゝろよから人にあらぬやつこの手にもなれきて　同

これもまた此時なりとかきつめて見そむるきさのやまとことの葉　同

不昧直院集

此國にきさもなつくやさまことに見ゆるものから猛からずして　光榮

竹の葉をかふ獸のまづや來し實をはむ烏もまたん御代とて　同

芳雲集

たがへして民のちからもそふべくば豐なる世のきざしとぞ見る　實蔭

いざやまだ見ぬを見しかなやまとなるきさ山まつの名には聞ても　同

民をだにたすけてきさのたがやさばとしあらん世ぞ豐なるべき　同

家集

この君をしるけだものや心あるすがたも洞にけふは見すらん　通躬

おのがすむ國は千里のそなたよりはるゞきさのこゝろをぞ思ふ　公福

名にきゝし遠きさかひの獸をうつし繪ならで見るもめづらし　爲久

桃園　同所西北の方、十町ばかりを隔つ。享保の頃、此邊の田畝に、悉く桃樹を栽ふしめ給ひ、其頃台命によりて、此地を桃園と呼ばせ給ひしといへり。今も彌生の頃、紅白色をまじへて、一時の奇觀たり。此地に大將軍家御遊獵の時の御腰掛の地ありっ又岡の前を流るゝ小川に架せる橋を、石神橋と唱ふ。此ながれは、石神の三寶寺の池より發する所の餘流なり。

桃園觀音堂　土人は桃堂と稱せり。同所高圓寺村の高圓寺といへる禪林に安置す。本尊は聖觀音にして、惠心僧都の彫像なりといへり。當寺は中野の成願寺に屬す。弘治年間の草創にして、開山を建室和尚となづく。むかしは大將軍家度々當寺へ立寄らせ給ひ、假の御殿あり

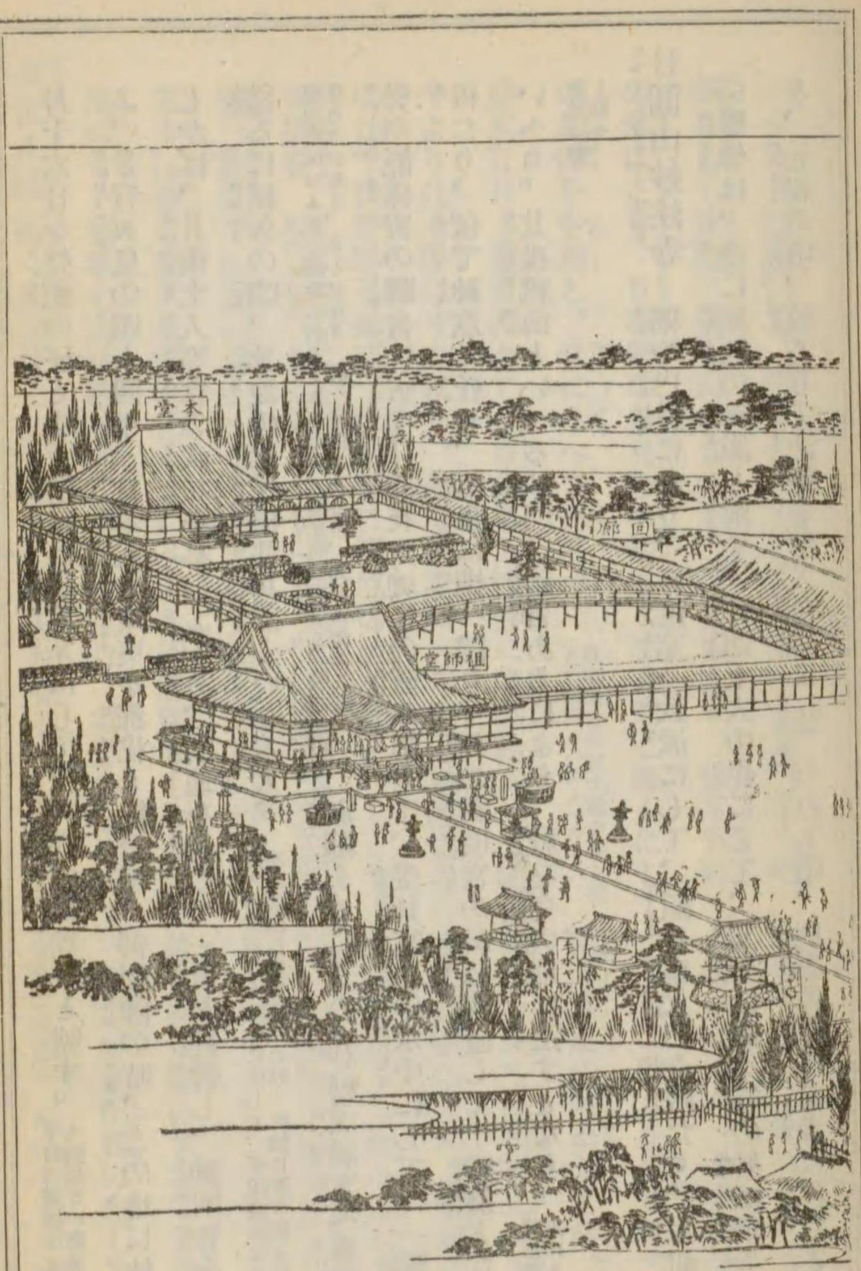
しかば、當寺の山號を御殿山ともとなへ侍るとなり。又當寺境内其頃は桃樹多かりしによりて、桃園と稱すべき旨、台命あり。其後享保に至り、新に中野の地に桃園をうつし給ひ、田圃の間々に桃樹を多く栽ゑしめ、桃園と命ぜられたりとなり。故に土人は當寺をさして桃園の舊地なりといへり。

阿佐ケ谷神明宮　同西の方、阿佐ケ谷にあり、中野の通よりは右へ入りて、十八町許あり。阿佐ケ谷は本田原北條家の所領役帳に、中野内阿佐ケ谷とあり。太田新六郎の所領にして、昔は中野に屬せし小名なりしとぼし。祭神伊勢に相同じ。神躰は一顆の靈石なり。毎歳九

桃園春興

堀の内妙法寺

當寺小安置の日蓮大士の感應ハ多ふ唐墳ゆゑ風雨寒暑をいとひ都鄙の貴賤日毎ふくふ詣して百歳糸竹片時絶るすなし　夢さ七月の法華千部會十月の會式ハ糸竹絲竹の如く駢闐を洗ふ



月十六日を祭祀の辰とす。別當は眞言宗にして、阿谷山世尊院と號す。中野の寶仙寺に屬す。則ち寶仙寺の舊地なり。相傳ふ、景行天皇の四十四年、日本武尊東夷を征伐し給ひて、御凱陣の時、この地に休らひ給ひしかば、其後土人等尊の武功を慕ひ奉り、其地を封じて一社を經營し、神明宮を勸請す。然るに建久の頃、此地の農民横井兵部といへる人、此人の遠裔今も此地に住して、子孫連綿たりといふ。其昔源頼義朝臣奥州征伐の時、此地に至り給ふに、此横井氏の祖兵部といふ者隨兵に加りてありしが、急に病に臨みて、戰場に赴く事なりがたく、こゝに止り、終に農民となる由、其家に傳ふと云ふ。勢州能保野の驛舍に宿す。其夜太神宮の靈示ありて、翌日宮川の水中にして、一顆の靈石を得たり、依て神意に任せ、舊里に携へ歸り、件の神明宮の社に安置して、神躰となし奉るといへり。其後祇海といへる沙門、神告あるにより、社を今の地に遷すとなり。其舊地は七八町東の方にあり、土人これを元伊勢と稱す。

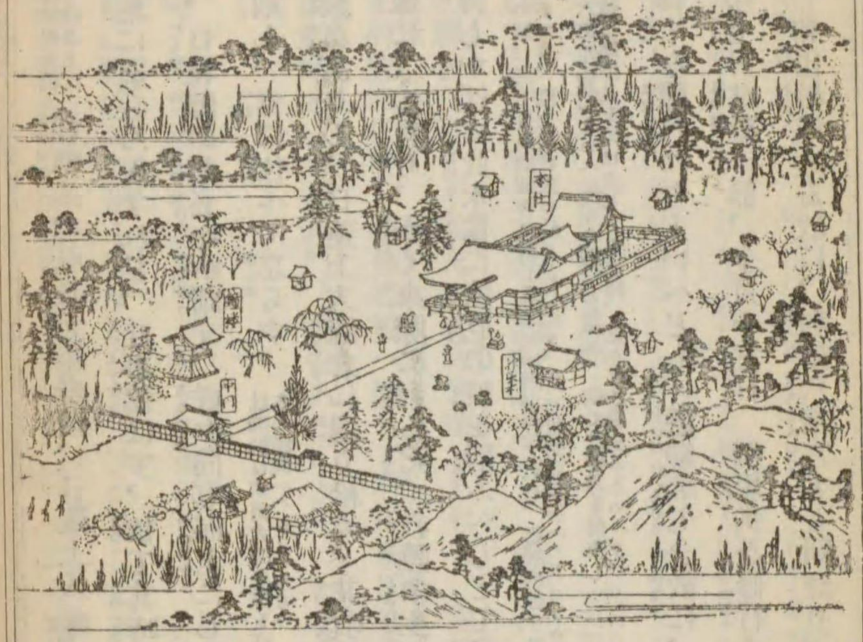
日圓山妙法寺　堀の内村にあり、日蓮宗一致派にして、頗る盛大の寺院たり。宗祖日蓮大士の靈像は、世に除厄の御影と稱す。日朗上人の作にして、其先は碑文谷の妙法華寺にありしを、元祿の頃、故ありて法華寺を天台宗に改られし頃、此靈像をば當寺に移しまるらすといへり。當寺住侶日性師の代なり。相傳ふ、弘長元年辛酉、日蓮上人四十歳伊豆の伊東へ配流せらる。日朗師隨身して其地に至らんとすれど、此事協はず、依て其時上人の命により、日朗師は鎌倉由井の濱に止り、日夜師の赦免を祈請す、或夕同じ海上にして、一箇の靈木を感得し、日蓮上人の眞像を手刻し、常に仕へて怠らず。此御影は宗祖大師の像を造るの權輿（ハジメ）なり。諸天感應の時至りてや、弘長三年癸亥五月、赦免ありて、日蓮上人鎌倉に還り給ふ、其頃此尊像を見て感悅ましく、我心神今より此木像にうつれり、永く來際に到る迄、救護衆生の利益無窮ならん、我既に四十二歳にして救を得しかば、此木像に除厄の號を稱ふべしとて、自ら點眼なし給ふとなり。

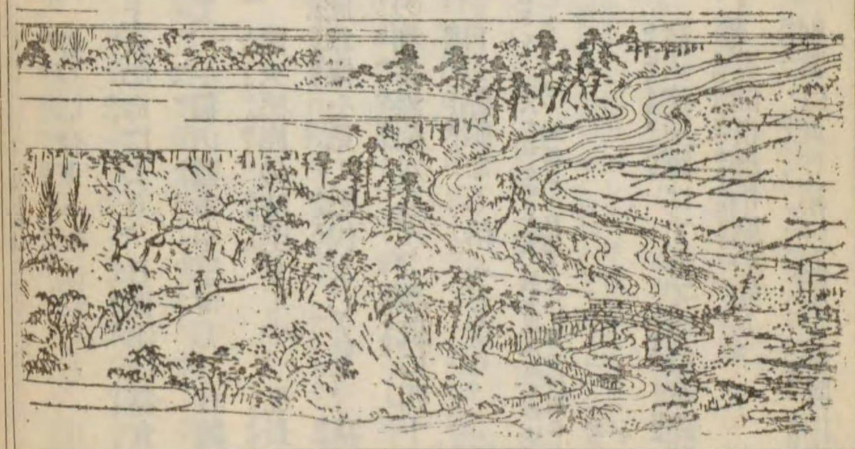
加持符　有信の輩、三七日の間此符に對し正念に唱題誦經すれば、寄願成就するとて、諸人これを受くる。病を患ふるものは、其病床のあたり、壁上或は家の柱などへ貼す。故に世俗張御符〔ハリゴフウ〕といへり。相傳ふ、日蓮上人伊豆の伊東なりける配所に在せし頃、八郎左衛門といへるもの難病を患ふ、依て此妙符を授與し給ひ、靈應あり、後日朗師是を傳はりしより已降、世々に相承するといへり。

當寺は遙に都下を離れたりといへども、靈驗著しき故に、諸人遠を厭はずして歩行を運び、渴仰す。毎年七月法華千部、十月十三日御影供を修行す。其間群參稻麻の如し。

大宮八幡宮　和田村にある故に、和田八幡宮とも稱せり。別當は眞言宗にして、幡降山大宮

大宮八幡宮





當社廣前の老松八矯々として雲を拂ひ數百歳の相を標せり白石先生も此松を賞して奥羽をもしめ房總豆相赤城一路畿内濃尾の諸州ともに永うる長松の多き試足なりと紀安氏若不記されり

又社前の大路八往古の繰食街道にして今土人正月御たと唱へて上る井戸水繰食揚きたるものあるもいふべし

御たるうり
田舞とうり

寺と號く。昔は中野の寶仙寺寺祀たりしとなり。例祭は九月十九日とす。二十一日迄三日の間市立ちて賑はへり。神躰應神天皇、又左右に二神されども、往古の兵燹に罹りて、舊記亡びたりとて、神名詳ならず。疑ふらくは、仁德天皇と、高良臣なるべきか。何れも靈妙奇異にして、文彩を加へず、太古質朴の風ありて、彫刻最も巧ならず。いかなる故にや、元祿の末より、神厨子を釘もてかためし、拜する事あたはざりしを、天明年間、別當祐照法印一七日行法ありて後、慎んでこれを開き、神像を拜し奉るといへり。近年建部氏昌盈なる人、信心の人に施しあたへんため、自ら神影を圖畫し奉り、梓にちりばめたり。相傳ふ、當社は其先多田滿仲の勸請なりといへり。後源頼義朝臣、奥州征伐出陣の時、種々の靈瑞ありて、神像を感得し、康平六年凱陣の時に至りて、宮居を營建し、源家守護の神とす。故に右大將頼朝卿、又相州鶴ヶ岡に等しく、神殿僧坊を重修ありて、信心最も厚し。昔は大社にして、壯麗たる宮居なりしかば、地名をも大宮と呼び來るとなり。然るに、足利將軍の世、越後の上杉、相摸の北條と戰ふ頃、上杉の勢兵此地に屯し、放火す。此時神像は火焰を出て、山中大樹の下に遁れ給ふを、別當眞順法印袈裟に移し奉る故に、恙なしといふ。こゝにおいて、社領は賊の爲に掠められ、神巫社僧も四方へ分散しければ、神躰のみ纔に叢祠に安じ奉りしに、天正の頃、大石信濃守當社の古きを尋ねて、神宮を建る。同十九年、忝くも大神君此地に台駕をめぐらされ、源家累代守護の靈神なる事をしろしめされ、新に神領

を附し給へりといへり。

幡ヶ谷不動明王　幡ヶ谷村にあり。眞言宗光明山莊嚴寺に安置す。本尊不動明王の像は、智證大師の作なり。毎年四月八日より同十八日迄、内拜せしむ。相傳ふ、往古智證大師、江州三井寺を創建の時、彫刻の靈像なりといへり。天慶年間、平將門東國に在りて逆威を震ひ、帝を惱し奉る故に、平貞盛、及び藤原秀郷等、追伐の宣旨を蒙り、東國に發向す。其時三井寺より此本尊を奉持して、陣中に移し奉り、軍の勝利を祈誓せしが、同三年庚子、果して將門を討亡したりしにより、後此靈像を下野國小山郷へ遷しまゐらす。然るに永祿の頃、武田信玄甲州に安座し奉りしを、又北條氏政奪ひ取りて、相州築井といへる所の寺院に入れ奉りしを、竟に天正十八年、四海安靖なるに及んで、當國多摩郡宅部の三光院に傳へありしを、靈夢の應あるを以て、延享四年丁卯、永く當寺に安置し奉るといへり。

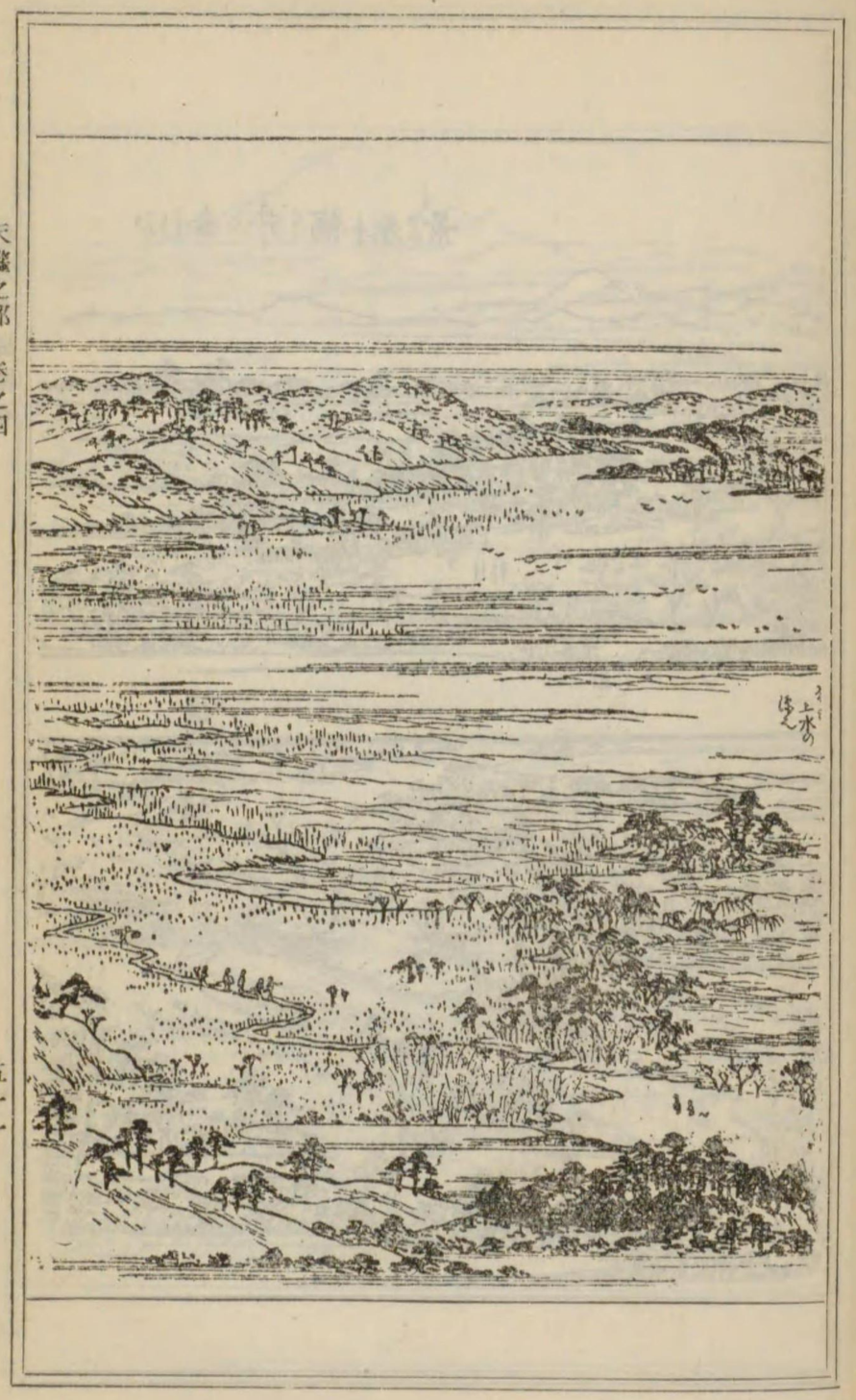
井口山慈宏寺　大宮前新田川越海道の右側にあり、日蓮宗にして、寛文年中の草創、開山は日賢上人と號す。本尊に三寶を安ず。

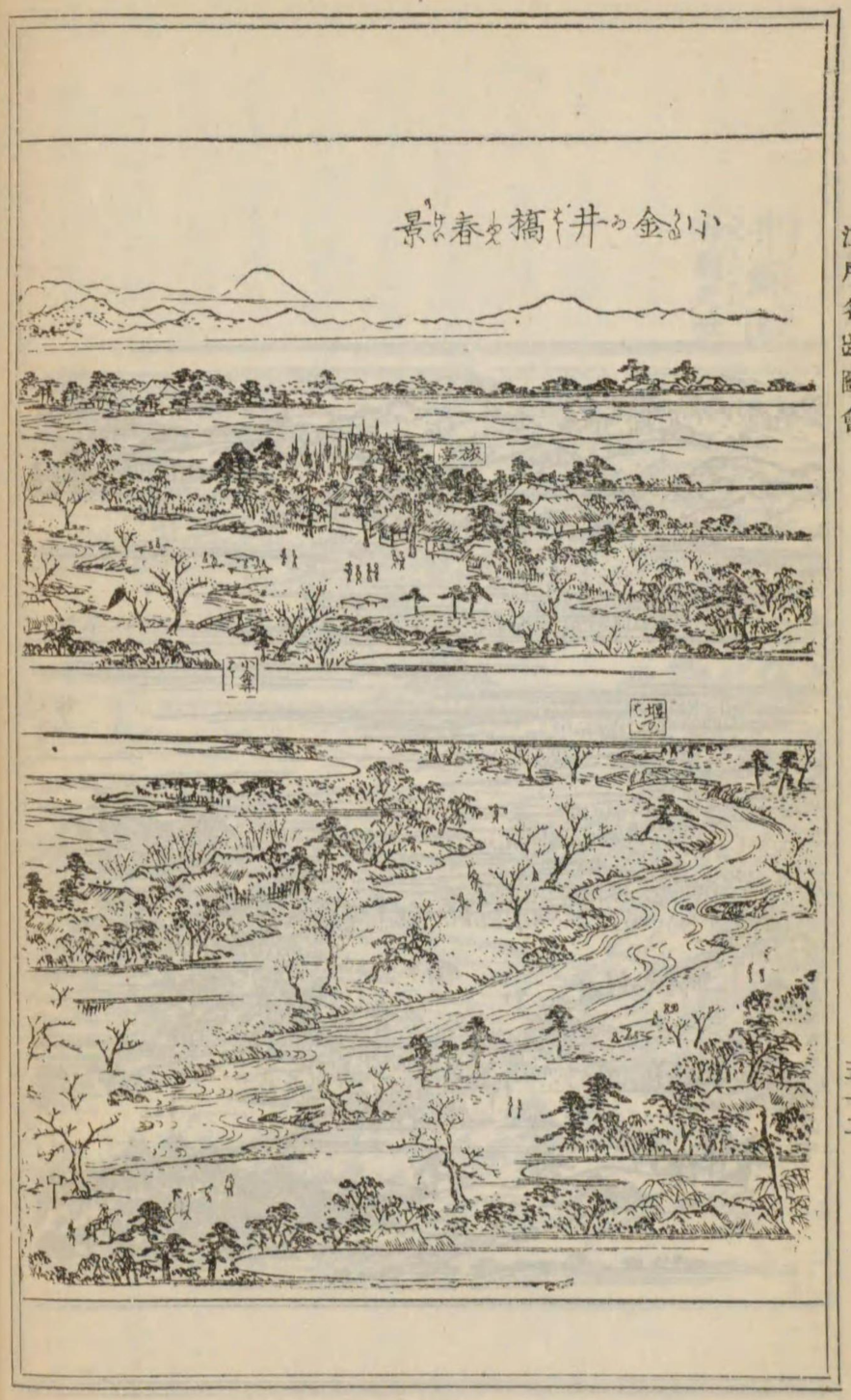
當寺に安置の日蓮大士の像は、日朗上人の作なり。相傳ふ、弘長元年辛酉五月十二日、大士伊豆の伊東に謫せらる、朗師、大士の別を惜みまゐらせ、靈木を得て、大士の影像二軀を彫刻あり、一躯は坐像にして、始め碑文谷（ヒモンヤ）の法華寺にありしが、後堀の内妙法寺に安置す。其二は立像にして、當寺に安置す。即ち此靈像是なり。旅行の躯相ある故に、世に光明木旅立の御影（タビダチノミエイ）とも稱したり。大士鎌倉へ立歸りたまふの後、點眼ありしとなり。

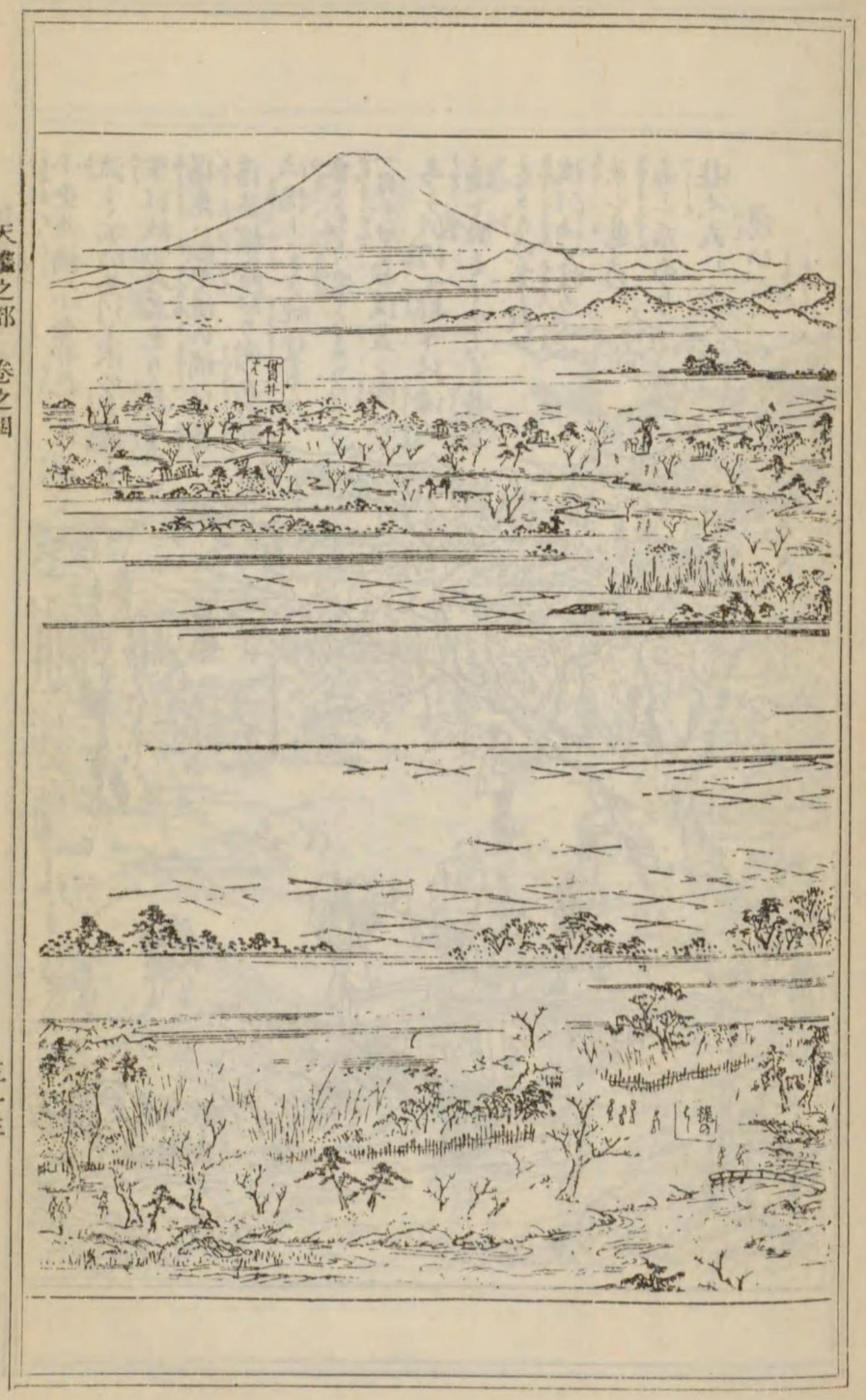
井頭辨財天宮　牟禮村にあり。井頭の池靈にして、中島に宮居す。別當は天台宗にして、大盛寺と號す。相傳ふ、建久八年、鎌倉右府將軍頼朝卿創建し給ふと。正慶年間、新田義貞鎌倉と對陣の時、當社に軍勝利を祈念し、北條家を亡ぼされたりとなり。本尊天女の靈像は、傳教大師作なり。寶永十三年丙子社御建立あり。

井頭池　神田上水の源なり。長さは西北より、東南へ曲りて、三百歩ばかり、巾は百歩あまりあり。池中に清泉涌出する所七所ありて、旱魃にも涸るゝ事なし。故に世に七井の池とも稱ふ。相傳ふ、慶長十一年、大神君適〻こゝに至らせ給ひ、池水清冷にして、味の甘美なるを賞揚し給ひ、御茶の水に汲せらる。又寛永六年大將軍家こゝに渡御なし給ひ、深く此池水を愛させられ、大城の御許に引せらるべき旨、鈞命ありて、御手づから池の傍なる辛

井頭池
弁財天社


上水の堤


小金井橋春景
旅亭
小金井
堤


貫井

小金井橋ハ小金井邑の地に傍て流るゝ玉の玉川上水の素堀架する故小岩名あり岸を夾む櫻花ハ數千株の樹ハ並へ落英繽紛たり開花の時ハ橋上より眺望もれハ雪とも雲ともうひて一目千里を盡る際ハ仍て都下ハ遠と雖もそ遊賞

橋ハ海と嬉め東と者あ
あこ石あり
進人或ハ
進ひ或ハ

春ぬ
我ハ
さくら
ゆ
のけく
ふまもし
ろう
芭蕉

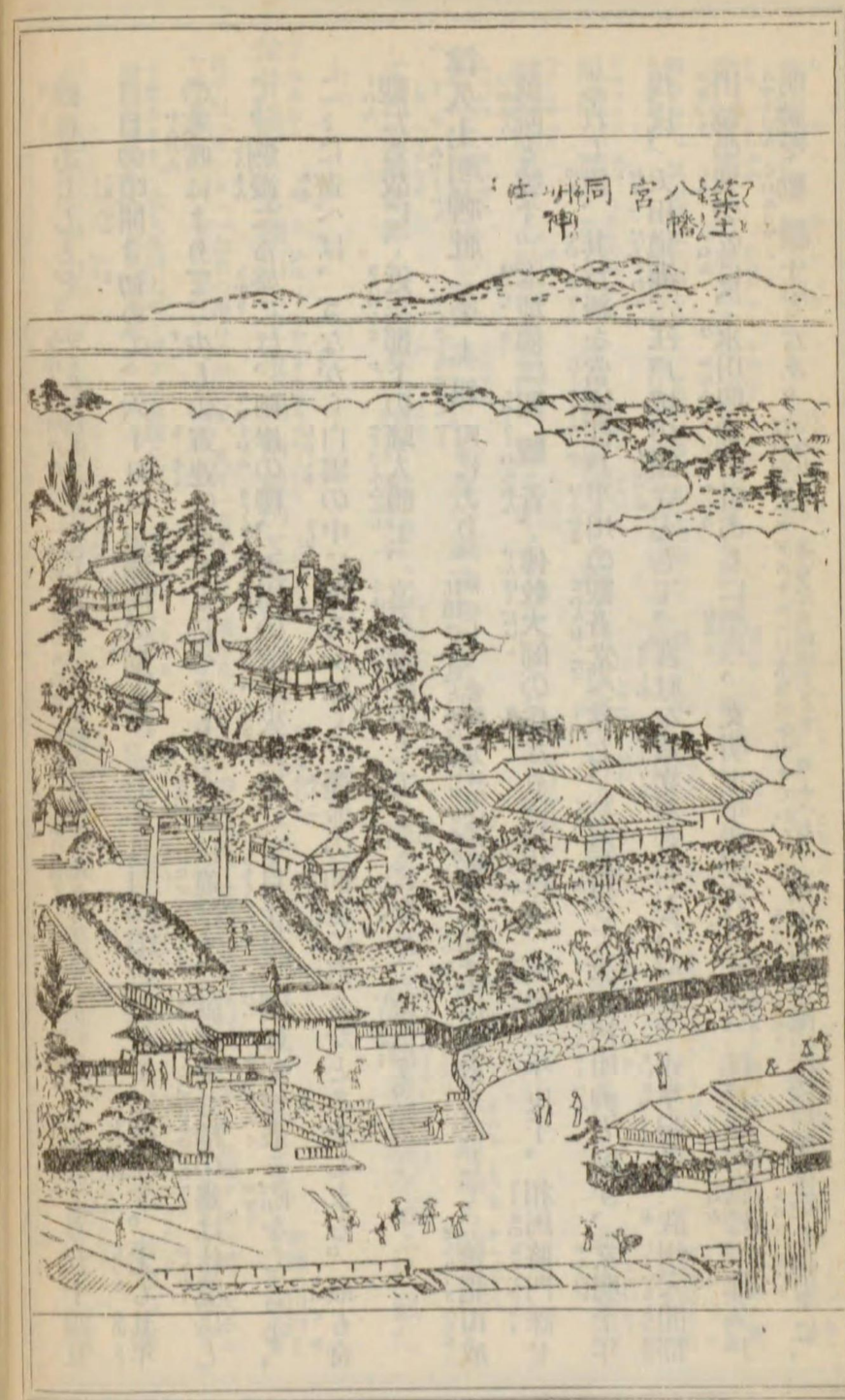
夷の樹に、御小柄をもて井頭と彫付けたまふ。是より後此池の名とす、其辛夷の木は大盛寺に收藏す。承應年間、官府より井頭の水道を開かせられ、初て神田に引き給ふ、故に神田上水の稱あり。寛永八年辛未の夏、池水湯るゝ事ありしを、天海大僧正加持し給ひしに、其頃靈威の事ありて、其後は舊の如く湧出して、涸るゝ事なしといへり。今も毎年三月十五日より四月十五日迄、水加持あり。御楊枝の柳は、聖天堂の後にあり。御堰掛の柳と稱す。臥龍の藤、今在所さだかならず。三ツ柳は神木と稱す。西北の方の丘陵を、今御殿山といふは、昔省耕の御殿館ありし跡なる故に、かく唱ふるといへり。今は官林となりて、樹木繁生す。此池は清泉にして、炎天にも水の減ずる事なし、常に泌沸として湧出す。其地最も閑寂にして池邊柳樹多く、初夏の頃に至れば、新葉黯々として蔭をなし、淺翠嬌青碧空を蔽ふに似たり。

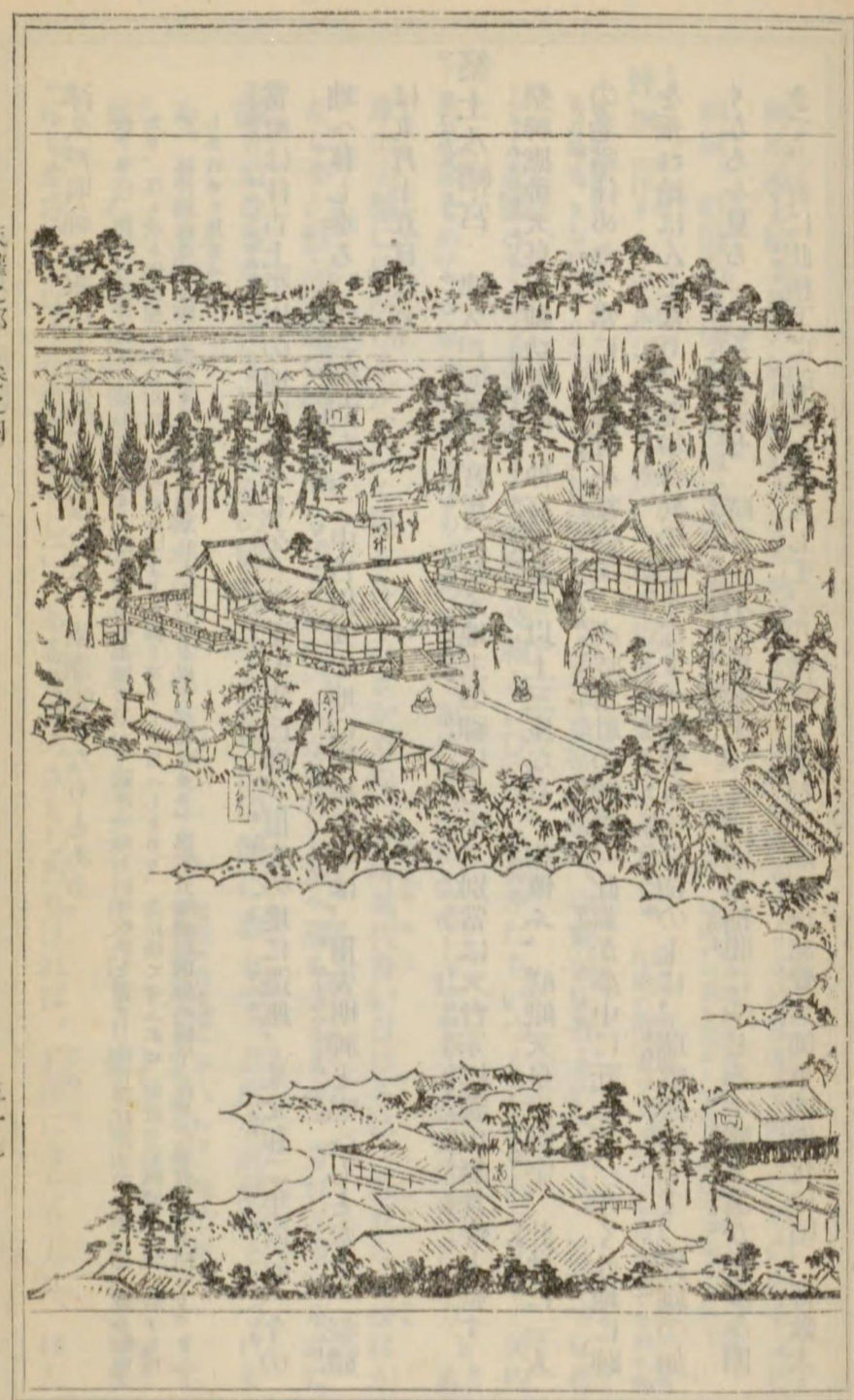
金井橋　多摩川の上水堀兩岸の芝塘にあり。金井村にわたす、ゆゑに名とす。水源小川村より、新橋の東北千川（センカ）上水の掛口の所まで、凡そ一里あまり、兩岸ことゝく櫻にして、左右の兩岸九村に跨る。また架す所の橋、大小七ケ所ありて、何れも其地名によりて唱ふ。いはゆる金井橋の類なり。此水流、西の方羽村より、北にわかれて、江戸に至るまで直流凡そ十里あまり、是を玉川上水と號す。承應の頃、始て此水流を大江戸に引き給ふといへり。

此地の櫻花は、享保年間（或云元文二年丁巳）郡官川崎某、台命を奉じ、和州吉野山、および常州櫻川等の地より、櫻の苗を植ゑらるゝ所にして、其數凡そ一萬餘株ありしとぞ。今存する所の古木、一圍にあまるものまくあり。延享の頃までは、年々に官府より、これを植ゑつがせ給ひしとなり。今は其數大に減じて凡そ三百株あまりあり。

日目の頃開き初めて、六十日目を滿開の期とす。七十日目の頃に至りては落花す。尤も其年の寒暖によりて、少しの遲速はありといへども、大方は違はず。就中金井橋の邊は佳境にして、爛漫たる盛には、兩岸の櫻、玉川の流を夾んで、一目千里、實に前後盡る際をしらず、こゝに遊べば、さながら白雲の中にあるが如く、蓬壺の仙臺に至るかとあやしまる。最も奇觀たる故に、近年都下の騒人韻士、遠を厭はずしてこゝに來り、遊賞す。立春より五十四五

津久土明神社　築土銀町にあり。此地は牛込と小日向（コビナタ）の界にして、當社の方は牛込に屬す。別當は天台宗にして、善龍山成就院と號す。本地佛は聖觀音、傳教大師の作なり。相傳ふ、天慶三年庚子、相馬將門誅せられし後、其首級を當國江戸平川の觀音堂へ移し、是を齋ひて津久戸明神と稱す、文明十年戊戌、太田道灌、江戸城の鎭守として、宮社を造立ありしといへり。永享記に、武州入間郡川越の城の乾に、氷川明神の社あるに準へ、文明十年戊戌六月五日、江戸城の乾に、津久戸明神を勸請すと云々。江戸砂子（エドスナコ）に永享記を引きてかくいひたれど、永享記に此事見えず、考ふべし。又中古治亂記江戸城を築し條下に、


築土八幡宮
桐ヶ谷神社



津久戸明神は氷川と同躰の由なれば、素盞嗚尊なりとあり。

按ずるに、將門の靈は後に合祭したるならん歟。南向亭茶話に云く、筑戸いにしへは次戸と書す、往古は江戸明神とて、江戸城の鎮守たり、江と次と字形相似たる故に、いづれの頃よりか謬り來りしなるべしとあり。是に依て考ふれば、當社は武藏國風土記に載する所の、江戸神社なちん歟。祭神もまた素盞嗚尊にして、よく風土記に合せり。猶第五卷神田明神の條下、江戸の神社の考を附せり。てちしあはせて見るべし。

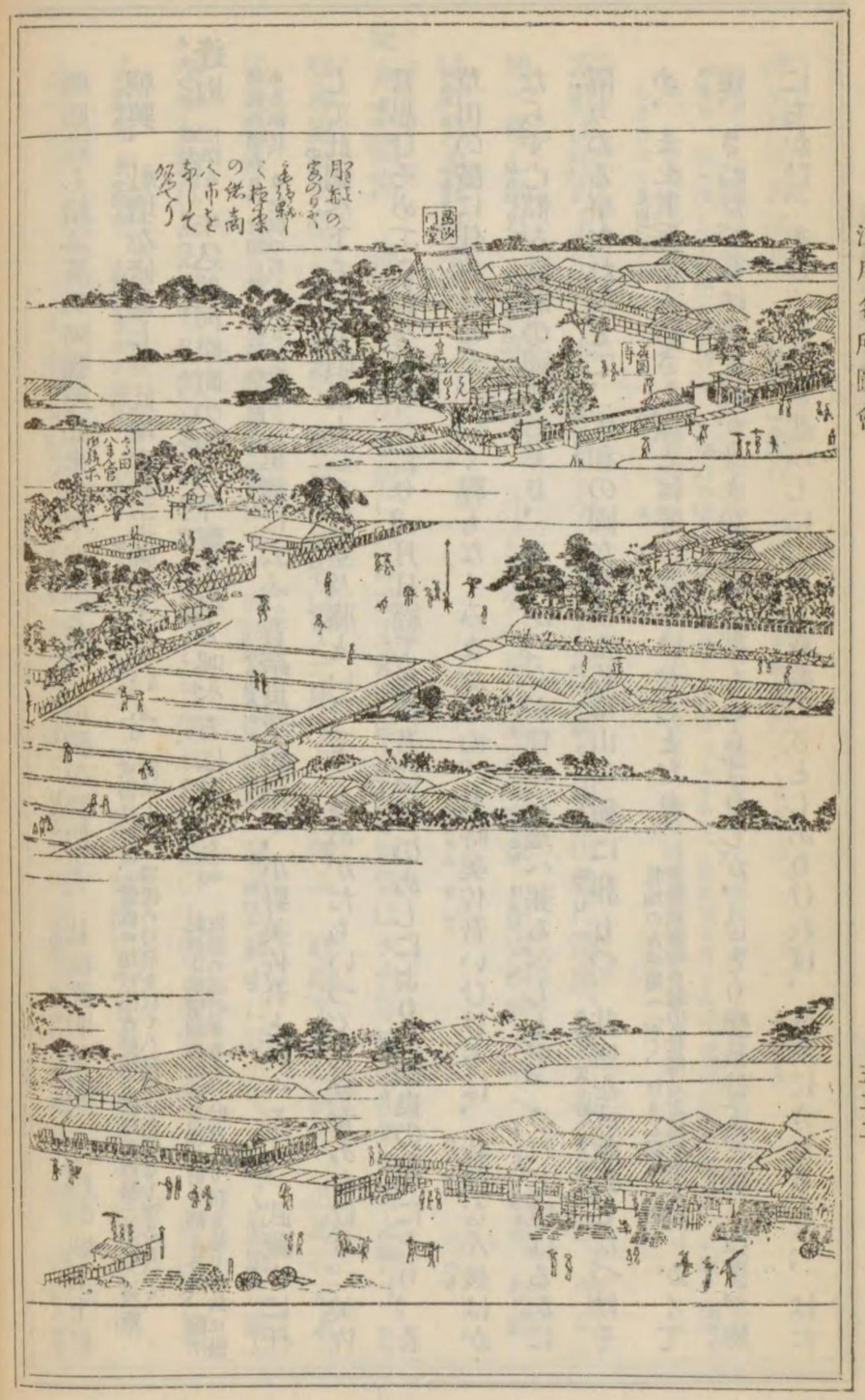
當社は往古上平川の地にありしを、天正七年己卯、田安の地に遷座、又元和二年丙辰、今の地へ移し奉る。昔は筑戸に作る、後、改めて築土とす。中古田安の地に鎮座の頃は、田安明神と唱へしとなり。祭禮は九月十五日なり。

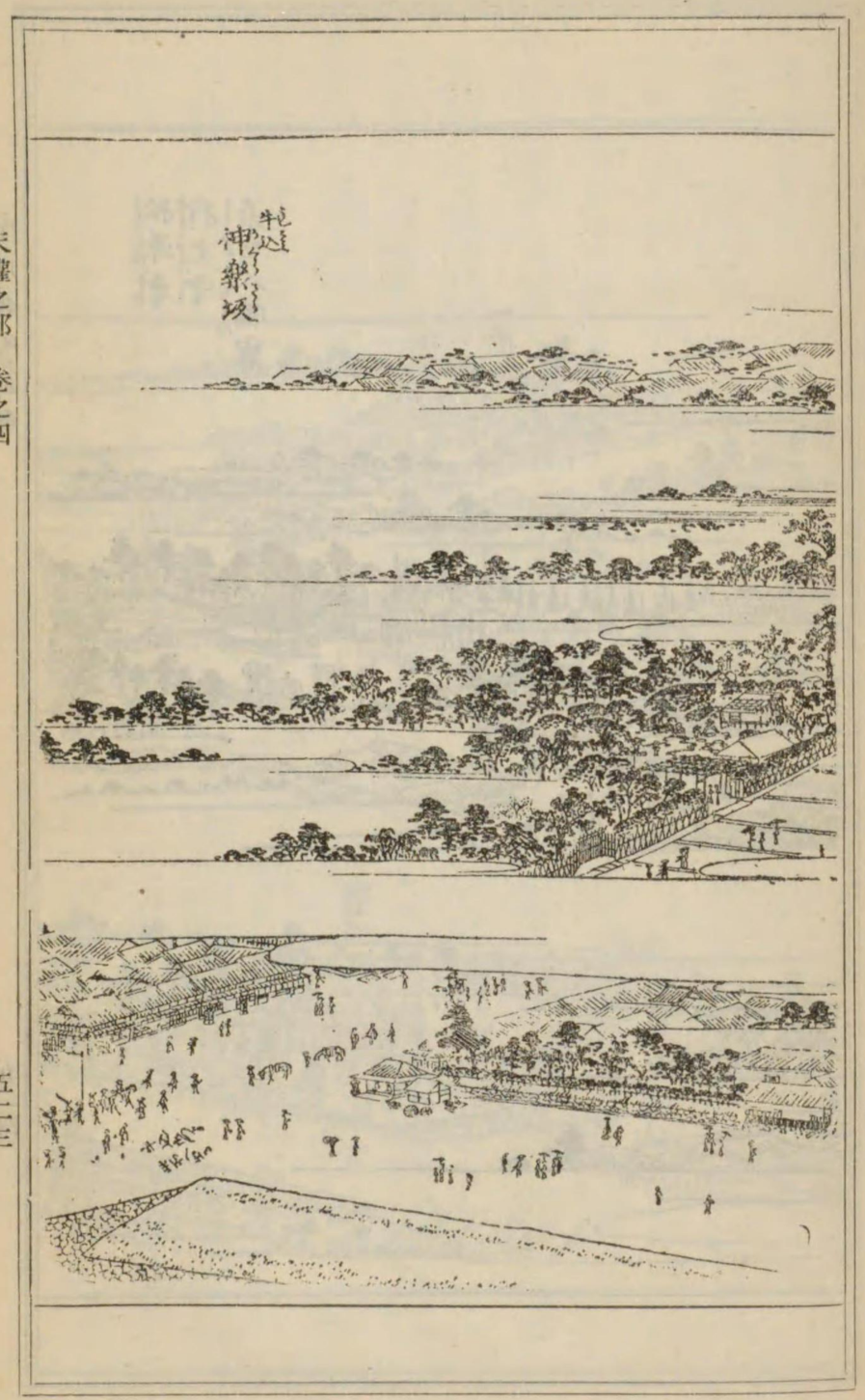
築土八幡宮　津久戸明神の宮居に竝ぶ地主の神にして、別當は天台宗松靈山無量寺と號す。

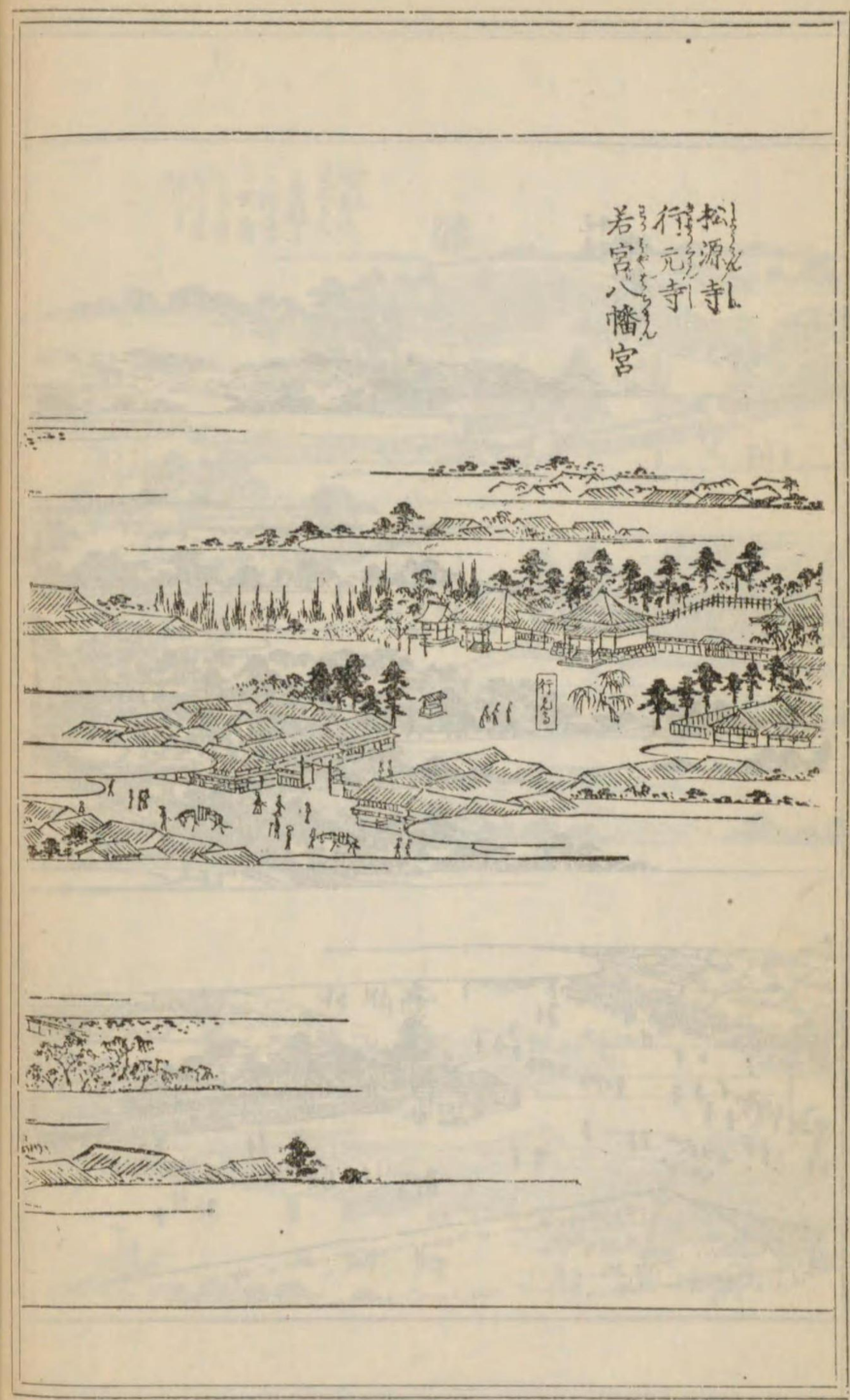
祭神應神天皇、神功皇后、仲哀天皇、以上三座なり。相傳ふ、嵯峨天皇の御宇、此地に一人の老翁住めり。常に八幡宮を尊信す。或時當社の御神、此翁が夢中に託して、永く此地に跡を垂れ給はんとなり、老翁奇異の思をなす、其翌日一松樹の上に、瑞雲靉靆して、旌旗の如くなるを見る。松雲山の號、こゝに起ると云ふ。時に一羽の白鳩來つて、同じ樹間にやどろ。鄕人翁が靈夢を聞きて、直に此樹下に瑞籬を繞らして、八幡宮と崇む、遙の後慈覺大師東國遊化の頃、傳敎大

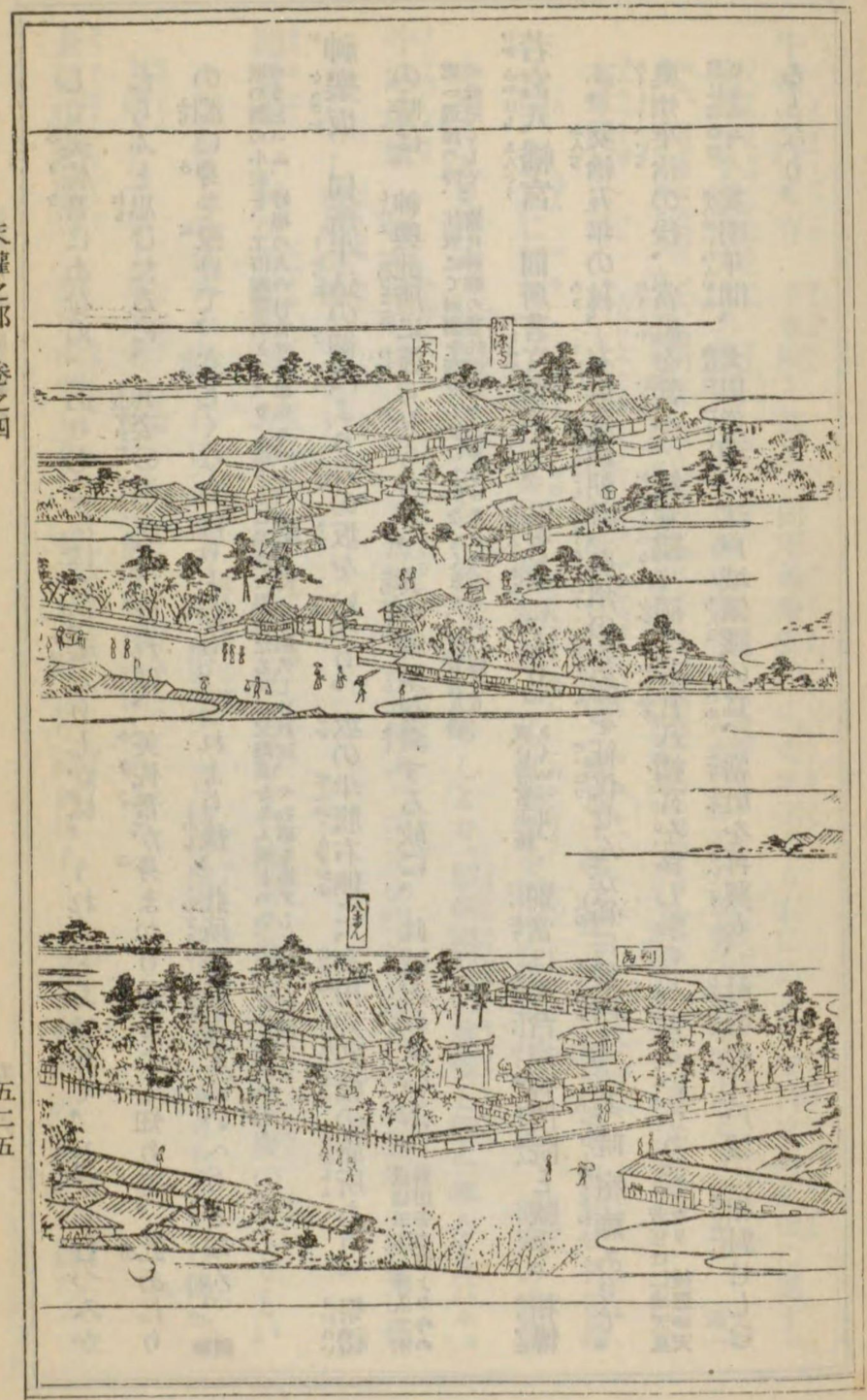
師彫造し給ふ所の阿彌陀如來を本地佛とし、小祠を經始す、其後文明年間、江戸の城主上杉朝興、社壇を修飾し、此地の產土神とすといふ。或書にいふ、當社の地は往古管領上杉時氏の壘（トリデ）の舊跡にして、時氏の弓箭を以て八幡宮に勸請なし奉ると云々。

逢坂　或大坂に作る　牛込船河原町の西、今輕子坂と呼べるは是なり。此坂下御譚端の町家を揚場町と稱ふるは、此所迄船の通行ありて、此所より荷を揚ぐる故に揚場町の唱あり。此地に多く輕子の住居ある故に、また坂の名とせりと云ふ。里諺に云ふ、昔奈良帝の御宇、小野美佐吾といへる人、武藏守に任じて此國へ下る。其頃此ところに玄及藤といひて、みめかたちいつくしき女ありけり。美佐吾思ひそめてこれをむかへたり。月日經て美佐吾は帝のめしにより、奈良の都に上り、若草山の麓に住みけるが、いく程もなくみまかりぬ。其時美佐吾いひけるは、我死なん後はかならず亡骸を武藏の國におくり、さねかづらが住める邊へ葬るべしとぞ。されど境はるかに隔りぬる事なればとて、大和の國なりける若草山の麓に葬りつ、其所を武藏野となづけそめ、また其塚をもむさし塚とは呼びならはせしとなり。其地の古老傳へ云く、むさし塚は大納言兼武藏守良岑安世卿の古墳なりと。かくて後、さねかづらは美佐吾が身まかりぬる事もしらざりしが、ひとり戀慕ひて、神にねぎ、佛にちかひ、あけくれ歎き悲みしに、ある夜夢のさとしありければ、此所にきたりしに、はた




牛込
神樂坂


松源寺
行元寺
若宮八幡宮



して美佐吾にあひぬ。ありしにかはらぬ姿なりしかば、うれしとおほえて、しばしむつみかたらふと思ひたるに、其姿の消うせにければ、美佐吾が身まかりぬるよと知りて、此あたりの淵に身を投げて、空しくなりたりとなり。これより後、此所を逢坂とはいへりとなん。神樂

坂の西の小坂を、工俗幽靈坂とよべり。恐らくは逢坂と混じたる歟。又地名をあふ坂といひ、女の名をさねかづちといふ、好事の人の付會せる事知るべし。されど傳ふる事久しければ、やむ事を得ずしてこゝに出す。

神樂坂　同所牛込の御門より外の坂をいへり。坂の半腹右側に、高田穴八幡の旅所あり。祭禮の時は、神輿此所に渡らせらるゝ、其時神樂を奏する故に、此號ありといふ。或は云ふ、津久土明神田安の地より今の處へ遷座の時、此坂にて神樂を奏せし故にしかなづくとも、又若宮八幡の社近くして、常に神樂の音此坂迄きこゆゆゑなりともいひ傳たり。

若宮八幡宮　同所若宮坂の上、若宮町にあり。或は若宮小路ともいへり。別當は天台宗普門院と號す。相傳ふ、文治五年の秋、右大將頼朝卿、奥州の泰衡を征伐せんが爲に發向す。其時宿願ありて、奥州平治の後、當社を營み、鎌倉鶴ヶ岡の若宮八幡宮を移し奉らるゝといへり。若宮は仁德天皇なり。後應神天皇に改め祭ると云ふ。文明年間、太田道灌、江戸城鎭護の爲、當社を再興し、社壇を江戸城に相對せしむるとなり。

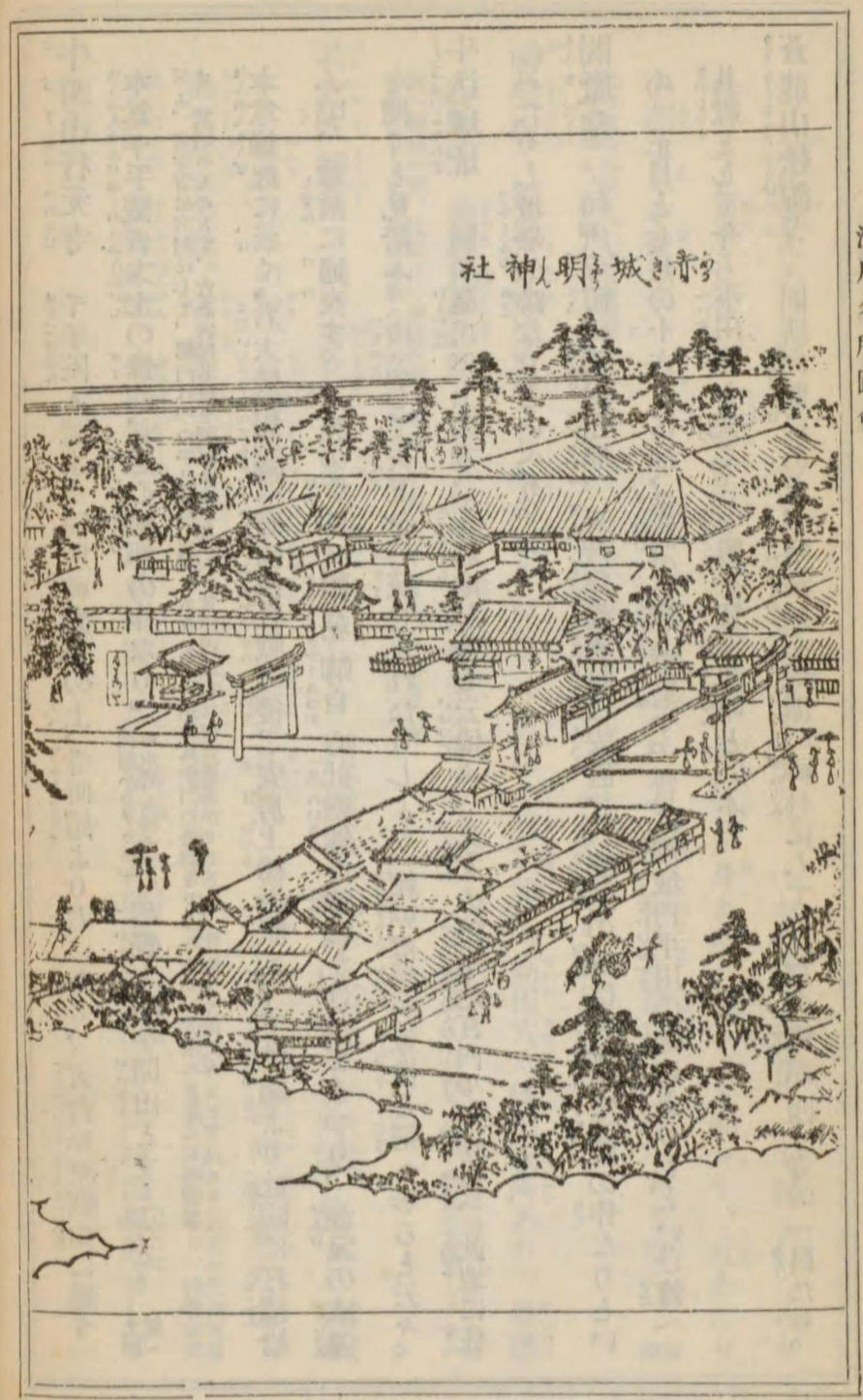
牛頭山行元寺　千手院と號す。同所神樂坂の上、寺町道より右にあり、天台宗東叡山に屬す。本尊千手觀音大士の像は、惠心僧都の作なり。襟懸（エリカケ）の本尊と稱す。慈覺大師を開山とすと云ふ。土俗傳へ云ふ、當寺昔は大刹にして、總門は今の牛込御門の邊にありて、神樂坂其中門の舊跡なりしとなり。大永の兵亂に堂塔破壞す。其頃のものとて、古き大般若經を祕藏せりと云ふ。昔門内左右に南天樹多かりしとて、世俗今も南天寺とあざなせり。

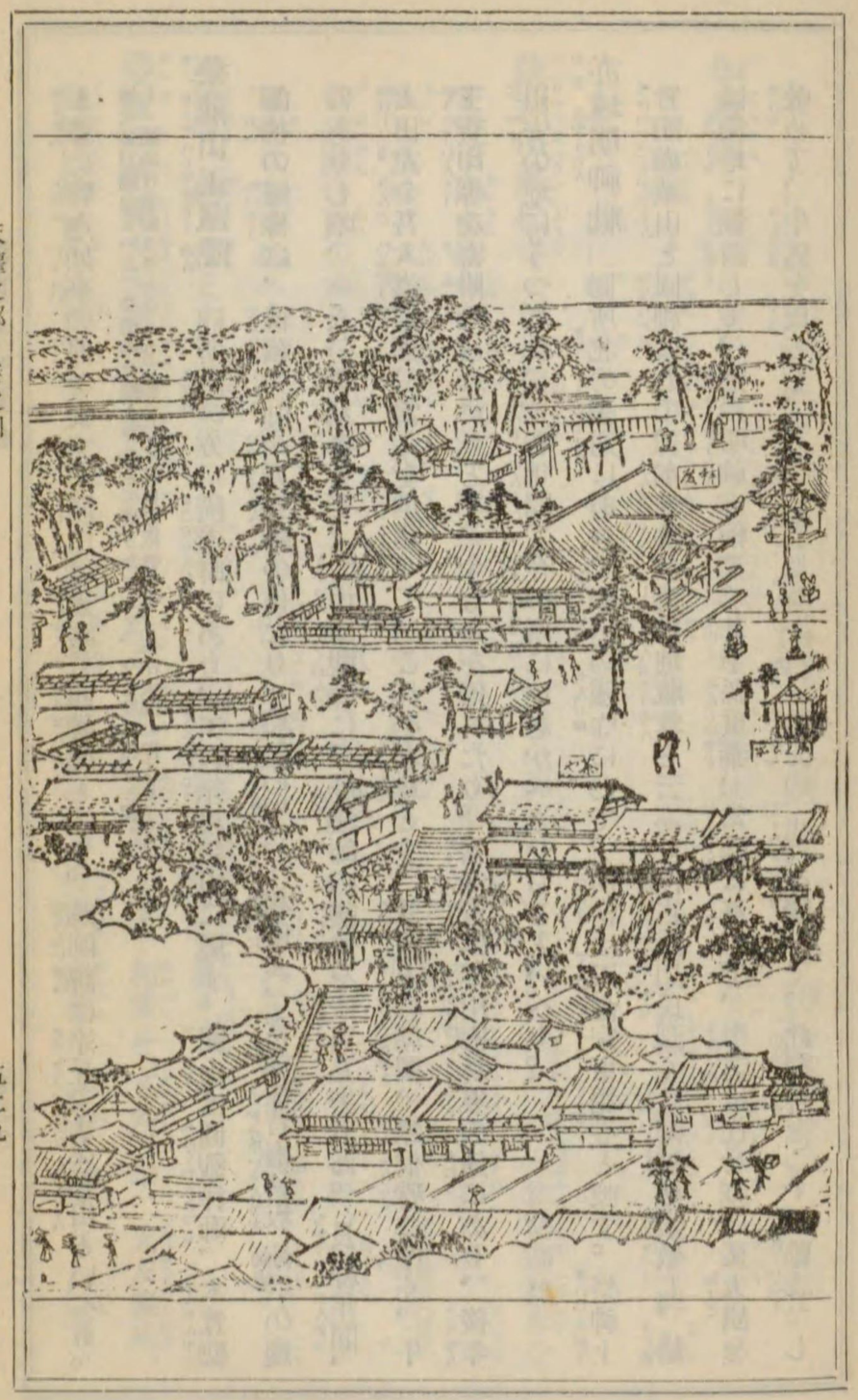
本尊緣起に云く、右大將頼朝卿、石橋山合戰の後、安房上總を靡て、下總國より此國に打越給ふ頃、尊前に通夜す。其夜の夢に、頼朝卿自ら此靈像を襟にかけたてまつり、源家の武運を開くと見給ふ。後果して天下を一統せられたりしより、頼朝襟懸の尊像と稱へ奉ると云々。

牛込城址　同所藥店の上の方、其舊地なりと云傳ふ。天文の頃牛込宮内少輔勝行、此地に住みたりし城壘の跡なりといへり。

閻魔堂　同所寺町の通、左側、天台宗養善院に安置す、閻王の像は、佛工運慶の作なりといふ。正月と七月の十六日には、參詣の輩群集す。昔は御城内平川の地にありしといひ傳へ、其證として今も平川寺と號く。中興を智導法印といふ。

蒼龍山松源寺　同所向側にあり、華洛妙心寺派の禪林にして、江戸の觸頭四ヶ寺の一員たり。


赤城明神社



本尊に釋迦如來の像を安ず。開山は靈鑑普照禪師と號す。禪師諱は宗丘、字を蓬山といへり。

俗に長刀蹇山といふ。昔境内に猿をつなぎて置きたりとて、今も世に猿寺と號く。舊地は番町なりといへり。觀音堂本尊は聖觀音にて、弘法大師の作なり。

藥龍山正藏院　同所南の方、横寺町にあり、天台宗東叡山に屬す。開山は圓觀律師、本尊藥師佛の靈像は、傳教大師一刀三禮の作なり。世に草刈藥師如來と稱せり。相傳ふ、當寺往昔梅林坂御城内の地にありし頃、一人の草刈來りて、開山圓觀師に、此藥師の靈像を授與し去りぬ。長祿年間、太田左金吾入道道灌、當寺を創建して、これを本尊とす。其後上杉朝興、尊信殊に厚く、牛王寶印等を寄附せられたりとて、今も是を傳へたり。當寺昔は平川梅林坂の邊にあり、後年田安の地にうつされ、元和年間、今の所に地をかへさせらるといへり。

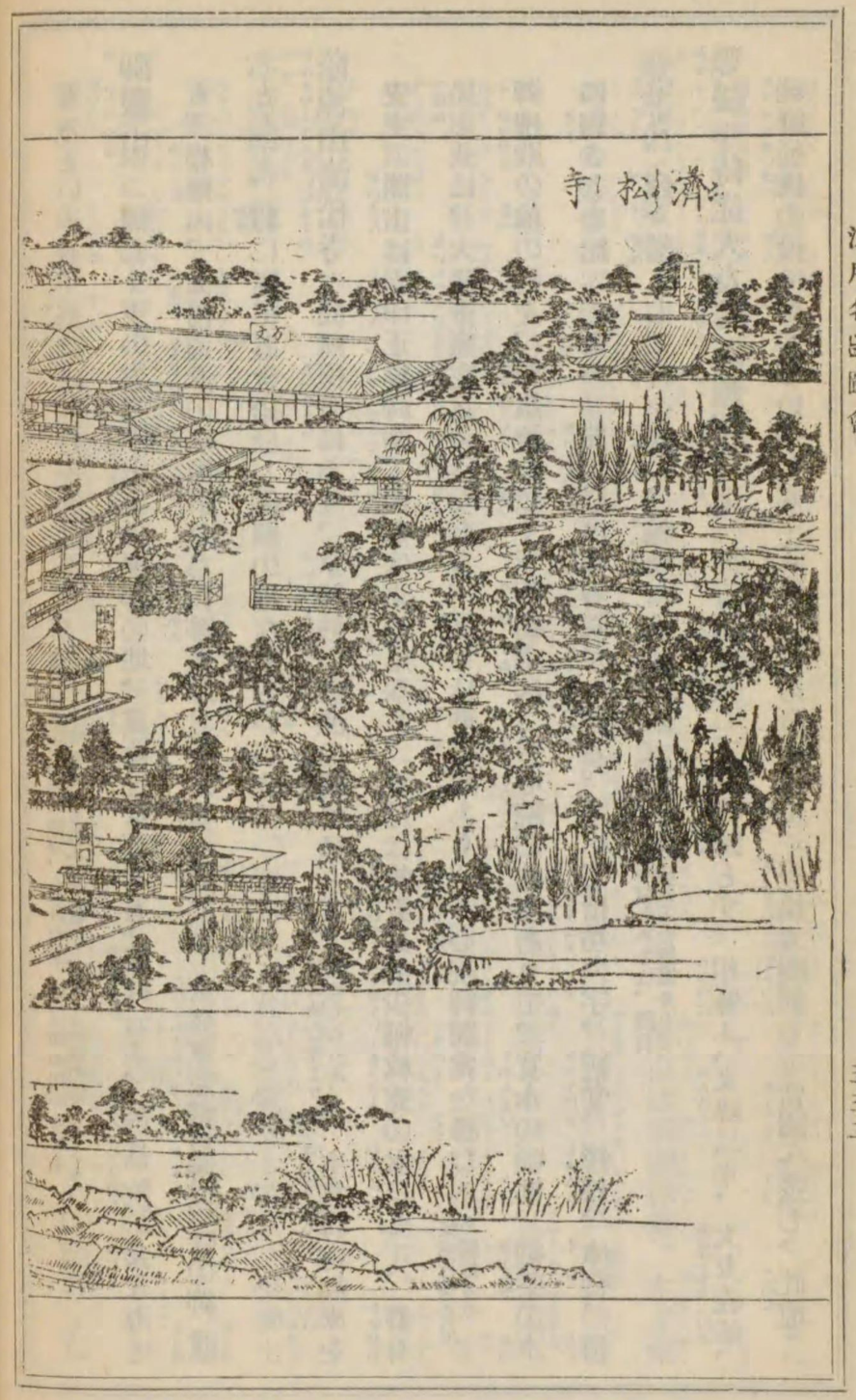
赤城明神社　同所北の裏通にあり、牛込の鎮守にして、別當は天台宗東覺寺と號す。祭神上野國赤城山と同神にして、本地佛は將軍地藏尊と云ふ。往古大胡氏深く此御神を崇敬し、始は領地に勸請して、近戸明神と稱す。其子孫重泰、當國に移りて、牛込に住せり。又大胡を改めて、牛込を氏とし、其居住の地は、牛込わら店〔ダナ〕の邊なり。先に辨ず。祖先の志を繼ぎて、此御神をこゝに勸請なし

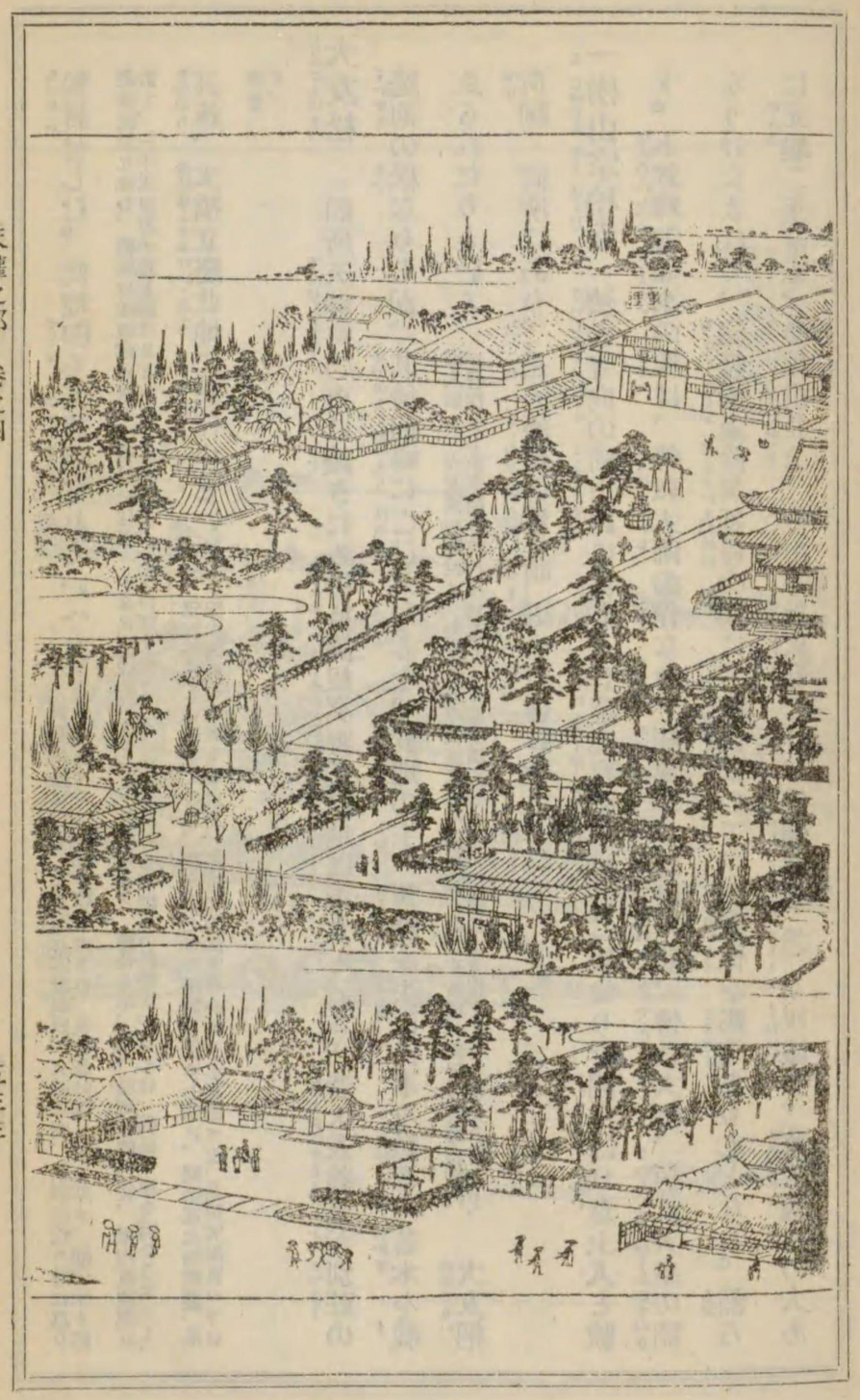
奉るといへり。祭禮は九月十九日なり。當社始めて勸請の地は、目白の下、關口領の田の中にあり。今も少しばかりの木立ありて、是を赤城の森とよべり。

御殿山　同じく東の方、中山家の藩邸の地、其舊址なりとも、或は云ふ、萬昌院の邊なりとも。相傳ふ、太田道灌の別館ありし舊跡なりとぞ。寛永の頃、大將軍家御放鷹の時の御設として、假に建て置き給ひし御殿の地なりといへり。

蔭涼山濟松寺　同所榎町にあり、京師妙心寺派の禪窟にして、昔は妙心寺より輪番せしといふ。本尊釋迦如來を安ず。開山は心印正傳禪師、開基は素心尼なり。此尼は牧野兵部少輔政玄の女にして、春日局と共に、大將軍家昵近の侍女なり。當寺に御佛殿あり。芳心院御別當を務む。此寺は芳心尼の開創なり。御佛殿の前の池を、鳳凰池と號く。靈龜水は、芳心院の地にありて、寛永の頃は、御茶の水に掬さしめ給ふとなり。開山塔は養春院是を預る。すべて僧坊六宇、經堂、鐘樓、庫裡、浴室等、巍々然として軒を連ね、輪煥たり。三佛堂の額に、天下蔭涼とあるは、隨意院宮一品准后公啓法親王の眞筆なり。

豐後小侍從大友義延舊館之地　同寺院を指して其舊跡とす。相傳ふ、文祿二年、大友義延、朝鮮征伐の役に補すといへども、武備怠あるを以て、豐臣太閤罪して當國へ遷し、此地に


濟松寺



蟄居せしむ。此地卽ち其舊跡なりといへり。南向茶話に云く、大友左兵衛督義統、文祿年間、朝鮮征伐の役に怠りあるをもて、領國を沒收せられ、其後常陸國に於て卒す。嬶子宗五郎義延此地に住む。義延は從四位に叙し、侍從に任ず。ゆゑに豐後小侍從と稱しけるとなり。慶長五年、關ヶ原御一戰の後、常州筑波郡に於て、三千五百石の地を賜はるといへども早世す。又江戸鹿子〔エドカノコ〕といへる草紙に、義乘と記せしは、義延の事を謬るなるべし。詳なり。

其後、大橋立慶此地に居住すといふ。望海茶談といへるものに、寶永十七年の事實を記せし次に、御祐筆大橋立慶、高田大友のやしきを賜はり、其地に天滿宮の祠ありし事記せり、高田天滿宮の下にあるべし。

大友松　同所天神町の東に續きたる御持筒組高野氏の地にありと云ふ。昔大友義延が別莊の庭前の松なりしが、其後回祿に亡びたりしを、其地の主、舊跡を失はん事を歎き、若木を栽ゑられたりといふ。或人云ふ、大友家の傳說に、大友宗五郎義延武州へ遷る頃、從ひ來る所の家臣吉良傳左衛門が營作せし數寄屋の前の松にして、陰涼山濟松寺の名も、此松より出でてなづけたりとなり。

荷祠　同所にあり。是も義延の勸請といひ傳ふ。大友稻

一樹山宗柏寺　濟松寺向の横小路にあり、日蓮宗京師頂妙寺に屬せり。開山は日意上人と號す。本尊釋迦如來の像は、傳敎大師の作なり。相傳ふ、延曆年間、傳敎大師、桓武天皇の詔をうけたまはり、鎭護國家除災延命の爲に、叡山に於て、此靈像を彫造ありしとなり。然るに元龜二年辛未、織田信長公、叡山を放火せし時、佛閣僧坊悉く灰燼す。其時護持の人あ

高田本松寺
願滿祖師堂

りて、此本尊許をば取出して恙なかりしを、後水尾帝深く佛乘に歸し給ふを以て、是を拜し給ひ、又宸翰を賜ひて、釋迦牟尼佛の號を添へ給へり。日意師此本尊を感得し、當寺を闢きて安置し奉るといへり。

雲居山宗參寺　同所辨財天町にあり。此地を土俗とゞめきといふ。曹洞派の禪林にして、駒込の吉祥寺に屬す。本尊釋迦如來、脇士は、文殊普賢なり。開山を看榮稟閣和尚と號く。總門の額第一義は、心越禪師の筆。中門の額、雲居山は岡良弼の書。佛殿の額、宗參寺の三字は、崎陽道榮の書。禪堂の額は、黃檗悅山といふ。相傳ふ、當寺開基を牛込宮内少輔藤原勝行と稱す。弘治元年從五位下に任ず。法名を參秀院殿心外清雲庵主と號す。當寺に墳墓あり。鎭守府將軍武藏守秀郷の後胤大胡重俊上野國大胡に城を築き、かしこに住す。則ち大胡太郎と稱せり。重行に遷びて、此牛込に移り住す。土人牛込殿とよべり。或人云ふ、其家系に、大胡太郎成行十代の孫、同彥次郎重治、上州大胡より武州牛込に移り住するとあり云々。十代の孫重行の嫡男なり。重行は宮内少輔といふ。法名は雲居院殿寶翁宗參大庵主と號す。天文十二年卒す。又當寺に墓あり。北條氏康の麾下に屬し、武州牛込、及び今井、赤坂の今井歟。櫻田、比々谷、或人云ふ、其家系日尾谷に作ると。其餘、下總の堀切、千葉等の地を領し、牛込に住す。氏領するとあれども、今井千葉の兩の名をしるさず。或人云ふ、牛込氏系譜には、牛込、その餘、高田、落合、淵口、小日向、富塚（トツカ）小石川の金杉、市ヶ谷、田安、櫻田、朝草、同金杉等の地名を、所領の中に注し加ふといへり。按ずるに朝草は淺草を云ふならん。

天文十三年甲辰、父重行の菩提を弔はんが爲、當寺を創建し、寺田を寄附し、父重行の法號を採りて、寺の號に呼べり。同二十四年乙卯、從五位下に任す。其時氏康に告げて、大胡を改め、其采邑の名の牛込をもて氏とす。天正十八年、北條氏滅亡の後、勝行の子勝重、天正十九年辛卯、始て大神君に謁し奉り、以後徳川幕下たり。或人云ふ、勝行の子は俊重といふ。慶長十五年、始て三代大將軍を拜し奉りて、御當家に屬し奉ると。兩說いづれか是ならん。

大乩重行同勝行父子之墓　境内卵塔の中にあり、一基の石碑に、父子の法號、および其傳を刻す。或人云ふ大高季明の書なりといへり。しかるや否やをしらず。

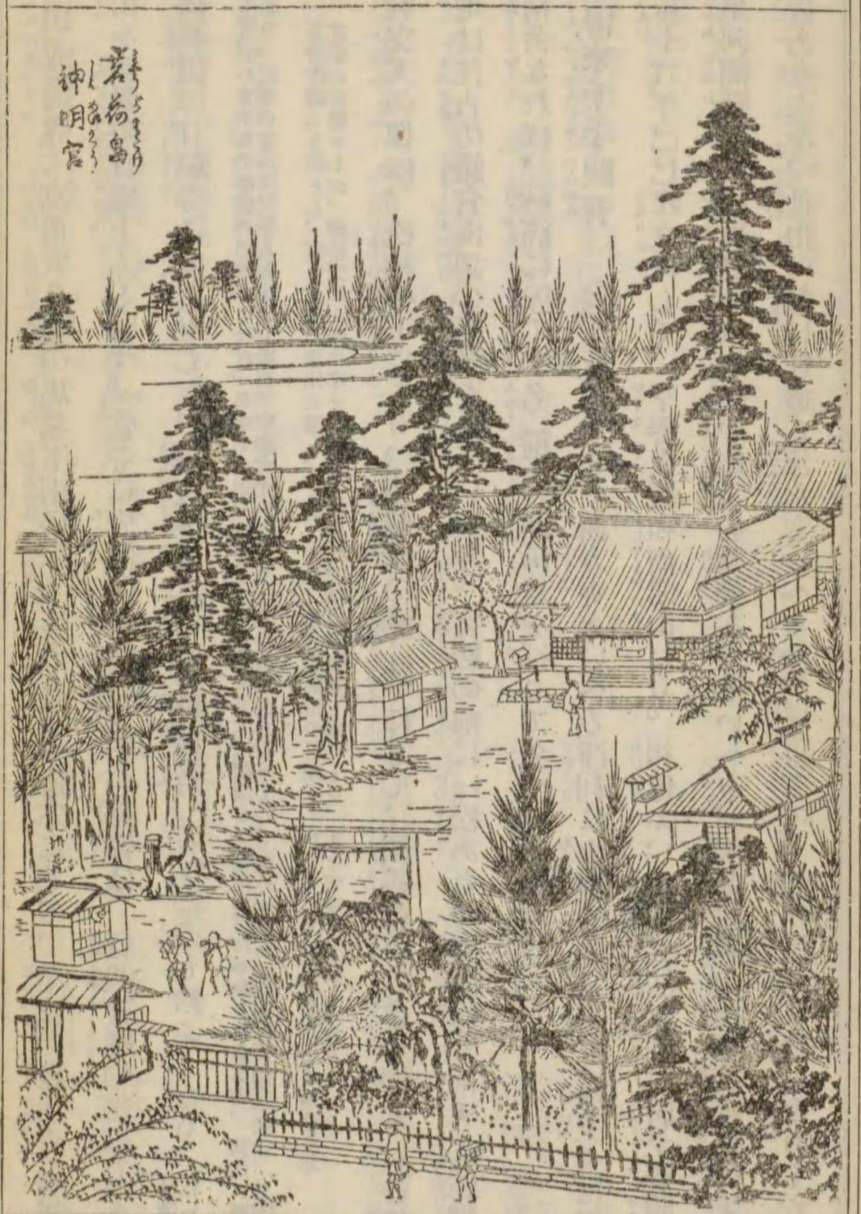
三明山千手院　同所七軒寺町にあり。眞言宗、開山は舜倚法印と號す。本尊千手觀音の像は、御長八寸九分、脇士、多門持國の二天、共に赤栴檀にして、毘首羯磨天の作なりといへり。相傳ふ、往古越後國安巨山にありしが、天正年間、豐大閤秀吉公、柴田勝家と戰ふに及んで、蒲生氏郷の臣殿池玄蕃といふ人、是を感得す、既にして元和年間、蒲生家敗壞の後、殿池は下總國佐倉の城主堀田家に仕ふ、故ありて富永氏某傳へ來りし後、當寺に安置したりといへり。

正定山幸國寺　同所原町にあり、日蓮宗、小湊の誕生寺に屬す。開山を日觀上人と號す。當

寺に安置の日蓮大士の像は、世に布引の御影と稱せり。傳云ふ、文永七年庚午、宗祖大士、鎌倉に在しゝ頃、房總の國郡、數月疫癘流行せり。こゝに於て、人民大士に救を求む。乃ち大士佛工をして、自の像を造らしめ、白布に經題を書して、其御手に掛け給ひ、囑して曰く、即ち是日蓮なりと云々。依て此靈像を其地に移すに、疫疾の患へ頓に退きたり、故に此靈像を小湊の誕生寺に安置したりしが、又宗門流布の爲、寛永七年庚午二月十六日、當寺に移しまゐらすといへり。當寺は加藤肥後守淸正の開基にして、宗祖の靈像は、寒暖に應じ衣服を改むる事、池上に同じきといふ。故ありて、其衣服は年々阿部氏某調進すとなり。

神明宮　早稲田大田圃にあり。祭神天照、春日、八幡三座なり。同所赤城明神の別當等覺寺より兼帶す。祭禮は九月十六日なり。鎭座の年歷詳ならずといへり。天和二年、同所榎町より今大徳番組林氏某の宅地は、其舊地なりといふ。

赤城明神舊地　同所田の畔、小川に傍ふてあり。大胡氏初て赤城明神を勸請せし地なり。故に祭禮の日は、神輿を此地に渡しまゐらす。



本妙山感通寺　高田穴八幡の馬場下南の坂上にあり。日蓮宗にして、小湊の誕生寺に屬す。開山を寂陽院日建上人と號す。當寺に安置の畏沙門天王の靈像は、行基菩薩の作にして、越後國高田の日朝寺に安置せしを、越後少將忠輝卿の御母君、こゝに遷し給ふとなり。日蓮上人傳にいはく、宗祖上人弘むる所の法華經の功德あらはれ、文永十一年、鎌倉より赦免ありて、佐渡國より越後高田にいたりたまふ頃、其地に眞言宗の一寺あり、此寺の毘沙門天老人と化現し給ひ、宗祖大士を導きて、其寺に誘引し宿せしむ。既に本尊の御足泥土に穢れ給ふ、其證あるを以て、寺僧吉祥を奇とし、直に大士の法化に歸し、日朝と改む。越後國高田の日朝寺これなり。上杉謙信深くこの靈像を尊敬し、其家に相傳せしが、謙信天正六年に卒す。依て其後奥州米澤の城に遷し奉りしを、また當寺に安置し奉るといへり。

摩利支天の像は、松樹の下にあり、賴朝卿の勸請にして、賴義朝臣の念持佛といひ傳ふ。此地は往古の鎌倉海道の舊跡なりといへり。客殿の前に一松あり。普聞松と稱す。法華弘通の精舍なれば、妙經に因て、名稱普聞の意を採りて名づくとなり。

三國傳來千手觀音　同所坂より北、西方寺といへる淨刹に安置せり。當寺は增上寺に屬す。寛永十六年己巳建立にして、亨譽貞義和尚開山たり。相傳ふ、往古弘法大師、唐土青龍寺の惠果阿闍梨より授與せられし、中印土の靈佛なりといへり。大師歸朝の後、高野山の大塔に安置ありしを、彼山の麓に住める流水といへる沙門感得して、武州淺草に移し奉りしが、故ありて開山貞義和尚、當寺に遷し奉るとなり。故に三國傳來の稱ありといへり。

自樂居士墓　境内卵塔の地にあり。備前國の產にして、齡を保つ事既に百十四歲なり。常に壯年の人の如く見ゆ。文字を書す事を得ざりしに、衆人のをしへにしたがひ、百歲の頃より壽の一字を學び得て、是を紙に書きて人に與へしとなり。寶曆三年癸酉十二月三日に歿す。

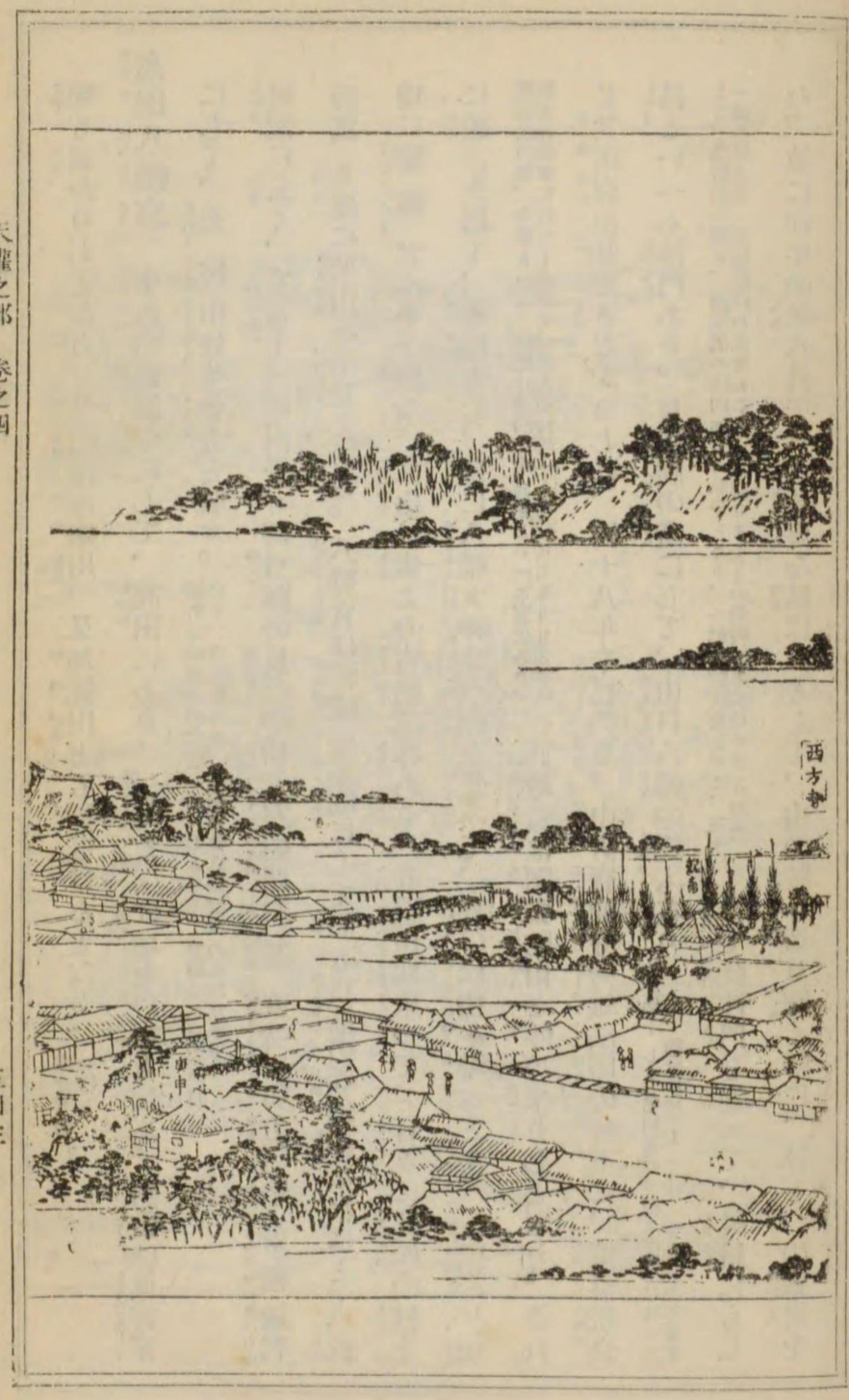
龜鶴山誓閑寺　同北に隣る。易行院と號す。淨土宗にして、靈巖寺に屬す。本尊五智如來の像は、各長八尺　開山木食本譽上人秋風誓閑和尚の作なり。常念佛の道場にして、清淨無塵の佛域なり。當寺昔は少しの庵室にして、其前に松樹四株を植ゑて、方位を定めて、方松庵といひけるとぞ。今四五十步南の方、道を隔てゝ向うの側に庚申堂あり。是則ち昔の方松庵の地なり。

稻荷祠　境内にあり。開山誓閑和尚はすべて佛像を作る事を得て、常に吹革〔フイゴ〕をもつて種々の細工をなせり。此故に境内に稻荷を勸請し、十一月八日には、吹革祭をなせしとなり。今もその餘風にて、年々その事あり。

垂枝櫻　本堂の前にあり。菊岡沾凉がいはゆる、しらぬ櫻と名付しもの是なり。附て云ふ、當寺境内に横たはれる小溝の流れをもつて、豐島郡と荏原〔エバラ〕郡との堺とす。當寺鐘の銘にも其事を擧げたり。

金川　同所穴八幡の前を、早稻田の方へ流るゝ小川を云ふとなり。今は古川と唱へたり。水源は戸山御庭中より發する所なり。文明年間、太田道灌遊獵の時、急雨に逢ひしは北地にして、昔は川の

誓願寺
西方寺
誓願寺


西方寺

幅も廣かりしとなり。其頃は加奈川、又加能川とも稱びけるとなり。或は蟹川に作る。

高田八幡宮　牛込の總鎭守にして、高田にあり。世に穴八幡とよべり。此地を戸塚と云ふ。別當は眞言宗にして、光松山放生會寺と號す。舊名は威盛院中之坊と唱へしとなり。祭禮は八月十五日にて、放生會あり。旅所は牛込神樂坂の中腹にあり。

社記に云く、寛永十三年丙子、御弓隊の長松平新五左衞門尉源直次に與力の輩、射術練習の爲、其地に的山を築立てらる。八幡宮は源家の宗廟にして而も弓箭の守護神なればとて、此地に勸請せん事を謀る。此山に素より古松二株あり。其頃山鳩來つて、日々に此松の枝上に遊ぶを以て、靈瑞とし、假に八幡大神の小祠を營みて、件の松樹を神木とす。南向亭云く、此地はいにしへ早稻田邑の地、中島といふ。此地に青柳津六兵衞といへる富民あり。往古北條家に仕へし士にて、其人の持傳へし山林にてありしとぞ。

ど其所以を知る者なかりしに、同十八年辛巳の夏、中野寶仙寺秀雄法印の會下に、威盛院良昌といへる沙門あり。周防國の產にして、山口八幡の氏人なり。幼くして毛利家の侍榎本氏に仕へしが、榎本氏沒して後、十九歲の年遁世して、高野山に登り、寶性院の法印春山の弟子となり、一紀の行法をとげて、三十一歲の時より、諸國修行の志をおこし、其間さまざまの奇特をあらはせりといふ。

依て此沙門を迎へて、社僧たらしむ。故に同年の秋八月三日、草庵を結ばんとして、山の腰を切り闢く時に、ひとつの靈窟を

其二

得たり。その崖の中石上に、金銅の阿彌陀の靈像一軀たゞせ給へり。（御長三寸ばかり。）八幡宮の本地にて、しかも山の號に相應するを以て奇なりとす。（穴八幡の號こゝに起れり。舊址今猶坂の傍にあり。）其又此日將軍家御令嗣嚴有公御誕生ありしかば、衆益その靈威をしる。（江戸名所記に云ふ、同年八月九日、社頭の繞り一町四方に繩張して、其地を開き、本社をば神木の松の本に遷し、八重垣をゆひまはしける、其時加州大守數百の人夫を贈られ、其地を築き固めしむ。依て日あちず成就し、同十四日遷宮の式を執行す。松平新五左衛門尉、其與力の人々を引き具して、的山（マトヤマ）の邊に幕を張り、式正（シキシヤウ）の小的を建る、神的は射法なればとて、小池の某何が子十二歳にして、是を勤むと云々。）其後元祿年間、今の如く宮居を御造營ありて、結構備れり。（南向亭茶話に、嚴有公殊に當社を御崇敬あり、御宿願の事滿ち給ふの後、當社を營せらる、裏門は內藤豐前守、鳥居は松平左近將監、御手水垣は增山兵部少輔等これを寄進すとあり。又江府神社略記、及び和漢三才圖會等の書に、元祿年中桂昌院殿御再興ありしといふ。）

若宮八幡宮（本社の前左にあり。）

東照大權現（同所に鉦ばせ給ふ、毎年四月十七日參拜の人多し。）

氷室明神祠（本社に相對す。盛德といふ二字を彫りたる額を掲ぐ。祭神大巳貴命、元祿二年十二月二十二日、牧村氏直良十六歳にして疱瘡を患ふ。同三年正月二日、金澤の住人渡邊氏是善、靈夢の應ありて、此神を祭る。直良此神に祈願して平愈す。同七年の頃始めて乙くに鎭座せしむるといひ傳ふ。）

光松（別當寺と本社との間、坂の支路にあり。昔の松は延享年間に枯れたりとて、今あるものは後世植繼ぎたる若木なり。南向亭云く、此地昔は松樹繁茂せし山林にて、其中に一株の松あり、暗夜には折として瑞光を現ず、故に其樹を稱して光り松と云ふとぞ。又寶永十三年、始て當社八幡宮勸請の頃、此樹上に山鳩來り遊びしと云々。）

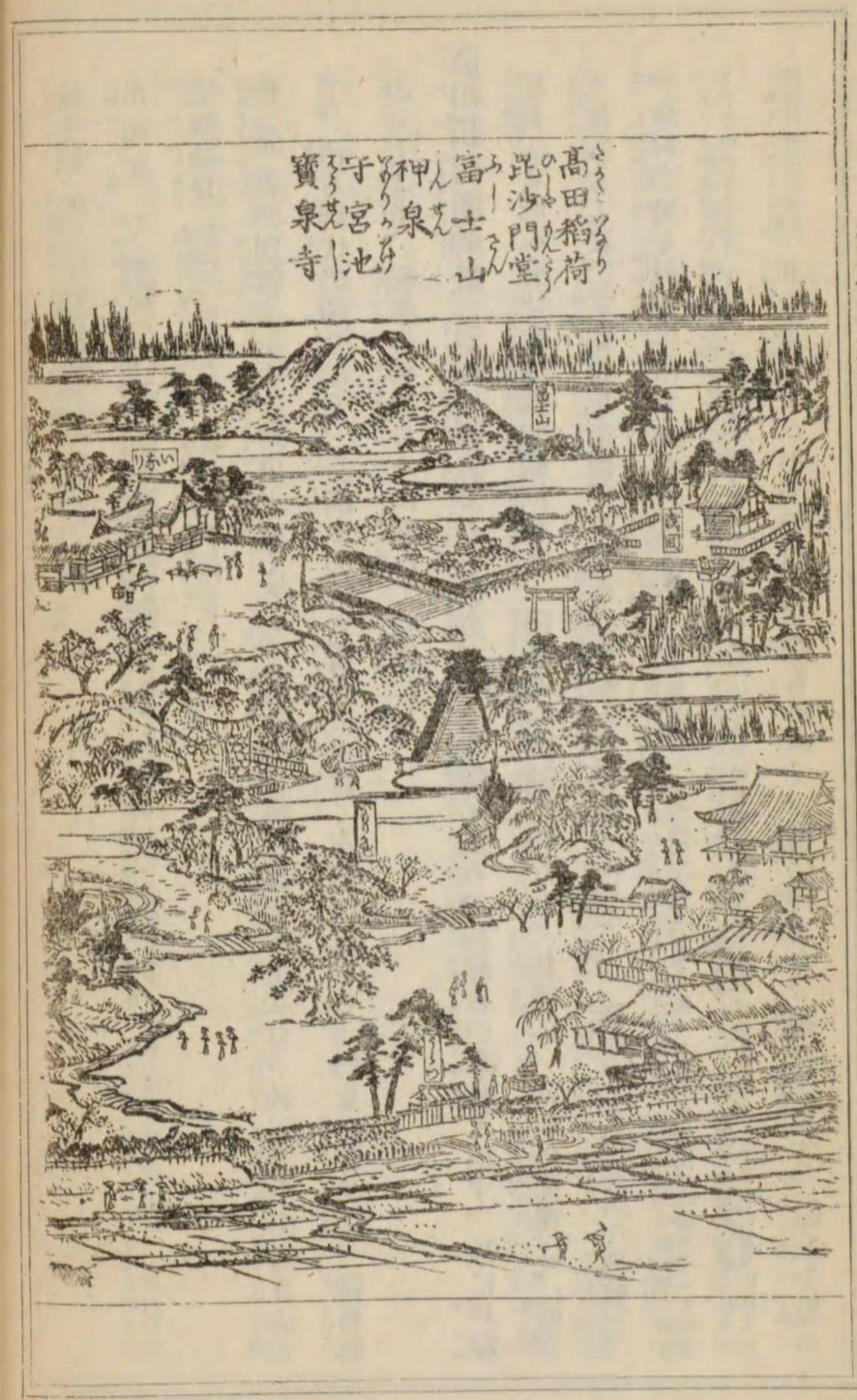
放生池（石階の下にあり、山の腰より清泉したくりおつ。實に石清水の名に應ずるの奇特といふべし。）

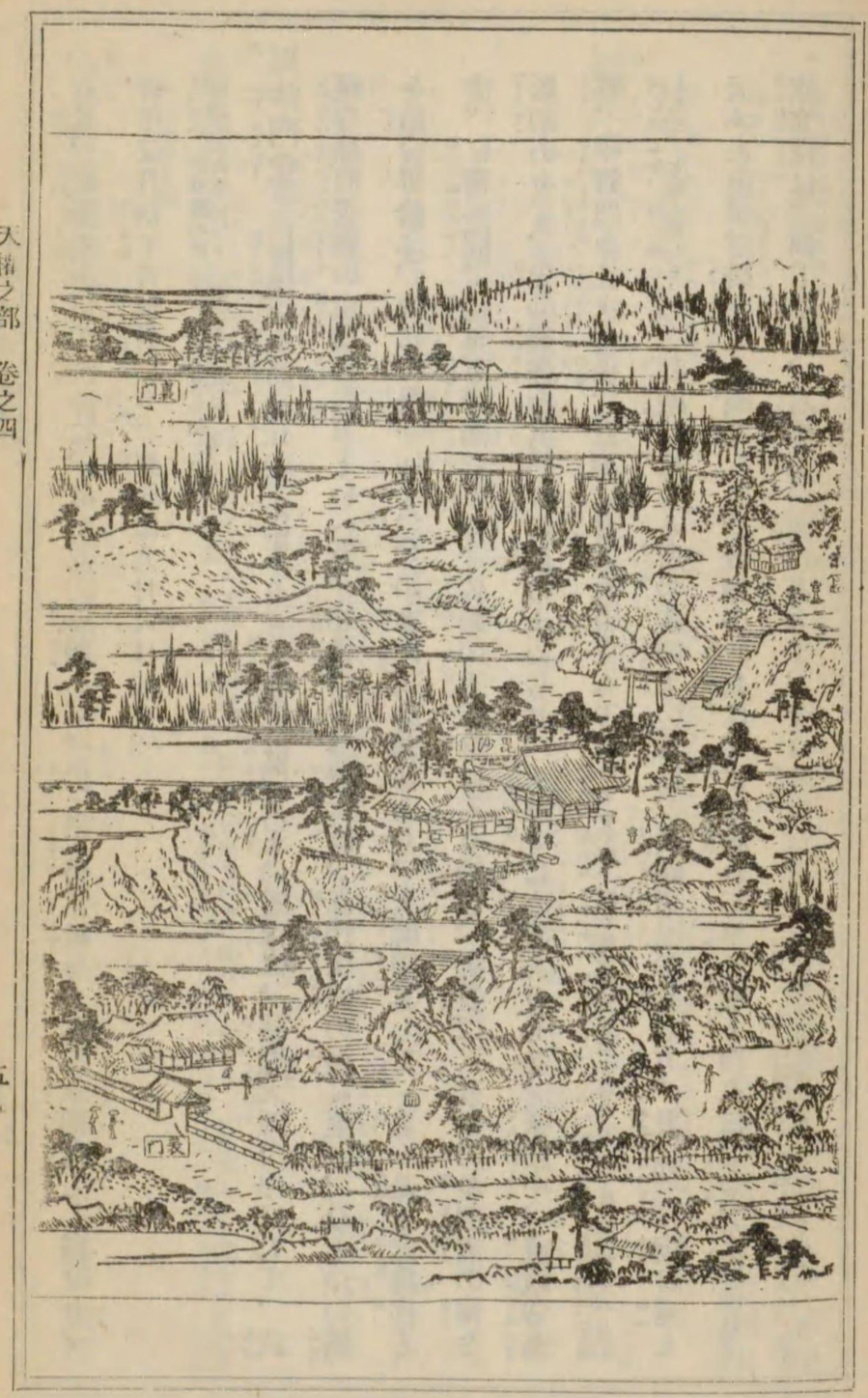
出現所（坂の半腹、絶壁にそひてあり往古の靈窟の舊址なり。近頃迄其地に出現堂となづけて、九品佛の中、下品上生の阿彌陀如來の像を安置せし軍字ありしが、今は見えず。）

能舞臺址（本社の左の方にあり、今礎を存するのみ。寛延三年庚午三月、觀世太夫一代能を興行せし跡なりといふ。）

抑當社の別當寺を光松山と號くるも、神木の奇特によそへてなり。神と君との道直にして、治る御代の濁りなく、石清水の清き誓、最も尊くぞ思はれける。殊更元祿の頃、御再興ありしより、和光の神德日々に顯れて昭然たり。

高田稻荷明神社　同所八幡宮より右の方、道路を隔てあり、戸塚村の產神と稱す。故に戸塚稻荷とも呼べり。本地佛聖觀世音は、南都德一大師の作なり。相傳ふ、當社の權輿は、最も久遠なりしに、文龜元年辛酉、上杉治部少輔入道朝良、（南向亭、朝興とす。）靈夢に依て宮居を再興し、戸塚村の地を社領に附せらる。（當社に古き棟札を藏す。其文に云く、天文十九年二月二十九日、牛込主馬時國再興、別當寶泉坊秀寶、大工與左衛門、同左衛門五郎とあり。按ずるに、牛込主馬時國の名いまだ考へず。上州大胡氏の後裔、武州牛込に住して、天文二十四年、氏を牛込に改むるといふ事、其家系および牛込宗參寺の傳記に載せたり。よつて時代を合せ考ふれば、大胡氏も天文十九年の頃は、いまだ牛込氏に改めざりし時なり。然ればこゝに時國といふは、自ら別の人にてありしならん歟。猶他日訂正すべし。）其後元祿十五年壬午四月、靈告ありて、榎の樔より、靈泉涌出す。眼疾を患ふ


高田稲荷
毘沙門堂
富士山
神泉
寺宮池
寶泉寺



る者、此靈水を以て洗ふに、はたして奇驗あり。仍て土俗當社をさして水稻荷とも稱せり。

毎年二月初午日奉射あり。祭祀は九月九日なり。

神泉　社前榎の根〔ウツロ〕よりしたくり出るをいへり。靈泉ありといへり。

毘沙門堂

同境内小高き丘の上にあり。本尊毘沙門天王の靈像は、慈覺大師の作にして、武藏守藤原秀郷の念持佛なりといへり。相傳ふ、慈覺大師、江州唐崎の濱に至り、ひとつの笛を拾ひ得給ふ、内に御長一寸八分の多門天の靈像あり、大師隨喜して、自ら是を念持佛とす。仁壽年間、舊里下野國に下り、佐野の大慈寺に入り給ひ、御長二尺五寸の多門天の像を彫刻ありて、先の靈像を其胎中に籠めまゐらせ、大慈寺に安置ありしを、天慶中、武藏守秀郷、平將門を征伐の後、此地に移したりとなり。紫の一本〔ムラサキノヒトモト〕といへる册子に、秀郷將門を退治するの時、深く毘沙門天を念じ奉りしに、毘沙門天の上に現じ給ふを、自ら摸し彫むとあり。寺傳に異なり。拜殿に掲くる所の多聞天の額は、長崎道榮の筆なり。其傍に朝日庵と云ふありて、眺望尤も幽雅なり。此地の時鳥は、世に勝れて早く啼くゆゑに、其名を得たり。旗立櫻は、同じ堂前、石燈籠の側にありて、今は若木なり。或人いふ、秀郷此所にて旗を立つるとも、又は此地昔新田家陣營の舊址なる由云傳へて、旗立櫻胃掛の梅杯云ふもありて、稻荷の社前池の邊にありしが、枯て後植るつぎぬるよし、南向亭茶話にみゆ。旗立櫻は櫻の一種に帆立櫻とて、單六瓣のものあり、中にはなびら一片、別に帆を立てたる如く狂田て、旗を立たるに似たり、是を帆立櫻と呼べり。土人謬傳せるなちん。

船繋松は同じ堂の後、山の中腹にありしが、是も今は枯れたり。苔大將軍家此地御遊獵の頃、此松の齡を問せらる、寺僧某凡千年に及べる由答へ奉りければ、千年松〔チトセノマツ〕と唱ふべき旨鈞命ありしとなり。船繋松の事は、第五卷目日暮靑雲寺の條下に詳なり。守宮池〔サモリノイケ〕も同じ山下にあり、水中蜥蜴多し、故に此名あり。寛永の頃台命に依て、ゐもりが池とよぶとぞ。

禪英山寶泉寺

稻荷と毘沙門兩社の別當寺にして、天台宗東叡山に屬す。開創の年歷未考へず。本尊藥師如來の像は、傳教大師の作なり。或人云く、花洛鮑惠師〔タコヤクシ〕と同體なりといへり。相傳ふ、文龜元年辛酉、上杉治部少輔朝良、或は云ふ朝興　靈夢を感じて後、稻荷の宮居を再興し、又當寺を創建して、大檀那となる。禪英とは朝良の法號なりといへり。其後天文十九年庚戌、牛込主膳時國といへる人、宮社寺院共に重修せしよし、棟札に記せり。當寺に楠正成の兜と稱するものあり。裡に二前國豐原の住人貞生作ると彫付けてあり。其信否をしらず。常念佛堂は構の外にあり。本尊阿彌陀佛の像は、聖德太子の作なりといへり。堂内に銅像の地藏尊を安ず。

高田富士山

稻荷の宮の後にあり、巖石を疊んで其容を摸擬す、安永九年庚子に至り成就せしとなり。此地に住める富士山の大先達藤四郎といへる者、これを企てたりといふ。毎歲六月十五日より同十八日まで、山を開きて、參詣をゆるす。山下に淺間宮を勸請してあり。

宗良親王陣營舊址

寶泉寺の山林を指して、其舊跡とす。後村上帝の正平七年壬辰、新田

家、信濃宮宗良親王を供奉して、武藏野合戰ありし時の陣營の舊址なりといへり。宗良親王は、後醍醐帝第三皇子にして、信濃の宮と申し奉る。

新葉集雜

あづまの方に久しくはべりて、ひたすらものゝふの道にのみたづさはりつゝ、征東將軍の宣旨など下されしも、おもひの外なる樣におぼえてよみはべりし。

おもひきや手もふれざりし梓弓起臥わが身なれんものとは　宗良親王

同じ頃、武藏國へ打越えて、小手指が原といふ所におりるて、手分などしはべりし時、いさみあるべきよし兵どもにめしおほせはべりしついでに、思ひつゞけはべりし。

君のため世のため何かをしからん捨ててかひある命なりせば　同

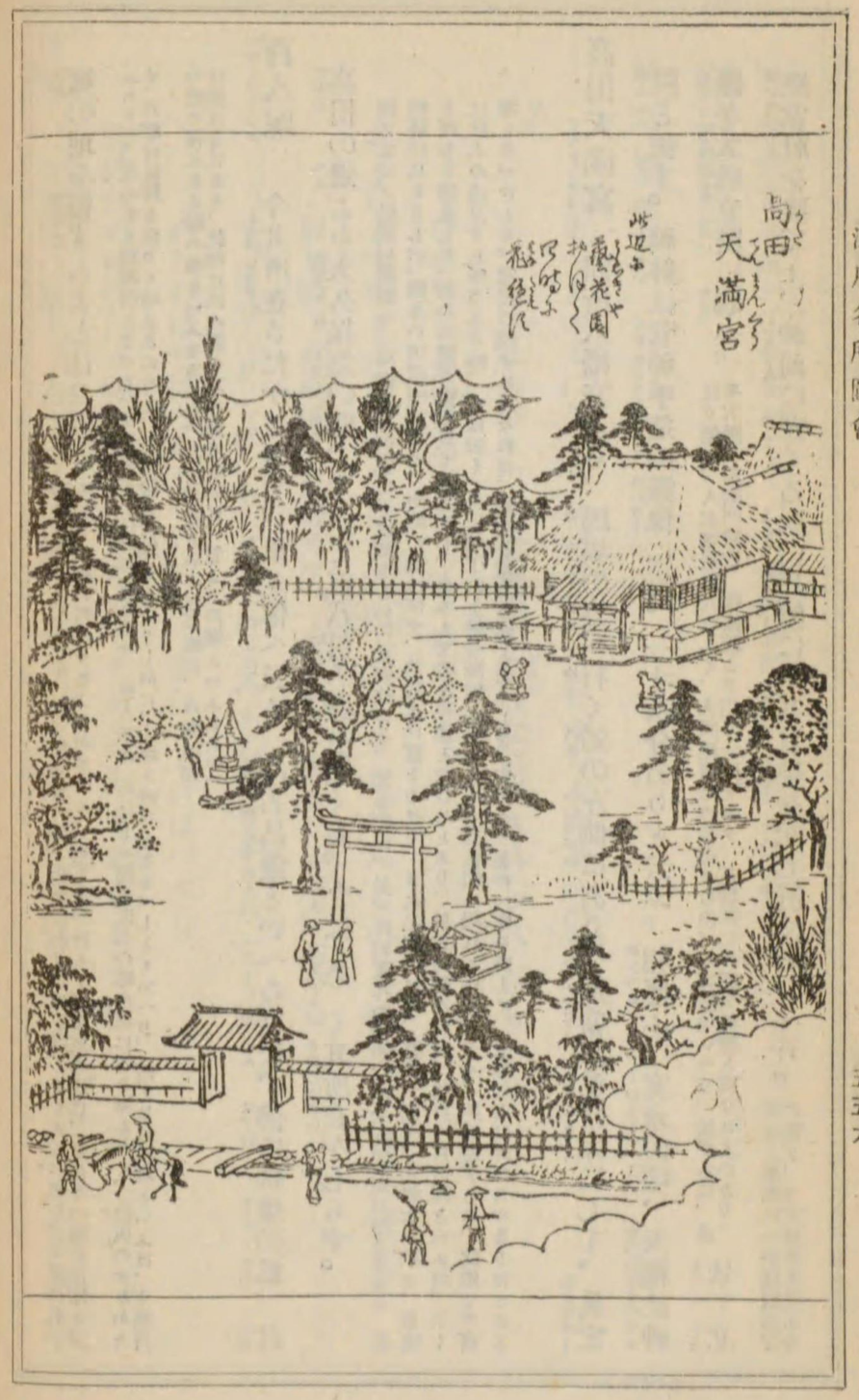
戸塚　今高田に屬す。古は此地の惣名とす。北條家の分限帳に、恒岡彈正忠、牛込にて富

塚の地を領するよし注せり。江戸鹿子〔エドカノコ〕に、昔洪水の時、此地ばかりは戸を以てさくゆるが如く、水災にかゝちざりし故に名とするよし記せども、信ずるにたらず。里老の說に、寶泉寺の地に富塚と云ふありて、所の名も富塚村となづく、今は富を戸に改むると云々。或人云ふ、いにしへ岡本氏の邸の地に古き塚ありて、白狐のすみかとす、戸塚は狐塚を誤りて唱ふるにやと。又此邊皆古塚多くありし故に、十塚と呼びしなるべしともいへり。按ずるに狐塚といふは、水稻荷の社の傍にある塚の事をいふならんか。高田雲霍といへる草紙に、戸塚の洞は寶泉寺にあり。此所に狐の形の石の扉ある故に、昔より戸塚といふとあり。

百八塚　今其所在さだかならず。里老傳へ云ふ、往古昌蓮といへる富民、佛に供養の爲、此高田の邊より大久保迄の間、すべて百八員の塚を築くと。今は悉く其所在をしらず。

按ずるに、中野村熊野十二所權現の別當に、成願寺といへる禪林あり。其寺記に、鈴木莊司重邦の後裔、鈴木九郎といへる者あり、紀州藤代にありしが、應永の頃武州に來り、中野の地に住す、其家大に富をなせり。されど宿因にや、其嗣夭死す、九郎大に歎き、居宅を壞ちて精舍とし、女の法號正觀を以て寺號とし、自らも又名を正蓮と改むるとあり。昌正同音なれば、此百八員の塚といふは、若くは此人の造立する所ならん歟。或は云く、今馬場下町を供養塚町と唱ふるも、其舊稱の殘れるにやと云々。再び按ずるに、此地を昔富塚となづけしも、富民の制する所なれば、彼供養塚を富塚と唱へしを、中古より美の一字を略して、登津加とは呼びあやまりたるならん。

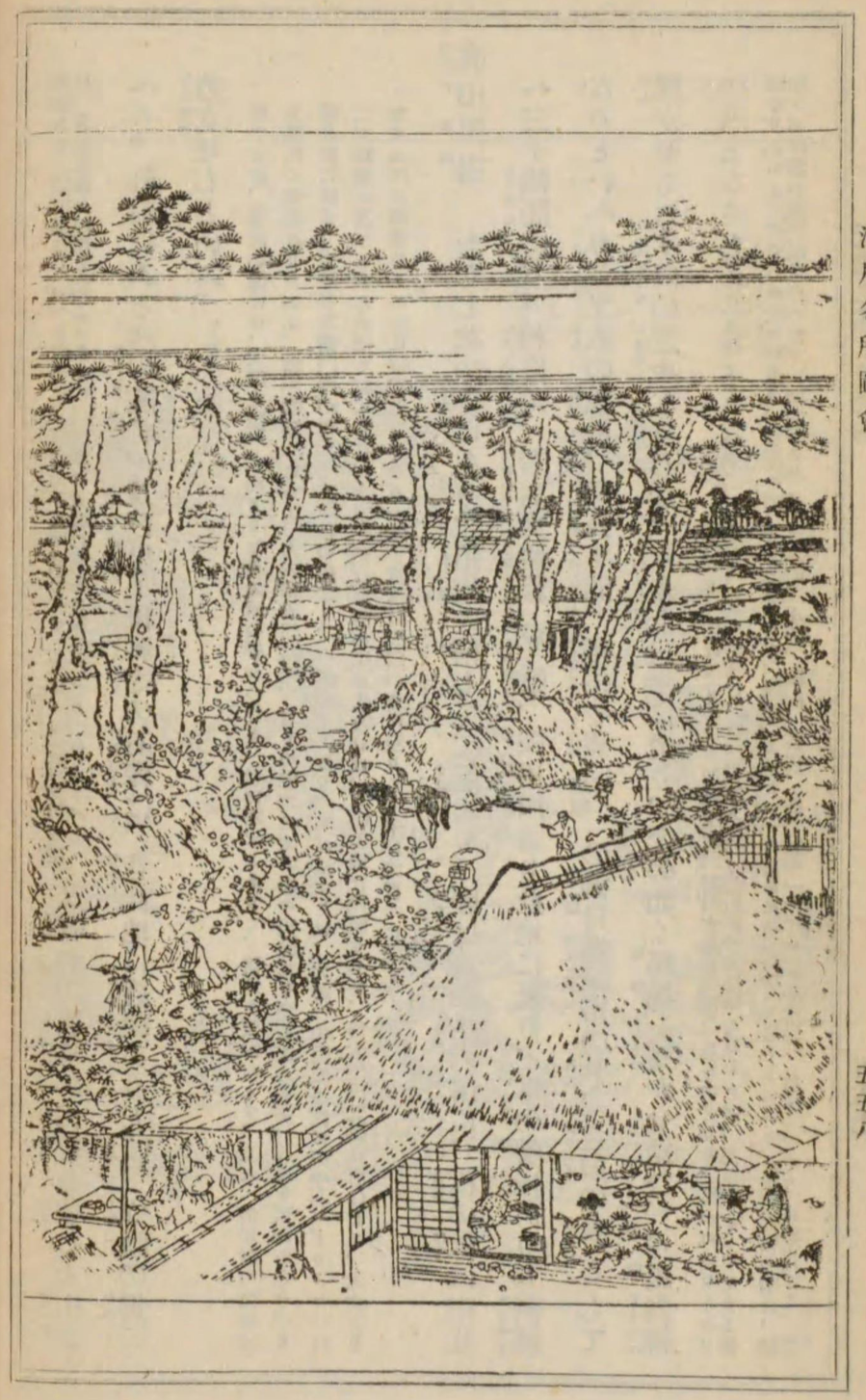
高田天滿宮　同所八幡宮より、馬場の方へ行く道の左側にあり。別當は眞言宗にして、眞定院と號す。神躰は菅神手造の靈像にて、一寸八分ありと云ふ。相傳ふ、寛永の頃、大樹此神像を大橋立慶に賜ふ。此立慶は、入木堪能の人にして、大橋流筆法の始祖なる由、菊岡沾凉いへり。按ずるに、息男大橋長左衞門重政、御家流より出て一家をなす。是世間に所謂大橋流と稱するものなり。依て立慶當社を建てゝ、神前に懸くる所の戸帳に、其旨趣を記し置くといへり。當社の舊地は牛込濟松寺の邊り、今天神町と唱ふ。

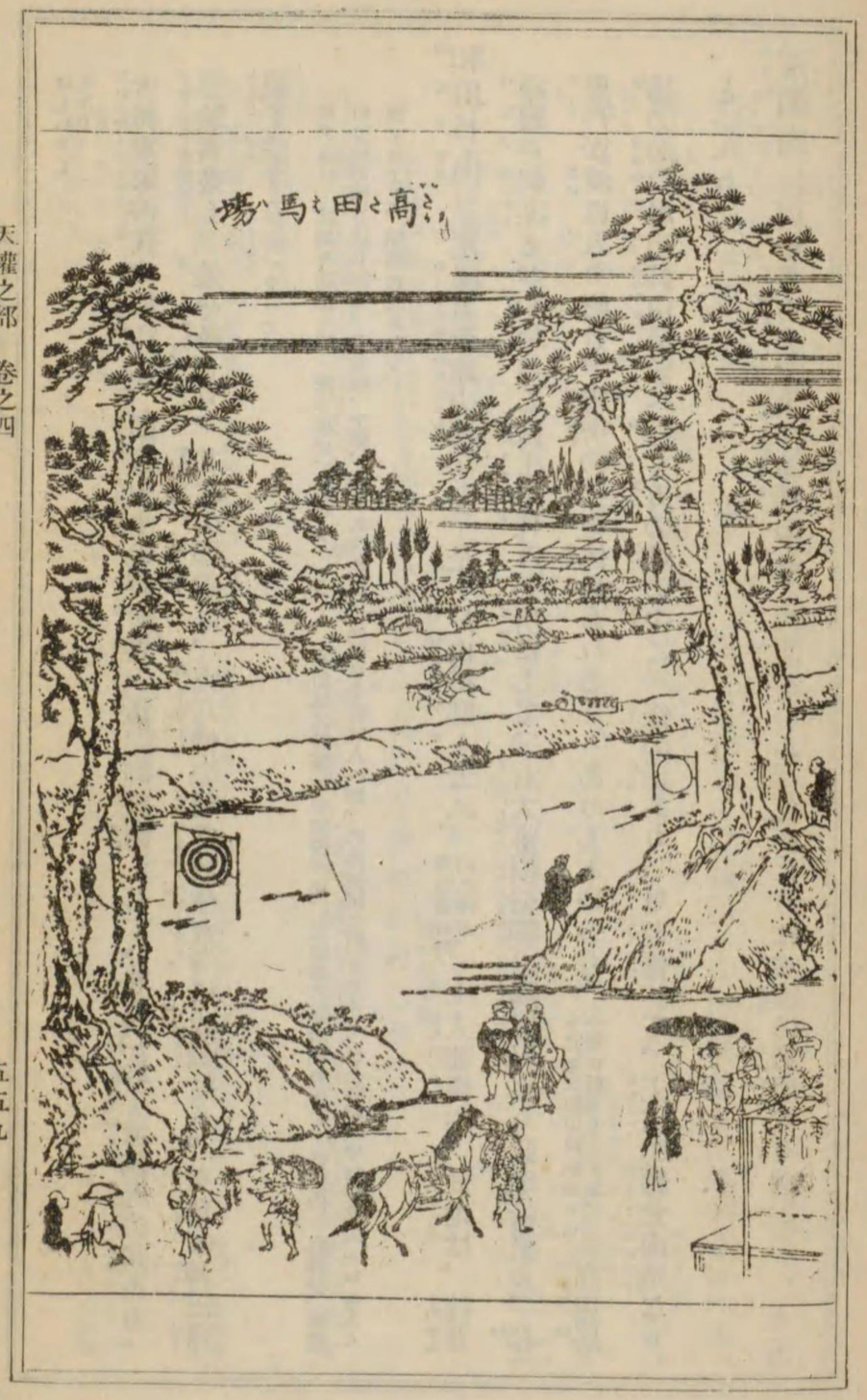


地是なり。望海雜談といへる册子に、寶永七年の事實を記せし次に、御祐筆大橋立慶に、高田大友の屋敷を賜ふとありて、其地に天神の宮ある事を記せり。證とすべし。又菅神の眞筆の佛經を收むる由云へり。社前にある所の龍神、及び鬼子母神等の石像は、昔此地に經藏ありし頃、守護の爲に造立せしといふ。

按ずるに、當社の傳には、大橋立慶、大樹よりたまふ所の菅神の像を一社に奉ずとありて、舊地を天神町とす。土人、濟松寺の地昔は大橋氏の宅地なりといふ。南面亭茶話に云ふ、大友宗五郎義延、自らの宅地に太宰府の天滿宮を遷しまゐらす、其地を天神町となづく後高田に移す、大橋長左衛門奉納の三十六歌仙の繪ども、今猶存すとあり。再び按ずるに、元祿二年開板の江戸鹿子〔エドカノコ〕に二百餘年に及ぶとあるに依て考ふるに、大友義延は文祿の頃の人なれば、其頃宅地に勸請せしを、後大橋氏其跡に居住して、大樹よりたまふ所の神像をその社に安置したるならん歟。寶永は寶政の今に至りて、未だ二百年に過ぎず。

高田馬場　おなじ北の方にあり、追廻と稱して二筋あり。竪は東西へ六町に、横の幅は南北へ三十餘間あり。相傳ふ、昔右大將頼朝卿、隅田川より此地に至り、軍の勢揃ありし舊跡なりといへり。土人の說に、慶長年間、越後少將忠輝卿の御母堂高田の君、遊望の設として開かせらるゝ所の芝生なりしが、寛永十三年に至り、今の如く馬場を築かせ給ひ、弓馬調練の所となさしめらるゝとなり。或人云ふ、林丹波守勝正、加藤左内、河村吉左衛門等、是を司どりて、築かれたりとなり又云ふ、北の馬場は、武田信玄入道、小田原の北條家を攻むる時、馬を試みられたりし舊跡なりといふ。北の方の松の列樹は、享保の頃、台命によりて、風除〔カザヨケ〕のために是を植ゑらるゝといへり。延寶天和の頃は、藤司ケ谷群參の輩、此地にいたり、賭的〔カケマト〕大的、小的、騎射、其外、能、雛子〔ハヤシ〕土佐外記、放下〔ハウカ〕の類出でて、賑




高田馬場

はしかりし
となり。

大將軍家御代の始には、國家安全の御祈禱の爲、御嘉例として、此地に於て流鏑馬の式あり。形裝善盡し、美を盡せり。其式の圖說は、穴八幡の別當放生會寺に收藏せり。文章は神田白龍子撰する所なり。

按ずるに、此地を高田と唱へ來る事は、近かるべし。小田原北條家の所領役帳に、太田新六郎所領の中に、高田内、赤澤分、同添田分等の地を注し加ふ。又赤澤、千壽、領する所の江戸高田は千壽成人の間、赤澤後家に附すとあり。又此地を中村平次郎といふ人も領するよし、同書に見えたり。

和田戸山　尾陽君御館の地なり。是を戸山御邸と云ふ。戸山或は外山に作る。土人相傳ふ、此地は、往昔和田戸何某とかやいひし武士の住みし所にして、右大將頼朝卿、隅田川より此地に至り、和田戸が第に入り給ひ、軍勢の勞を休められしこと、ありしといへり。今其地に和田戸明神といへる宮社ありと云ふ。高田馬場の南、尾州御山屋敷へ行く方の畑の中に一條の道あり。里老傳へて、上古の鎌倉海道なりといへり。

荒薗山　同所戸山と、大窪諏訪の森との間をいふ。此あたりは雲雀の名所なり。

山吹の里　高田の馬場より北の方の民家の邊を、しか唱ふ。此地を今向砂利場（ムカウジャリバ）と號す。相傳ふ、太田持資、江戸在城の頃、一日戸塚の金川邊に放鷹す、其時携ふる所の鷹、翦れて飛去りければ、跡を追ひてこゝに來る。時に急雨頻なれば、傍の農家に入つて簑を乞ふ。内より小女出て、盛なる山吹の花を手折りて、是を持資に捧ぐ、されども詞を出さず。持資其意を悟る事を得ずして、却て憤を含み、家に歸り、近臣に事のありさまを物語す。中に一人進み出て云く、是は簑のなきといへる事ならん、古歌に、

七重八重花はさけども山吹のみのひとつだになきぞわびしき　同かなしき

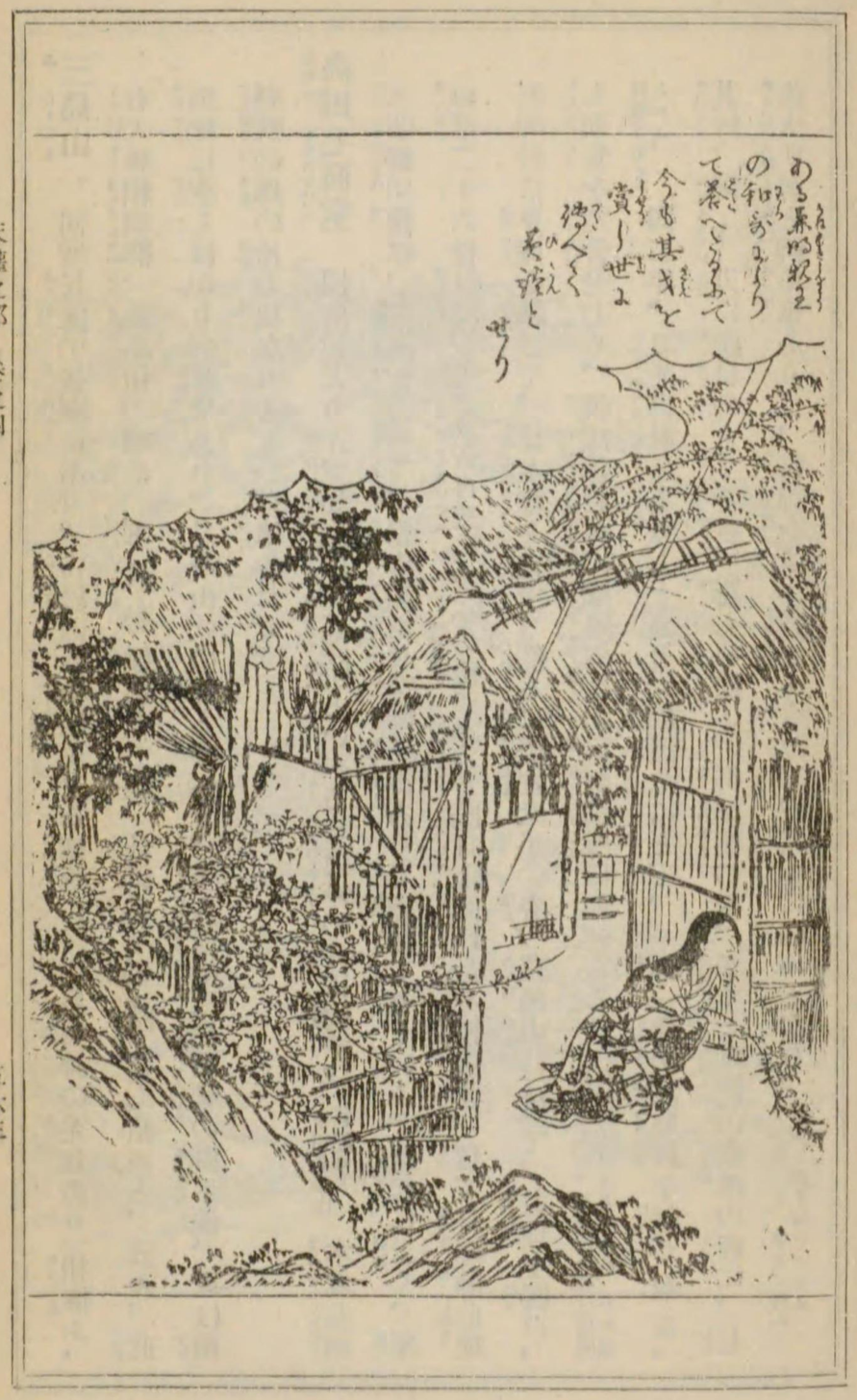
（後拾遺集ひとへ）

かく詠ぜし和歌の心をもて答へ奉りしならんと申しければ、持資深く恥ぢて、後和歌の道を慕ふと云々。

此七重八重の和歌は、後拾遺集に、中務卿兼明親王の詠とす。其詞がきに云く、小倉の家に住みはべりける頃、雨のふりける日、蓑かる人のはべりければ、山吹の枝を折りてとらせてはべりけり、心もえてまかりすぎてまたの日、山吹のこゝろもえざりしよしいひおこせてはべりける返事に、いひつかはしけるとあり。

按ずるに、此山吹の里の事は、和漢三才圖會および說辨、甄逗通鑑等の中に出づるいども　全脉にりし頃のといへるに思ひよせて鎌倉なりとし、または東海道の方驛神奈川などいへど、皆其實を得たるにあらざるべし。穴八幡の前を寶泉寺の方へ流るゝ小溝を、今蟹川といふ。昔は加牟川と唱へけるとなり。是先にいふ所のかな川なちん歟。其是非は詳にせずといへども、しばらくこゝに云ひ傳ふるに任せて、是を擧ぐるのみ。

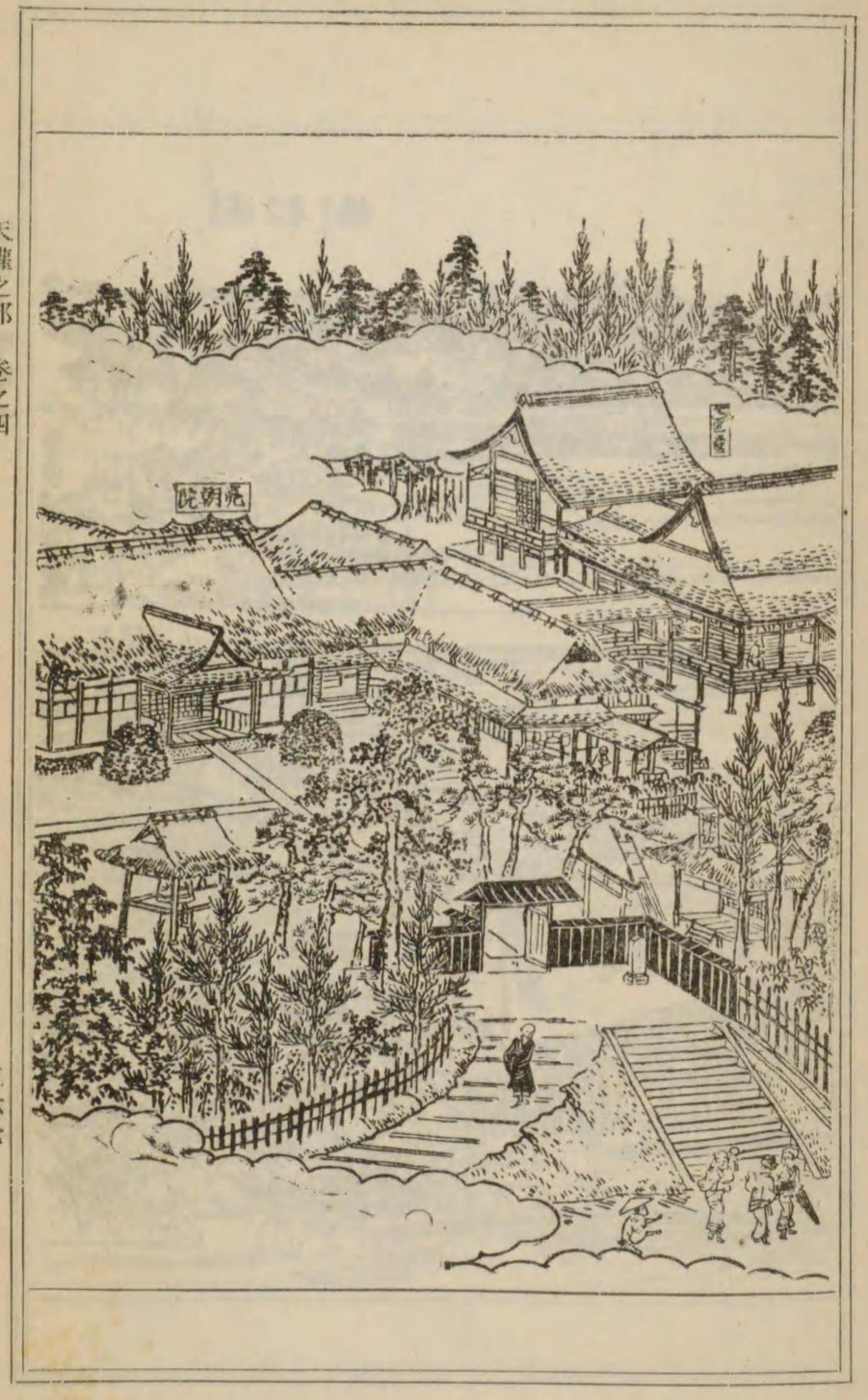
山吹の里八ヶ田のる場
より北の方民家の
辺とや山吹田持資
江戸ふるわり一日
此戸塚の金川の辺よ
放変じ急雨に遇そ
傍の農家小入り
蓑とかりんるとも
ふ時ふ内より
小女出て刺ゝ
窺りるる山吹の
花一枝とをくる
持資ふ捧くるハ
後拾遺集ふ七重
八重花ハさけども
此のみのひとつ
ふなきこそ

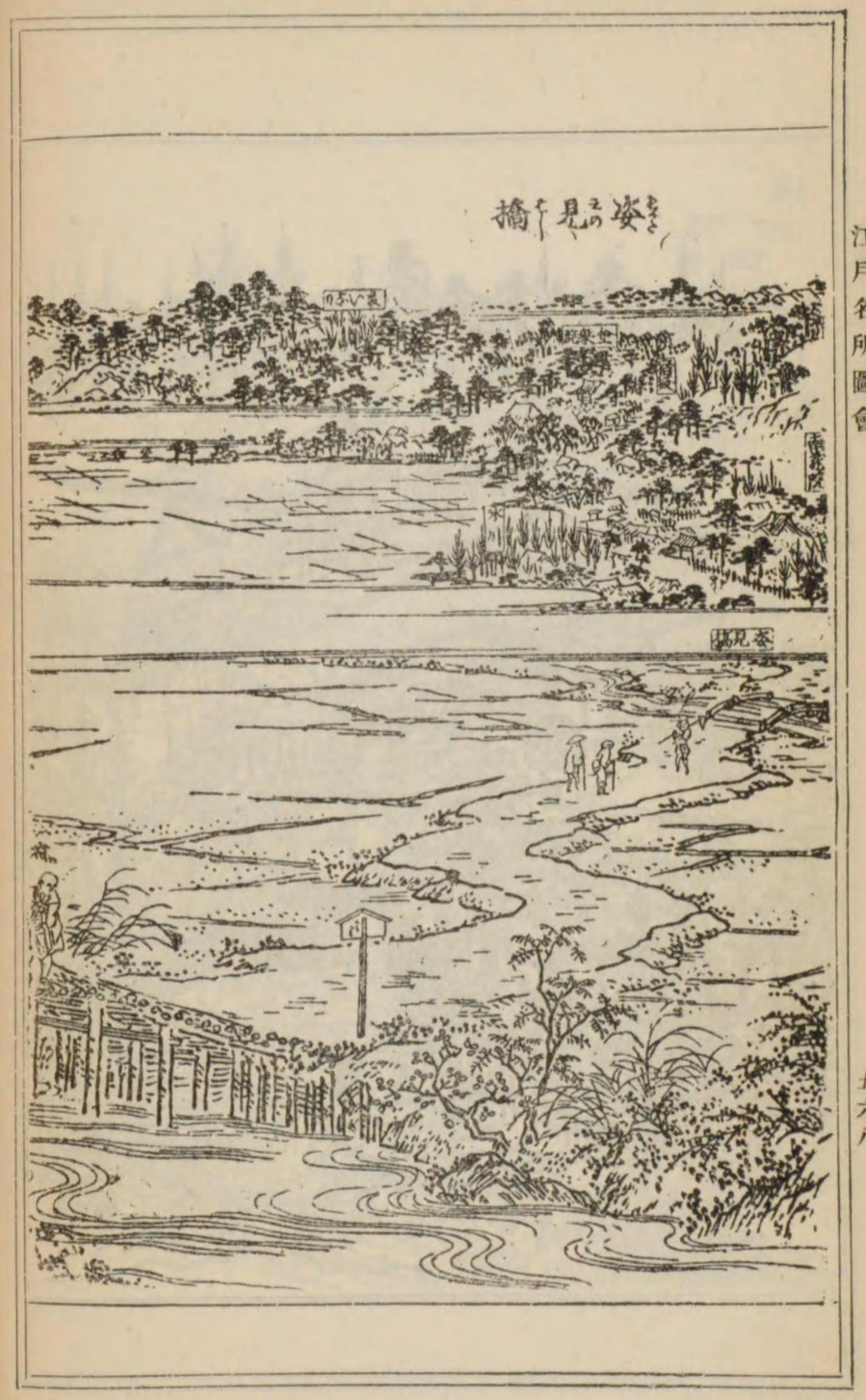

ある業明朝之
の和ふ
て茶へ
今も其き
賞し世よ
徳べく
蓑笠と

三島山　同所民家の後園にあり。古松四五株繁茂せる樹蔭に、三島明神の禿倉あり。相傳ふ、右大將頼朝卿、此高田の地に、軍兵勢揃ありし頃、此御神を勸請なし給ふと、云々。此山岸に少しばかりの甘泉あり、是を山吹の井と呼べり。土人或は三島明神の御手洗、又は頼朝卿の馬の冷し場なりともいひ傳へたり。

高田七面堂　同所道より左、如意山亮朝院といへる日蓮宗の寺に安ず。甲州身延山に屬せり。本尊七面大明神の像は、身延山の七面尊と、同木同作なりと云ふ。當寺開山日暉師感得ありし靈像なりといふ。緣起に云く、延山第二十六世日境上人、靈告再三に及ぶの後、亮朝院日暉師に是を授與す。依て日暉師此地五明村に草庵を結びて、此本尊を安ず。然るに慶安元年の春、荒薗山に於て、社地を賜ひ、七面堂を造營せしめ、御武運長久、國家安全の御祈禱所に命ぜらる。寛文十一年、荒薗山の地は尾陽公の御山莊となりし故、今の地に遷さるゝといふ。同二年、日光御社參ありしとき、御護りにとて、一部一卷の法華經を獻じ奉る。其時、御守刀に題目の七字をさへ彫しめ給ふ。御歸城の後、忝くも御經の表紙の裡に、七面大明神と御染筆ありて、御諱をさへ書添へられて、當寺に賜ふとなり。今猶傳へて、當寺三種の靈寶と仰ぎ尊むといふ。

高田十面堂朝日櫻
朝日堂


亮朝院


姿の見え橋

しもの俤

世尊堂　堂内に釋迦如來の像を安ず。

朝日堂　日朝上人の像を安ず。此堂内に於て修行する所の常課目は、法華院日養師の開基にして、紀陽君御寄附なりといへり。當寺第三世圓乘院日了上人、當に眼病を患ひて日朝上人に寄願し、平癒する事を得たり。後靈驗を顯ずる事ありて、宗祖日蓮大士の像を、日朝上人に作りあらたむるとなり。今當寺より出す所の眼病救護の靈符を得て、現益を蒙る者、少なからずといへり。

朝日櫻　同じく常唱堂の向う右の方にあり、日朝上人の愛樹なりといへり。

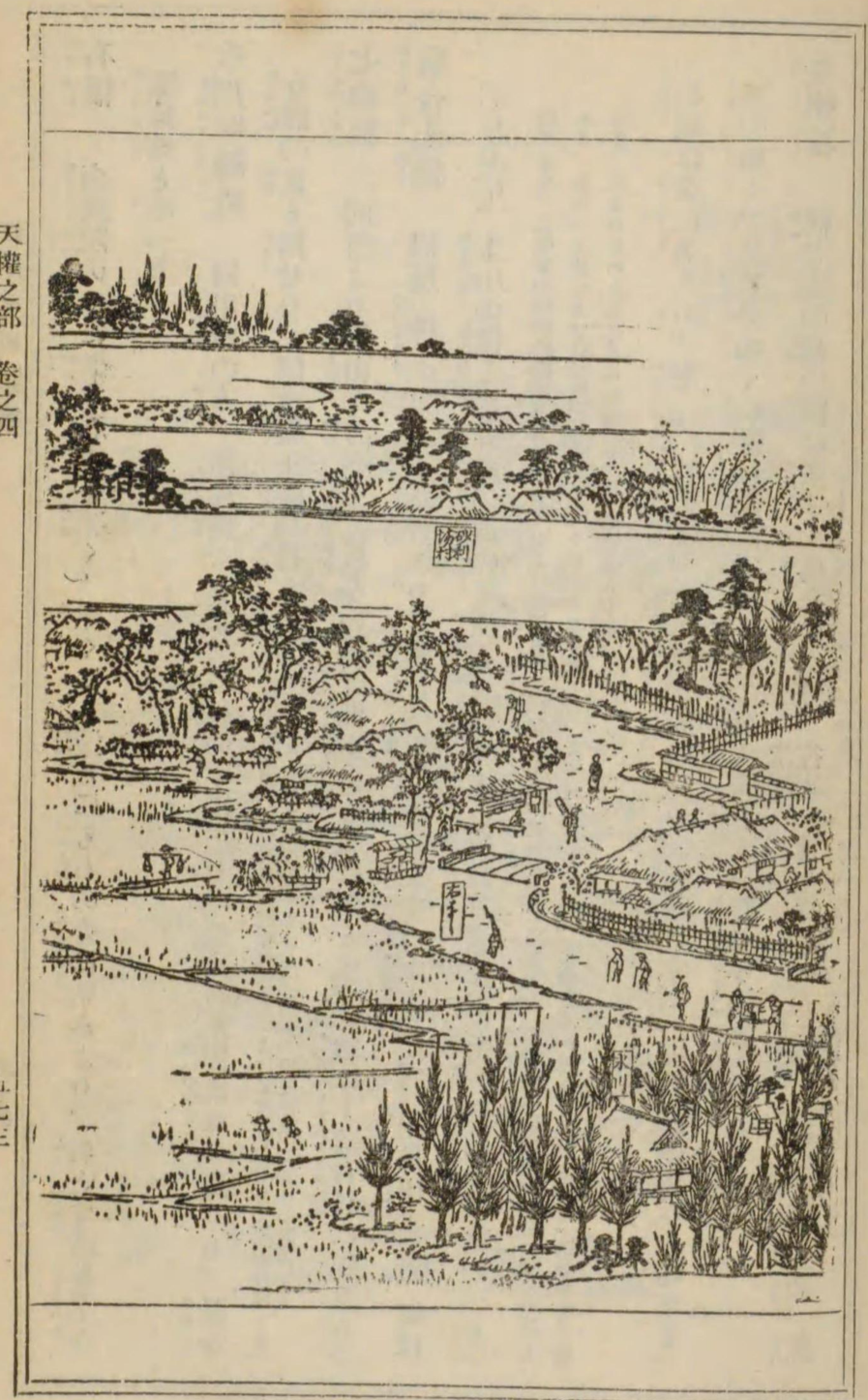
俤の橋　同じ北の方、上水川に架す。長十二間餘あり。昔は板橋なりしが、近頃は土橋となれり。此橋を姿見の橋と思ふは誤りなり。次にしるす。此邊の螢は、形大にして、光他にまされり。

姿見の橋　同じく北の方に架せる小橋を號く。昔は此橋の左右に池ありて、其水淀んで流れず。故に行人覗みれば、鏡の面に相對するが如く、水面淵然たる故に名とするとも、或は寛永の頃、大樹此地へ御放鷹の時、御鷹翦れけるが、此橋の邊にて見出給ひしかば、台命によりて此名を呼せられし由、里諺に云傳ふ。又土人の說に、在五中將業平朝臣、うた枕みんとあづまにさすらはれし頃、此水に姿をうつされたりし故に名づくといへども、信とするにたらず。

大鏡山南藏院　砂利場村にあり。眞言宗にして、大塚の護國寺に屬す。當寺を大鏡山となづくるは、昔此寺前に大なる池ありて、鏡が池と唱へしにより、此名ありしといへり。此地に姿見、俤「オモカゲ」なと稱する橋あるも、是によりて起る號なりといふ。又當寺を、古俗八ッ門寺と異名せしは、昔大樹御放鷹の頃、當寺の垣根を、此所彼所より分けいらせ給ひしを、悉く門となせし故に、其頃は八

所に門を建てありしにより、かくは異名とせしとなり。開山は圓乘比丘と號す。本尊藥師佛は、聖德太子の作にして、立像三尺四寸あり。此靈像は、秀衡の念持佛なりとて、養和年間の頃迄は、奥州平泉にありしを、圓乘比丘、諸國遊化の時、靈夢を感じ、彼地の農家にして是を得て、此地に安置すといへり。本堂外陣に掲けたる藥師堂三大字の額は、蓮華光院大僧正道恕の筆なり。總門の額に、大鏡山と書せしも、同じ筆なり。當寺藥師堂の後に、大橋立慶の別莊の舊跡あり。寛永の頃は、大將軍家度々此に入らせ給ひしとて、假の御殿なども構へ置れしとなり。昔は此地に鶯宿梅とて、大樹御手づから栽ゑ給ひし梅樹ありしが、後枯たりとて、今はなし。此地は昔鎌倉街道の通路なりとて、鎌倉街道の楓樹と號くるもの、今その境内に存せり。

氷川明神社　同寺前、道より左にあり。下高田村の產土神にして、南藏院の奉祀なり。祭神は素盞嗚命にして、是を土俗男體の宮と稱す。落合の氷川明神は稻田媛を祭れり。よって女體の宮と稱し、當社を合せて夫婦宮とす。毎歲正月十日祭禮にて、奉射の式あり、甚質朴にして古雅なり。此川手洗の川より、男子大黑砂と唱ふるものを產す。此砂は水中に住める蟲の化する由、近江古蹟先生の雲根志にいへり。



高田
南藏院
鶯宿梅
氷川社
右搗

右橋　南藏院の前に架す石橋を號く。往くにも還るにも右の方に見るより、名とす。舊名を藥塚橋と呼べり。

氷川明神社　同申酉の方、田島橋より北、杉林の中にあり。祭神奇稻田姫命一座なり。是を女體の宮と稱せり。同所藥王院の持なり。高田の氷川明神の祭神素盞嗚尊なり。よつて當社を合せて夫婦の宮とす。土俗あやまつて在原業平もよび二條后の靈を祀るといふ。甚非なり。

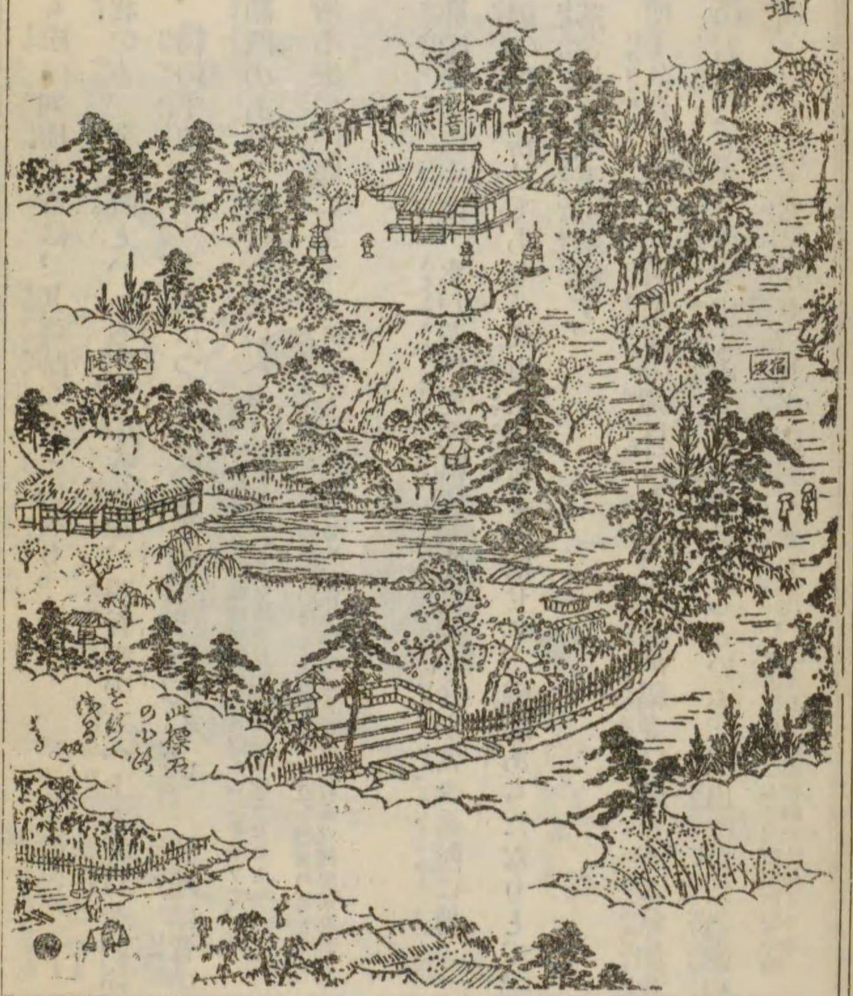
七曲坂　同所より鼠山の方へ上る坂をいふ。曲折ある故に名とす。此邊は下落合村に屬せり。

落合土橋　同所坤の方、上落合より下落合へ行く道に架す。土人云ふ、田島橋より一町ばかり上に、玉川の流と、井頭の池の下流と、會流する所あり。此故に落合の名ありといへり。

按ずるに、北條家の所領役帳に、興津加賀守もよび太田新六郎所領の中に、江戸落合の名を加へ、長野彌六郎分又鈴木分の地を領すとあり。神田の上水もよび此水道へ玉川の上水を助水とせられしは、最も後世にして、漸く承應以來の事なり。然る時は、落合の名の發る所、此ふたつの上水落合ふの義にとるは附會也としるべし。

此地は螢に名あり。形大にして、光も他に勝れたり。山城の宇治、近江の瀨田にも越えて、玉の如く、又星の如くに亂れ飛んで、光景最も奇とす。夏月夕涼多し。

奥州橋　同じ寺の乾の隅に架す土橋をいへり。往古の奥州街道にして、水神の社の上通、黑



田家の邸園に、今も松の列樹あるは、其舊跡なりといへり。

宿坂關之舊跡　同北の方、金乘院といへる密宗の寺前を、四谷町の方へ上る坂口をいふ。同じ寺の裏門の邊に、纔の平地あり。土人たつてうばと呼べり。（たつてうばは立丁場なるべし。）此地は昔の奥州街道にして、其頃關門のありし跡なりといへり。（或人云ふ、此地に關守の八兵衛といふ者ありて、家に突棒刺股及び道中日記等を持ち傳へたるといふ。）

木花開耶姫社　同所小坂の中腹にあり。（土俗八兵衛稲荷或は開耶姫稲荷とも稱す。又當社を櫻姫の宮と唱へ、清玄坂と呼ぶ。按ずるに、富士淺間の宮の祭神は木花開耶姫なれば、淺間坂といひしより、かく謬傳せし事わちふに堪へたり。）

當社の額、木花開耶姫命の六字は、水戸黄門光圀卿の親筆なり。今別當金乘院に傳ふ。

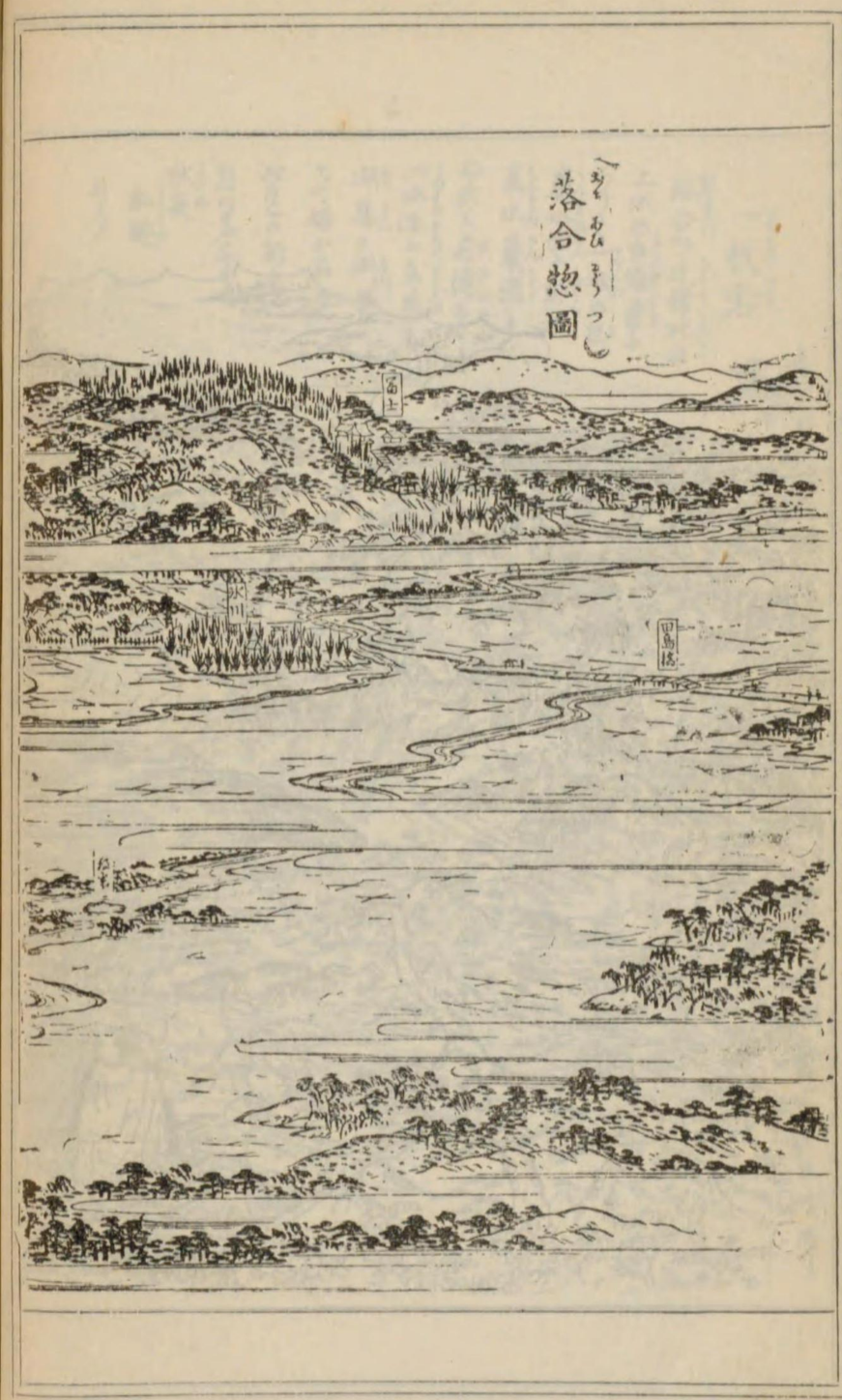
藤杜稲荷社　同所岡の根に傍ひてあり。又東山稲荷とも稱せり。靈驗あらたなりとて、頗る參詣の徒多し。落合村の藥王院奉祀す。

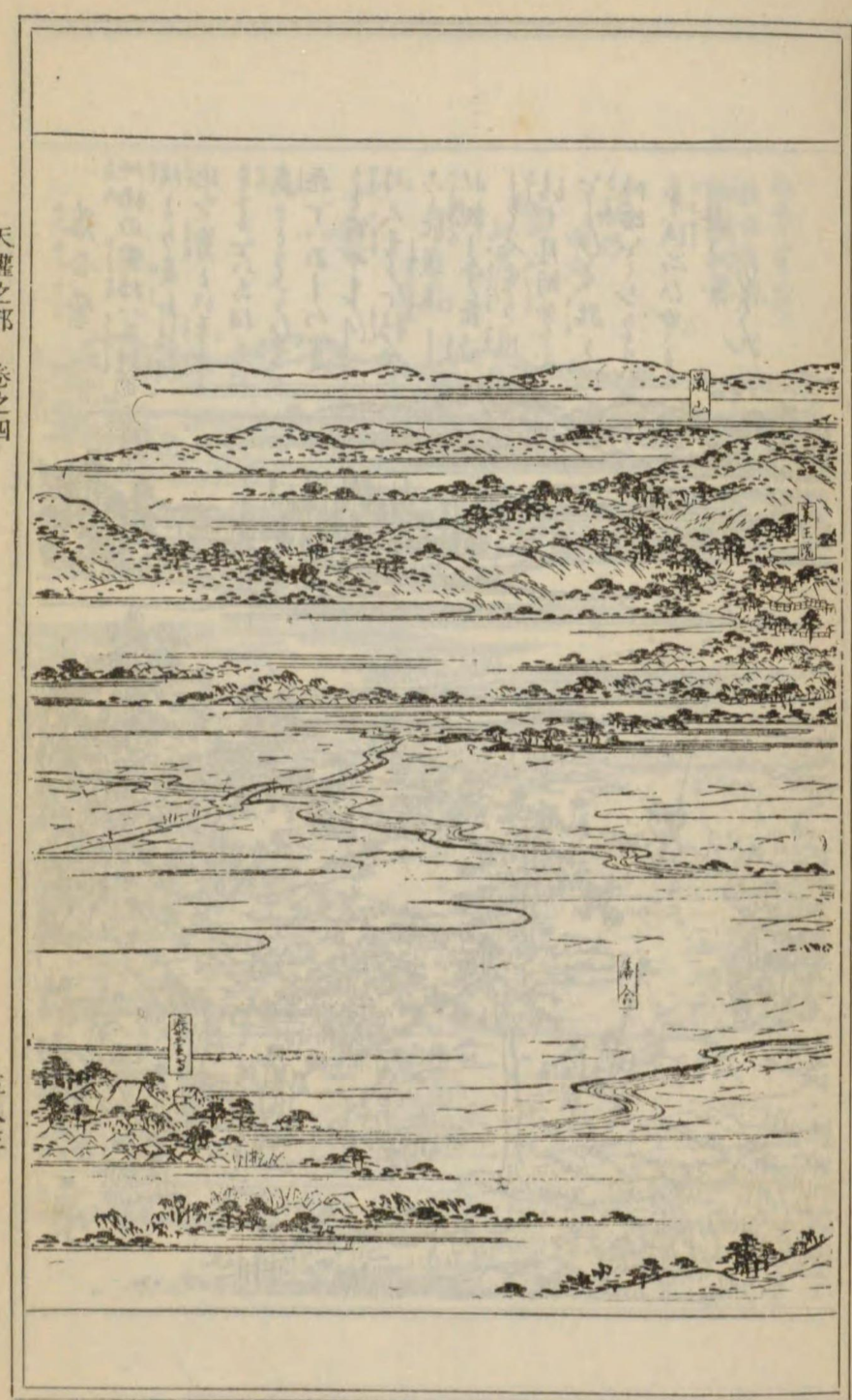
黄龍山泰雲寺　同所上落合にあり、黄檗派の禪林にして、花洛萬福寺に屬す。本尊如意輪觀世音の像は、天然の石佛にして、當寺の土中より出現ありしといふ。開山は白翁道泰和尚と號す。（木庵和尚の法嗣にして、了然尼の師なり。）二世は了然尼なり。其後法雲院元光尼、（眞田氏の女にして、東福門院の侍女なり。鐵禪和尚の法弟となる。）當寺

藤森
稲荷社
東山

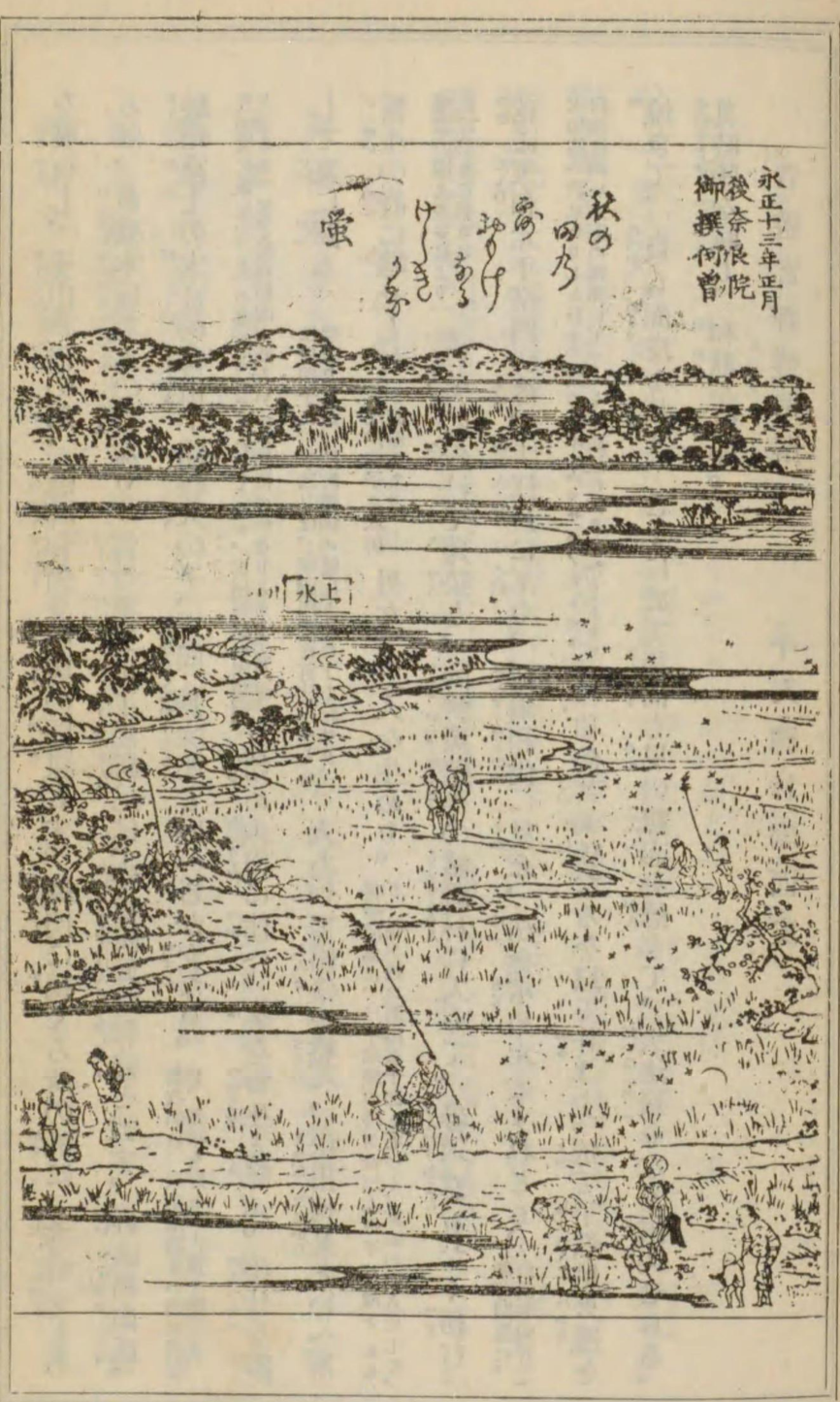
一枚岩
蕗谷の近傍神田
上水の白堀あり
巖水面に彰れ
藍水巖頭に
北水流に鳥居
洞屋の洞等
月の名もあり
秋夜
出題
あり

落合惣圖





落合螢
水川


永正十三年月
後奈良院
御撰何曾
秋の
田の
宮
けしき
螢
水上川

を興復し、千山和尚の師、鐵禪和尚を中興の開祖とす。總門に掲くる所の額に、泰雲寺とあるは、黄檗木庵老人の書なり。當寺第二世了然禪尼は、泰雲院元總和尚と號す。姓は葛山氏、駿州富士の大宮司葛山十郎義久の子、同長次郎といへるが女なり。長次郎は、京師泉涌寺の前に閑居し、茶事を好み、古畫を鑒定す。其頃世に畫兒〔エミ〕の長次と稱せられしとなり。松屋叢話に尾張國人とあり。又了然は植山十藏といへる儒臣の母なりとあり。可考。始め大内に仕へ、名を寄生と呼ぶ。後仕を辭して家に歸る。江戸砂子に、了然尼は、東福門院に宮仕へせし女房なりしが、門院薨御の後尼となるよし記せり。人あつて婚儀を整へ、松田何某といへる醫生の許に嫁せしむ。江戸砂子に松田曉翠とあり。男女子三人を生めり。新著聞集に、三十余歳の時男女三人の子を産すとあり。長男後に葛山長十郎と名づく。林家の門人にして、博覽の聞えあるに上り、紀州頭相に召さる。後夫に告げて薙染し、臨濟黄檗等の諸禪林に入りて、參道怠りなく務む。竟に天和元年辛酉の冬、大江戸に下り、白翁和尚に見え、法を求めんとすれども、新著聞集に、白翁和尚井上大和侯の許にありしとみゆ。紫の一本〔ムラサキノヒトモト〕には、和尚其美貌なるを以て許さず、依て了然尼火攪を白翁和尚は木庵の徒弟にして、その駒込に住まれたりとあり焼きて、自ら面皮を焦す。こゝに於て和尚も尼の懇志を感じて、大法殘りなく附與せらる。其時頌を賦し、和歌を詠ず。

昔遊宮裡燒鬼瞬　今入禪林燎面皮

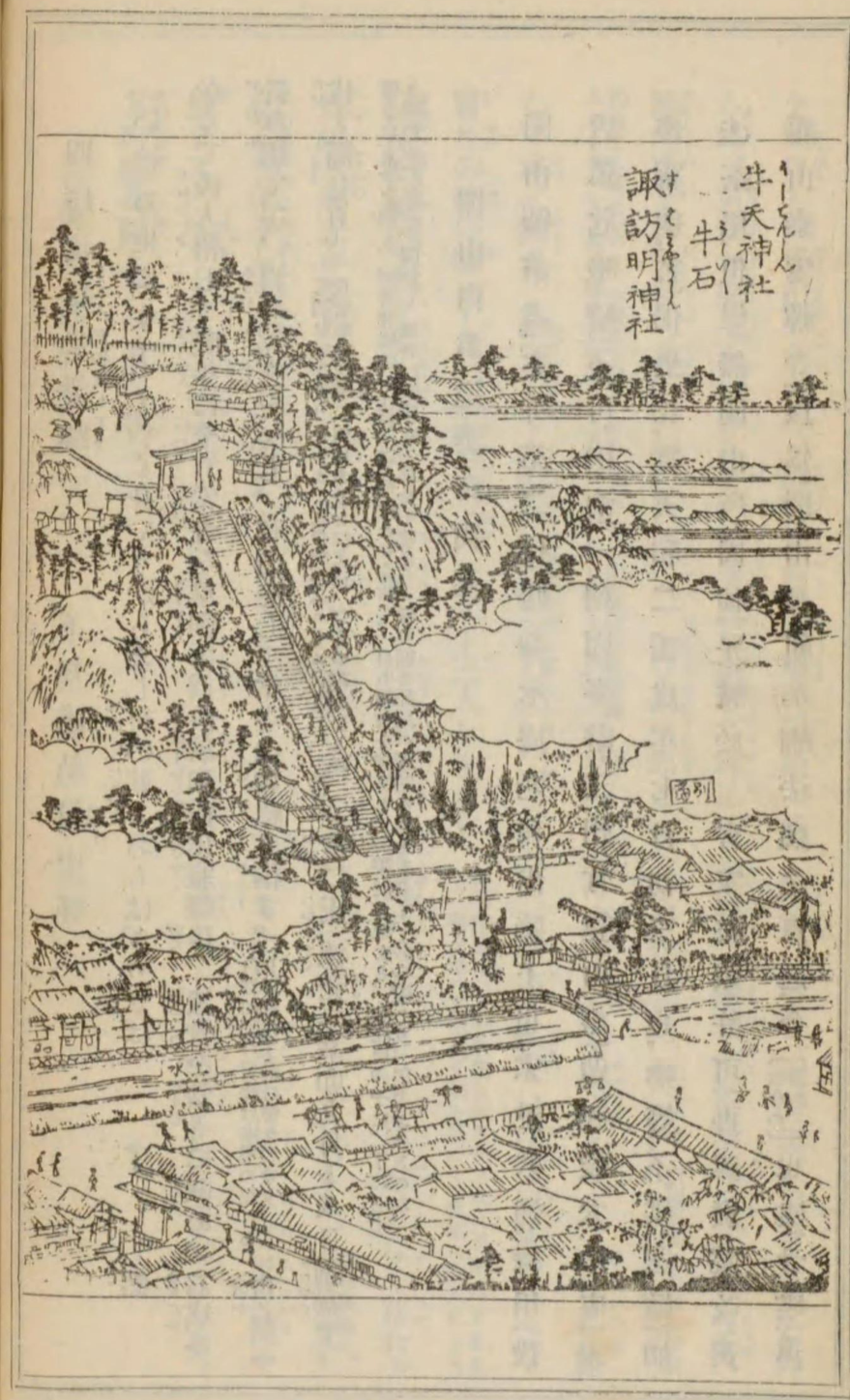
四序流行更無跡　不知誰是箇中移 イニ又如此トアリ

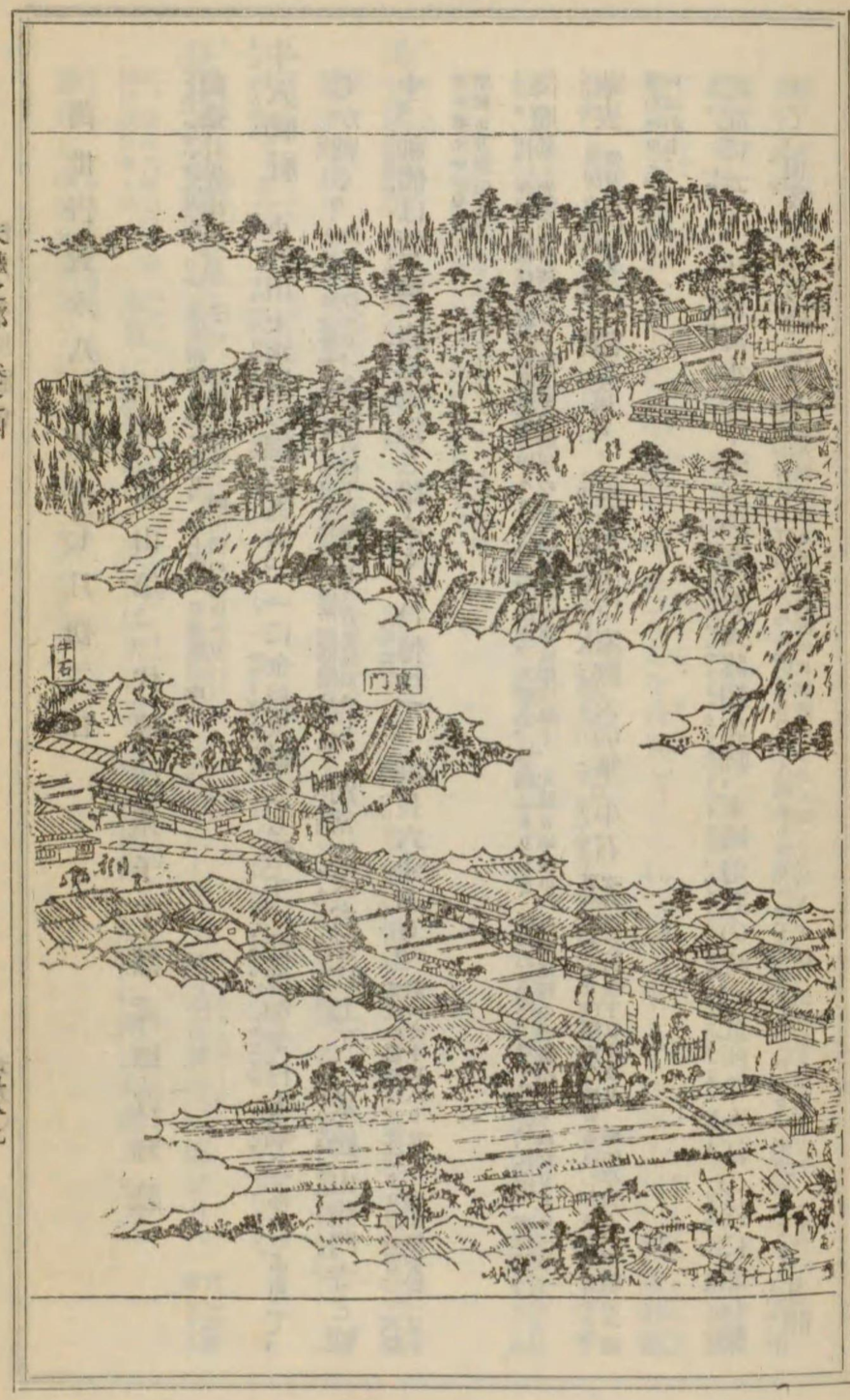
いける世にすてゝやく身やうからまし終の薪とおもはざりせば　了然

かくて後大悟し、晩年に至り當寺を草創す。白翁和尚化寂の後、遺骨を當寺に收め、石塔を營み建てて、自ら銘文を製し、和尚をして當寺の始祖と稱す。白翁和尚の肖像は木尊の左にあり、右に了然の像を置けり。自ら二代と稱せり。其頃は尼寺なりといふ。江戸鹿子〔エドカノコ〕に、比丘尼橋は尼寺の前にありと云ふは、當寺の事を云ふ歟。竟に正德元年辛卯九月十八日歸寂す。當寺に石塔を築く。新著聞集に、江戸近き落合といふ所にて、自ら精舍を建立し、一栖院と號すと。又江戸砂子に、了然尼市ケ谷の末に尼寺を開創し。彼寺に夫晩翠の墓をゝ建る、寺の額も此尼の筆跡なりとありて、共に違へり。猶考ふべきのみ。

開山白翁道泰和尚墓

開山師翁者。本寺第二代賜紫木庵老和尚嫡子也。宗說共通。機用殺活。孤危嶮峻。不可湊泊。一朝因事辭三州竹篦山。嘉遁武陵大休庵。未幾羅病。書偈坐化。實天和二壬戌年七月初三日也。總等不堪悲歎。如法荼毘。但恨無開山所因伸。舁誠於官家。終蒙許可。再興廢院。改黄龍山泰雲禪寺。以爲開山鼻祖。奉酬法類之恩之。令〔也今の誤か〕也建骨塔。遺


牛天神社
牛石
諏訪明神社


牛石
裏門

萬世。岩寶永八年卯年七月初三日

當山第二代傳法弟子了然元總百拜識

蘭臺井先生之墓　同じ朋塔の中にあり。井上氏、名通熙、字子〻、嘉善と稱す。岡山侯の儒臣たり。

牛天神社　小石川上水堀の端にあり。一に金杉天神とも稱す。此地を金杉と唱ふるによりて、しか號く。金杉古は金曾木に作る。小田原北條家の所領役帳に、此地名を注せり。金剛寺の條下に詳なり　合せ見るべし。別當は天台宗にして、泉松山龍門寺と號す。神體は菅神自ら彫造し給ふといひ傳へて、御長六寸あり。當社の舊地は、社地より東の方、今水府君の邸中に入りたり。神木船繋松（フナツナギマツ）も同所にありと云ふ。

降魔狗　社壇に收む。鎌倉佛師運慶の作なりといふ。往古、大猷公、禁闕にありしを、光圀卿に賜はせられしを、豐州の大守頼常君、當社崇敬厚く、元祿五年壬申、社壇重修の頃寄附せられたりといへり。

華表　鳥居の額は、頼常君寄附あり。

額　天滿宮　近衛内大臣家熙公の筆。牛石　裏門坂の下り口隅の方にある巨石をさして名づく。次の社記の條下に詳なり。南向亭云く、頼朝公の腰掛石なりと。いぶかし。

社記に云く、往古壽永元年壬辰の春、右大將頼朝卿、東國追討の時、此所の入江の松に船を繋ぎて、和波を待ち給ふ。此邊上古は入江にて、今の飯田町の東入堀のあたり（續きてありしといへり。牛天神のそと の坂を綱干坂と呼び、又同所に蛸殼坂などいひてあるも、入江に依りたる舊稱なりといへり。其間夢に菅神牛に乘じ、頼朝卿に一の幸あらん事を示し給ひ、武運滿足の後は、必ず小社を營み報ずべしと託し給ふ。頼朝卿夢覺めて後、傍を顧み給へば、一の盤石ありて、夢中菅神乘じ給ひたりし牛に髣髴たり。依て是を奇異とせられしが、果して同年の秋、頼家卿誕生あり。又翌年癸巳の夏は、動かずして平家悉く敗れしかば、其報賽として、元曆元年甲辰、此御神を此地に勸請ありて、神領等寄附ありしと云々。又江戸名勝志といへる草紙に、北條氏康兵を起されし頃、夢中に菅神牛に乘じて降臨あると見て後、此地に天滿宮を勸請なし奉りしを、其後家臣遠山丹波守當社を修營せりと。上の社記に異なり。

諏訪明神社　同所上水堀より南の方、諏訪町にあり。祭神は健御名方命なり。相傳ふ、明德元年庚午、牛天神の別當梅本坊乘觀法印靈告あるにより、勸請なし奉ると云々。土人云く、此地舊名を忍ぶの森と云ふといへり。梅本坊は今の龍門寺是なり。祭禮は毎歲正月と七月の廿七日なり。

慧日山金剛寺　同所上水堀の端にあり。曹洞派の禪刹にして、駒込吉祥寺に屬せり。昔は臨濟宗なりしが、永正六年己巳曹洞宗に改むるといふ。本尊は釋迦如來、開山は天目忠峯普應國師、中興は用山和尚といふ。

鎌倉右府將軍實朝公碑　後の山の半腹にあり。永正の頃造立せし碑なり。其碑面に誌して云く、